

## 第7回 八戸市生活支援体制整備推進協議会

平成31年2月19日（火）13時30分～  
八戸商工会館 6階 会議室B

### 次第

#### 1 開会

#### 2 報告案件

報告1	住み慣れた地域での生活を考えるワークショップの実施状況について	※資料1
-----	---------------------------------	------

---

報告2	平成31年度八戸市地域包括ケアシステム推進学生サポーター養成研修について	※資料2
-----	--------------------------------------	------

---

#### 3 審議案件

案件1	第2層生活支援コーディネーターの変更について	※資料3
-----	------------------------	------

---

案件2	高齢者の社会的居場所に関する調査について	※資料4～6
-----	----------------------	--------

---

案件3	住み慣れた地域での生活を考えるワークショップの今後の展開について	※資料7
-----	----------------------------------	------

---

案件4	シニアカフェについて	※資料8
-----	------------	------

---

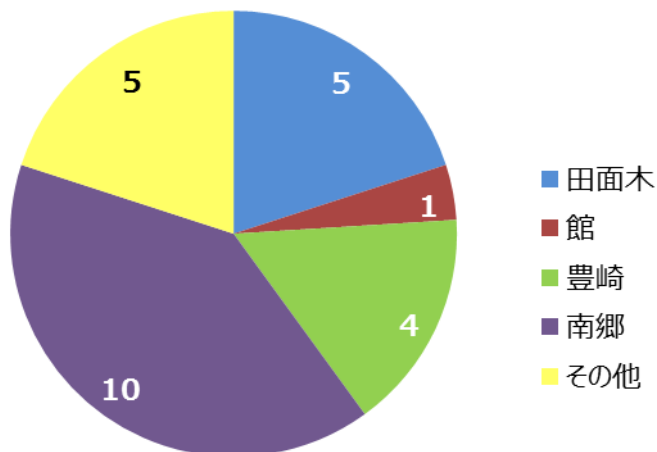
#### 4 閉会

## 住み慣れた地域での生活を考えるワークショップの実施状況について (第6回 住み慣れた地域での生活を考えるワークショップ アンケート集計結果)

1. 実施日 平成30年11月25日(日)
2. 対象地区 田面木、館、豊崎、南郷
3. 配布数 43枚 ※当日の参加者数(学生17人、地域関係者26人)
4. 回収数 42枚 ※回収率97.8%(学生17人、地域関係者25人)

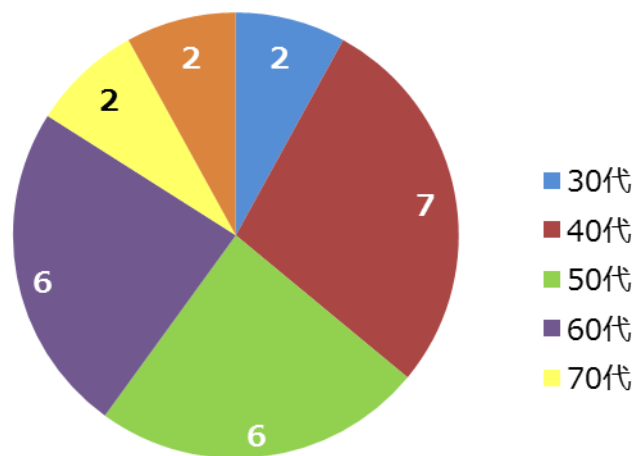
【地域住民】 あなたは、どちらの地区にお住まいですか。

地区名	人数
田面木	5人
館	1人
豊崎	4人
南郷	10人
その他	5人
計	25人



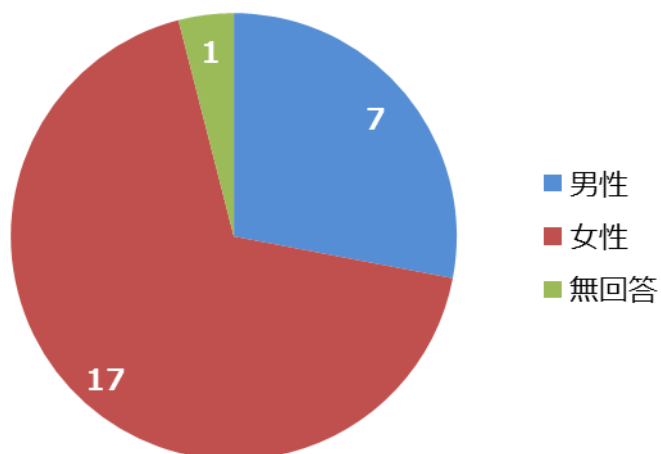
【地域住民】 あなたは、何歳ですか。

年代	人数
10代	0人
20代	0人
30代	2人
40代	7人
50代	6人
60代	6人
70代	2人
80代	2人
90歳以上	0人
計	25人



【地域住民】 あなたの性別を教えてください。

性別	人数
男性	7人
女性	17人
無回答	1人
計	25人



【地域住民】 あなたが地域で行っている活動のうち最も長い活動を教えてください。

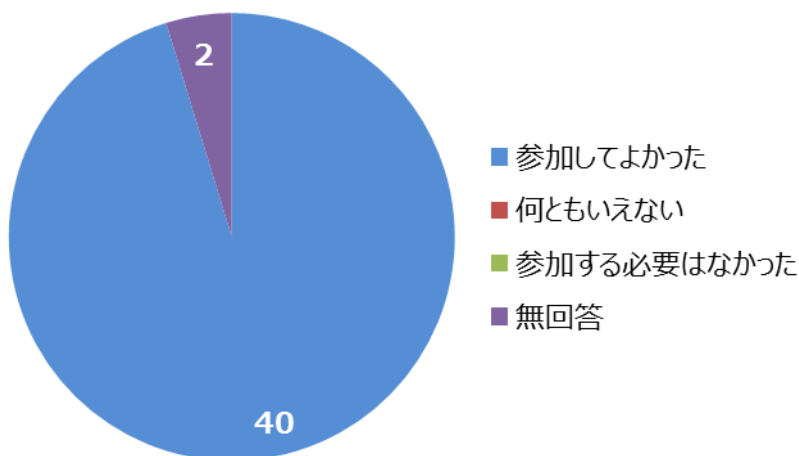
活動内容	～3年	3～5年	5～10年	10～20年	20年以上	無回答	計
ボランティア		1人					1人
P T A			1人				1人
認知症サポーター						1人	1人
民生委員	1人	1人		1人			3人
地域生活支援 (障がい者対象)		1人					1人
地球温暖化防止活動			1人				1人
朝もやの館		1人					1人
無回答	1人					15人	16人
計	2人	4人	2人	1人	0人	16人	25人

※活動内容の「無回答」には「特になし（1名）」を含む。

【共通】 ワークショップに参加した感想を教えてください。

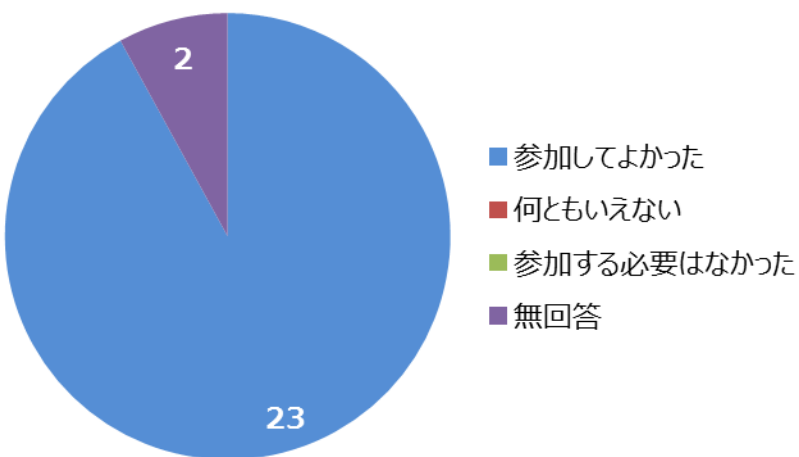
(1) 全体

	人数
参加してよかった	40人
何ともいえない	0人
参加する必要はなかった	0人
無回答	2人
計	42人



(2) 地域住民のみ

	人数
参加してよかった	23人
何ともいえない	0人
参加する必要はなかった	0人
無回答	2人
計	25人



※学生は「参加してよかった」が17名（100%）だったので省略。

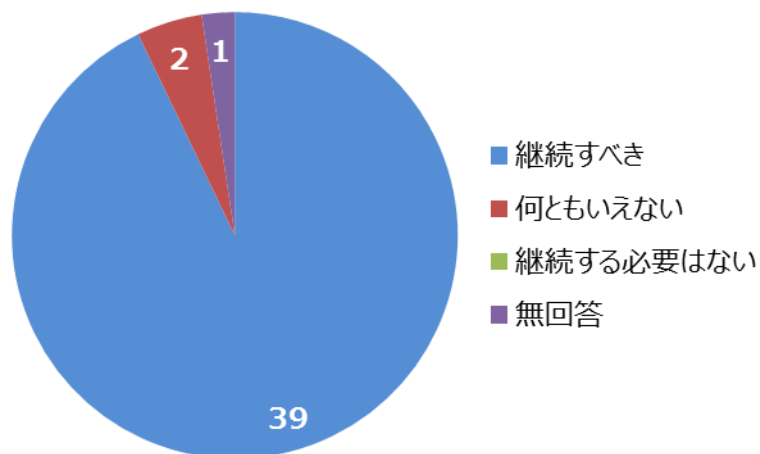
### (3) 自由記述

参加してよかった	
地域住民	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の住んでいるところを改めて考えることができた。</li> <li>○改めて住んでいる地区のことが見えて、またと思いました。</li> <li>○地域の人と話す機会が持てたのでよかった。</li> <li>○別々の視点で地域について考えることができた。</li> <li>○他の地区の課題を聞くことができたのでよかったです。</li> <li>○市内の地域で困っていることが聞けてよかった。</li> <li>○他地域のこと、今後のアイデアを聞くことができよかった。一人では思い浮かばないと思った。</li> <li>○各地区の様子がよくわかった。</li> <li>○地域のことがわかりよかった。</li> <li>○いろいろな意見・現状が知れた。</li> <li>○初参加のため。</li> <li>○同じような問題があると知りました。</li> <li>○地域ごとの課題の解決に向けた勉強だったので、地域の実情がわかりました。高齢系の課題が勉強できました。</li> <li>○学生・地域の人と話をする機会があってよかった。</li> <li>○学生さんや地域住民の方と一度にお会いして、地域のことをこんなに話せる機会がないので、とても勉強になりました。</li> <li>○実情がわかり、今後の参考にして生活していきたい。</li> </ul>
学生	<ul style="list-style-type: none"> <li>○それぞれの地域特性を知れた。</li> <li>○また新しく他の地域のことを知ることができました。</li> <li>○今まで関わりのなかった地域を知ることができる。</li> <li>○自分が参加した地域の特徴だったり、メリット面・デメリット面等を把握することができ、また、改善策等も考えることができたのでよかった。</li> <li>○あまり知らない地域であったけど、これまでのワークショップから問題を予想して深掘りでき、問題を確認できたから。</li> <li>○多世代で交流する場になった。知識が増えた（八戸・福祉的）。</li> <li>○知らなかった良い点を知れた。</li> <li>○地域のことを知れた。</li> <li>○解決に向けた具体的な案が出てきた。</li> <li>○地域の人たちの話を聞いて、その地域のことを知れた。</li> <li>○地域でのメリット、デメリットが明確にわかる。</li> <li>○初めて会った人と話すことができる力が身につく。</li> </ul>
無回答	
地域住民	<ul style="list-style-type: none"> <li>○初めて参加いたしました。次回も参加させていただきたいと思いました。</li> </ul>

【共通】 ワークショップは今後も継続すべきだと思いますか。

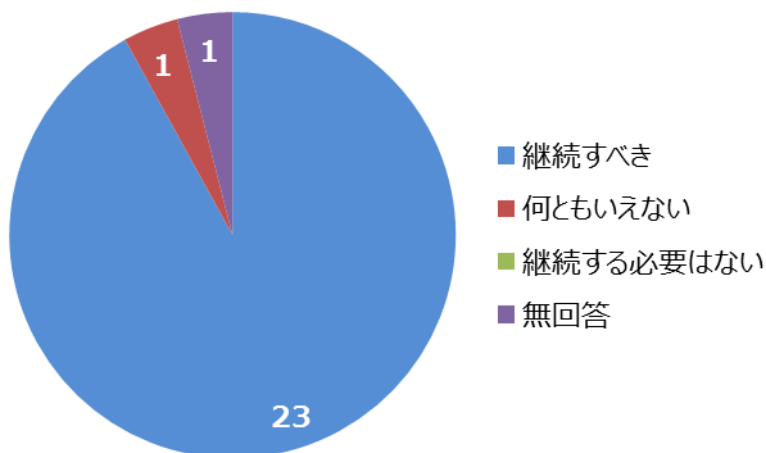
(1) 全体

	人数
継続すべき	39人
何ともいえない	2人
継続する必要はない	0人
無回答	1人
計	42人



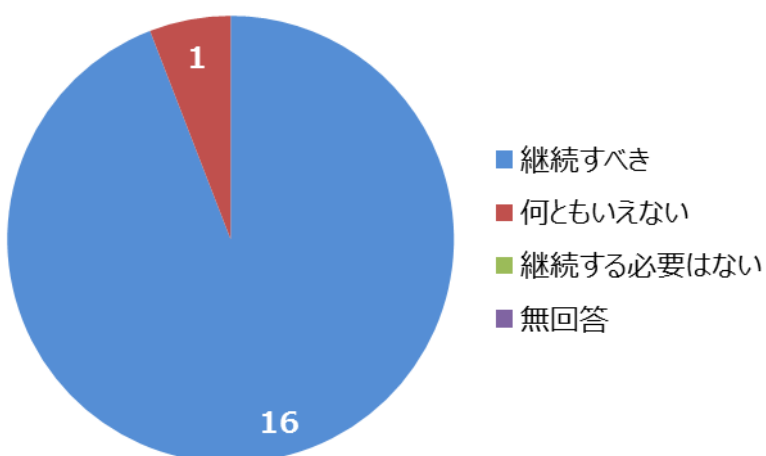
(2) 地域住民のみ

	人数
継続すべき	23人
何ともいえない	1人
継続する必要はない	0人
無回答	1人
計	25人



(3) 学生のみ

	人数
継続すべき	16人
何ともいえない	1人
継続する必要はない	0人
無回答	0人
計	17人



#### (4) 自由記述

継続すべき	
地域住民	<ul style="list-style-type: none"> <li>○もっとたくさんの世代の人と共に考えたい。</li> <li>○様々な世代の参加があっても良いと思った。</li> <li>○他のグループの意見も聞けるので参考になる。</li> <li>○地区での課題解決に取り組める。</li> <li>○全員が“そうだね”と思わないと進まないから。</li> <li>○他地域のこと、今後のアイデアを聞くことができよかった。一人では思い浮かばないと思った。</li> <li>○住民のマンパワーを引き出すために必要。</li> <li>○継続すべきだと思うが、実際に住んでいる地域の方の参加が少ないので、もう少し考えた方がいいと思う。</li> <li>○とても良い経験ができました。</li> <li>○地域での活動や悩みが理解できる。</li> <li>○地域の問題だけではなく、そこから解決に向けて考えていきたい（行政を巻き込んで）。</li> <li>○今日だけのことではなく、何か形になるような結果を期待します。</li> </ul>
学生	<ul style="list-style-type: none"> <li>○面子の入れ替え等で新しい意見が出ると思った。</li> <li>○自分にとってもとても良い経験になったので継続してほしいです。</li> <li>○各地域の問題点を確認し、改善方法を考えることができる。</li> <li>○高齢者の方がより暮らしやすくなるような改善策を見つけることができるから。</li> <li>○若い人との交流の場が楽しいと言っていたし、自分たちも楽しかった。知識や情報の交換場所になる。</li> <li>○すばらしい交流機会。</li> <li>○みんなが楽しそうだから。</li> <li>○定期的にすることで、各地域のことが知れる。</li> <li>○いろいろな地区の事業を知れて良い。</li> <li>○八戸の特徴を知ることができる。</li> </ul>
何ともいえない	
地域住民	<ul style="list-style-type: none"> <li>○いろいろな問題点が出ましたが、実現はできるのでしょうか？</li> </ul>
学生	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域の方々だけで話をするともっと活発に話が進むが、地域じゃない人がいると違った視点で話をすることができるのでわからない。</li> </ul>

【共通】 ワークショップの改善点があれば教えてください。

地域住民	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域で開催してほしい。</li> <li>○もっと多くの人に認知されればと思います。</li> <li>○継続すべきだと思うが、実際に住んでいる地域の方の参加が少ないので、もう少し考えた方がいいと思う。</li> <li>○もっと話し合いが必要と思う。</li> <li>○まとめの仕方、わかりやすく説明すべき。</li> <li>○良かった。</li> </ul>
学生	<ul style="list-style-type: none"> <li>○資料の字が小さいのではないか。</li> <li>○学生の発表だけになってしまう。地域の人も発表してくれれば、説得力もある。</li> </ul>

【地域住民】 学生が参加したことについて思ったことを教えてください。

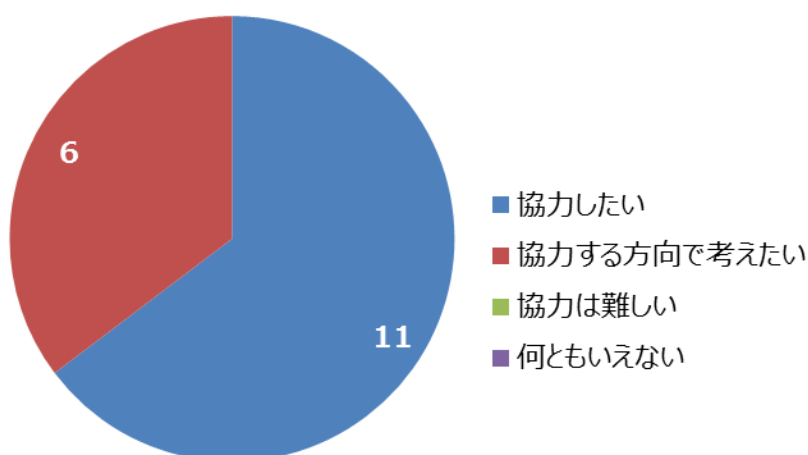
地域住民	<ul style="list-style-type: none"> <li>○違った視点から考えることができた。自分の住んでいるところを説明する機会を持つことができた。</li> <li>○とても良いと思います。住んでいる地区以外のことがわかると思う。</li> <li>○サポートしてもらえたので、意見・発言がたくさん出てよかった。</li> <li>○若い学年が参加することで（地域の人ではなくても）大学での学びを聞くこともできた。</li> <li>○色々な視点での意見があるのでよかった。</li> <li>○フレッシュでよかった。これからを考えるきっかけになればよいと思う。</li> <li>○若い世代の意見を聞くことができる。地域を知ってもらえる。</li> <li>○大変ありがたいです。</li> <li>○いろんな世代の方が地域の方法を共有することができるのでよかったと思う。</li> <li>○学生さんの意見が聞けてよかったです。</li> <li>○若い人の考えがもっと知りたい。意見等も。</li> <li>○若者の意見が良かった。</li> <li>○次世代を担う学生たちと交流ができる点がよかった。</li> <li>○記録、発表、ありがとうございました。</li> <li>○学生さんの意見は的を得ていたり、すごくまとめ役になった。</li> <li>○学生さんの視点や現状を知ってもらえたと思う。</li> <li>○若い方々であっても、リーダーシップを発揮し、引っ張ってくださった姿に感動しました。</li> <li>○よい。</li> <li>○良かった。</li> </ul>
------	--

【学生】 地域の方と接して思ったことを教えてください。

学生	<ul style="list-style-type: none"> <li>○その地域の問題点を本人から聞いたのでよかった。</li> <li>○地域のこと、人、活動について広く知っていて、とても勉強になりました。</li> <li>○自分たちの地域のことを知ってもらおうと良いことや悪いことをたくさん話してくれる。</li> <li>○自分の知らないその地域のことや、暮らしやすくするためにどうすればよいのかみんなで考えることができ、様々な意見を交換することができたのでよかったです。</li> <li>○その地域の実情を知ることができた。</li> <li>○知らなかった地域の情報を知ることができた。</li> <li>○3回参加して高齢化問題と交通機関の問題が共通していた。</li> <li>○現状の課題はたくさんあることが学べた。一人暮らしがネガティブと捉えがちだけど、本当はそうなのか、考えることができた。</li> <li>○それぞれの地域で同じような問題があるのだと思った。</li> <li>○知識を増やせた。</li> <li>○とても地域思いだなと。</li> <li>○いろんな方々がいて楽しかった。</li> <li>○現状をよく理解していた。</li> <li>○よく考えて暮らしている。</li> <li>○ケアマネジャーの人ならではの話が聞けたりして良い時間だった。</li> <li>○知らなかった地域の特徴を知ることができよかった。地域の方と一緒に問題点、改善点を一緒に考えることができた。リアルな意見を聞くことができた。</li> <li>○意外とフレンドリーな方が多く話しやすい。</li> </ul>
----	---

【学生】 ワークショップに参加した地域の方々は様々な活動をしています。もし、地域の方から「協力してほしい」と言われたら、どう思いますか。

	人数
協力したい	11人
協力する方向で考えたい	6人
協力は難しい	0人
何ともいえない	0人
計	17人





■自由記述

協力したい
<input type="checkbox"/> 交通費が出るか、交通手段を用意してほしい。 <input type="checkbox"/> 交通費のサポートが欲しいです。 <input type="checkbox"/> 見学をセッティングして欲しい。 交通費が出るとよい。 事前に勉強会をして欲しい。 何人か一緒だと安心する。 <input type="checkbox"/> ゼミとして参加したい。 <input type="checkbox"/> 5人組みで動くのが良いと思う。 <input type="checkbox"/> 交通費、地域の特徴を知る
協力する方向で考えたい
※意見なし

【共通】 その他、ご意見・ご感想がありましたら、お聞かせください。

地域住民	<input type="checkbox"/> 高齢者が集まりやすい工夫が必要かと思う。また、町の自治会の方も他の用事と重なって来られない人もあり、積み重ねることが大切だと思う。 <input type="checkbox"/> ありがとうございました。 <input type="checkbox"/> 参加できてよかったです。
学生	<input type="checkbox"/> 各地域ごとの資料があって助かりました。

## 平成 31 年度 八戸市地域包括ケアシステム推進学生サポーター養成研修について

## 1 開催日時

平成 31 年 5 月頃

## 2 開催場所

未定 ※平成 30 年度は八戸学院大学の講義室を借用

## 3 目的

生活支援体制整備事業に係るワークショップ（通称：地域での生活を考えるワークショップ）に参加する意向がある学生に対して、地域包括ケアシステム及びワークショップの基礎理解を促すための研修を実施することで、より能動的に参加できるようにする。

## 4 主催

八戸市（高齢福祉課）

## 5 参加条件

- 1) 八戸学院大学及び八戸学院大学短期大学部の正科生であること
- 2) 生活支援体制整備事業に係るワークショップへの参加意向を有すること
- 3) 所属先（担任等）からのフォローアップを受けられる者

## 6 定員

20 名

※新たにゼミに所属する 2 年生が主な対象になると思われるため、実際には 5 名程度の参加を見込んでいる。

※平成 30 年度に受講した者でも希望する場合は再受講を認める。

## 7 プログラム

日時	科目	対応者
調整中	八戸市の現状と高齢者福祉施策について 八戸市の生活支援体制整備事業の展開について (60 分)	高齢福祉課職員
〃	地域包括ケアシステムの基礎理解について (60 分)	小柳 達也氏 (八戸学院大学)
〃	グループワークの基礎理解と基本的技能について (120 分程度)	三岳 貴彦氏 (八戸学院大学短期大学部)

## 第2層生活支援コーディネーターの変更について

### I 経緯

- ・第5回協議会（平成30年8月30日）において、第1層生活支援コーディネーター2名と第2層生活支援コーディネーター24名が承認された。
- ・このたび、人事異動により第2層生活支援コーディネーターに1名の欠員が生じたことになったため、当該職員が所属する法人に対し平成30年12月12日付で欠員分の推薦依頼を行ったところ、下記のとおり回答があった。

### II 前任者及び後任者

#### 《異動者（前任者）》

法人名	包括名	担当地区	名前	職種
社会福祉法人寿栄会	寿楽荘	市川、根岸	伊藤 信明	主任介護支援専門員



#### 《新たに推薦された者（後任者）》

法人名	包括名	担当地区	名前	職種
社会福祉法人寿栄会	寿楽荘	市川、根岸	尾坪 美恵子	主任介護支援専門員

### III 引き継ぎ等

前回の第2層生活支援コーディネーター承認時には、生活支援体制整備事業及び八戸市の取組を伝える研修を実施した。今回は前任者から引き継ぎで対応することとしたいが、後任者が希望する場合は個別に研修（下図1）を実施することとしたい。加えて、他の事業体を実施する生活支援コーディネーターに関する研修への参加も促している。

図1 市が実施した第2層生活支援コーディネーターに対する研修の内容

実施日時	平成30年7月23日 13時30分～15時00分 平成30年7月30日 13時30分～15時00分 ※高齢者支援センターの運営に配慮して同内容の研修を2回実施することとし、いずれかの回に参加してもらうこととした。
参加者	第2層生活支援コーディネーター候補者24名
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活支援体制整備事業の内容</li> <li>・生活支援体制整備事業の必要性</li> <li>・八戸市の取組</li> <li>・生活支援コーディネーターの活動</li> </ul>

### IV その他

今後、人事異動で第2層生活支援コーディネーターに欠員が生じたときは、原則として今回と同様の対応を行う。

【参考】第2層生活支援コーディネーター一覧（平成31年2月19日以降）

法人名	包括名	担当地区	名前	職種
社会福祉法人 スプリング	福寿草	大館、東	川井 純子	主任介護支援専門員
			佐々木 廣平	看護師
社会福祉法人 同伸会	瑞光園	白銀南、鮫、 南浜	内澤 菜美輝	社会福祉士
			笹川 佳子	主任介護支援専門員
社会福祉法人 寿栄会	寿楽荘	市川、根岸	尾坪 美恵子	主任介護支援専門員
			井ノ上 洋一	社会福祉士
株式会社 ゆとり	ゆとり	南郷	下平 敦子	主任介護支援専門員
			磯島 祐美子	看護師
医療法人 康和会	ちょうじやの森	長者、 白山台	椛本 隆	主任介護支援専門員
			小林 紗知子	社会福祉士
一般社団法人 八戸市医師会	八戸市医師会	柏崎、吹上	中里 和江	看護師
			尾崎 景子	看護師
社会福祉法人 みやぎ会	みやぎ	三八城、 根城	坂本 美華	社会福祉士
			櫻橋 和加子	主任介護支援専門員
社会福祉法人 ファミリー	ハピネスやくら	田面木、館、 豊崎	小泉 明美	主任介護支援専門員
			佐藤 ひとみ	社会福祉士
社会福祉法人 八陽会	修光園	是川、 中居林	高奥 佳代子	社会福祉士
			林崎 絵里香	看護師
医療法人 仁泉会	えがお	白銀、湊	渡部 哲也	社会福祉士
			高田 恒	主任介護支援専門員
公益財団法人 シルバーリハビリテーション協会	はくじゅ	下長、上長	久保沢 光浩	社会福祉士
			佐々木 ひとみ	主任介護支援専門員
医療法人 杏林会	アクティブ24	小中野、 江陽	堀内 博子	主任介護支援専門員
			吉田 由美子	看護師

## 平成 30 年度 高齢者の社会的居場所等に関する調査について

## I 経緯

第 3 回協議会においてまとめた「生活支援体制の整備に関するニーズへの対策」の一環として、高齢者の居場所づくりに関する方策を検討するための基礎資料を得ることを目的に、調査を行うこととした。なお、本調査は八戸学院大学研究倫理委員会での承認を受けてから実施している。

## II 調査概要

## 1 目的

地域における高齢者の居場所へのニーズやその充足のための実践について探索的に明らかとすることを目的とする。

## 2 実施体制

役割	担当者
調査実施主体：調査概要作成、アンケート項目原案作成、データ入力及び回答済みアンケート用紙の保存	八戸市高齢福祉課
研究責任者：研究計画作成、アンケート項目作成、データ分析及び報告書案作成、八戸学院大学研究倫理委員会への対応	小柳達也 (八戸学院大学)
調査協力：アンケート回答及び回収、調査会場の提供、データ分析結果へのコメント	社会福祉法人白銀会

## 3 調査方法

社会福祉法人白銀会「地域交流スペースそよ風」を利用する住民約 50 名及び同法人の同事業所での業務に携わる職員に対してアンケート調査を実施する。

## 4 調査期間

平成 30 年 9 月（約 1 か月間）

## 5 調査結果の分析方法

単純集計、クロス集計、統計的検定、ロジスティック回帰分析、テキストマイニング分析、理論的分析等。

## III 進捗状況

平成 30 年 10 月末	データ入力及び分析作業開始
平成 30 年 11 月 28 日	八戸市生活支援体制整備推進協議会に進捗状況を報告
平成 31 年 2 月 5 日	社会福祉法人白銀会職員を対象に中間報告会を実施
平成 31 年 2 月 19 日	八戸市生活支援体制整備推進協議会に報告書案を提出

平成 30 年度  
八戸市における高齢者の居場所  
に関する調査報告書（案）

～社会福祉法人白銀会「地域交流スペースそよ風」利用者に対する調査編～

平成 31 年 1 月 31 日  
八戸市高齢福祉課

## I. 調査概要

### 1. 調査経緯

八戸市では、平成 30 年度より八戸市生活支援体制整備推進協議会が設置され、多様な主体による自助や互助を推進するための各種検討が組織的に行われている。また、本事業の展開のなかで、地域住民、八戸学院大学の教員、同大学の学生(小柳達也研究室所属生)及び八戸市が連携・協力する「住み慣れた地域での生活を考えるワークショップ」(以下、ワークショップ)が市内各地で開催され、住民ニーズの把握と解決策の検討が同時に行われている。

平成 30 年 2 月 23 日、鮫地区、南浜地区及び白銀南地区を対象として実施された第 3 回ワークショップにおいて、参加者から「高齢者の居場所がない」という声が聞かれた。それが契機となり、同年 3 月 28 日に開催された第 3 回八戸市生活支援体制整備推進協議会にて八戸市内の高齢者の居場所に関する調査の実施について審議され、承認された。

その後迅速に、本事業の第一層生活支援コーディネーターによって市内における高齢者に対する居場所提供サービスに関する取り組みの先進事例について調査が行われた。結果として、昨今の社会福祉法人改革の潮流のなか、平成 29 年度より、社会福祉法人白銀会(以下、白銀会)「地域交流スペースそよ風」(以下、そよ風)において、その様なサービスの提供が行われていることについて確認された(表 1.1)。まだ萌芽的な取り組みであるが、一定程度の利用者が現れ、5 種類のプログラムを中核として、地域に根ざした居場所提供サービスが提供されているとのことであった。そこで、同法人の御理解と御協力のもと、そのサービスの利用者と従事者双方に対して実態把握調査を実施した。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> 本調査においては、利用者に対する調査をまとめた「利用者編」と従事者に対する調査をまとめた「従事者編」の合計 2 編の報告書を作成している。

表 1.1 そよ風の概要

所在地	八戸市堀ノ外9-3										
開設日	平成29年4月1日										
利用対象	基本的には、八戸市内の地域住民が利用対象とされている。 <sup>2</sup> 年齢や障害の有無などは不問である。										
1日あたりの参加者数	その日によるが、多いときで1日50名程度である。										
プログラム	<table border="0"> <tr> <td>みんな食堂(毎月5日)</td> <td>: 食事の提供(子ども食堂の拡大版)</td> </tr> <tr> <td>おもいで学校(毎月10日)</td> <td>: 地域回想法</td> </tr> <tr> <td>オレンジカフェ(毎月15日)</td> <td>: 住民間・世代間交流</td> </tr> <tr> <td>元気はつらつクラブ(毎月20日)</td> <td>: 介護予防・健康づくりのための運動</td> </tr> <tr> <td>ハーモニーの会(毎月25日)</td> <td>: 音楽を取り入れたレクリエーション</td> </tr> </table>	みんな食堂(毎月5日)	: 食事の提供(子ども食堂の拡大版)	おもいで学校(毎月10日)	: 地域回想法	オレンジカフェ(毎月15日)	: 住民間・世代間交流	元気はつらつクラブ(毎月20日)	: 介護予防・健康づくりのための運動	ハーモニーの会(毎月25日)	: 音楽を取り入れたレクリエーション
みんな食堂(毎月5日)	: 食事の提供(子ども食堂の拡大版)										
おもいで学校(毎月10日)	: 地域回想法										
オレンジカフェ(毎月15日)	: 住民間・世代間交流										
元気はつらつクラブ(毎月20日)	: 介護予防・健康づくりのための運動										
ハーモニーの会(毎月25日)	: 音楽を取り入れたレクリエーション										
利用料	無料										
従事者	白銀会の職員										
経緯	<p>白銀会では、1980年代後半より、地域に密着した保育や高齢者福祉に関する事業が展開されている。また、平成23年の東日本大震災後には、法人職員が一体となった住民支援が実施されるなど、地域に根ざした福祉実践が続けられている。</p> <p>そのようななか、平成27年頃より、全国的に社会福祉法人による地域貢献活動が話題にのぼるようになったため、新たな取り組みについて検討されることになった。平成29年1月、本法人職員によって「子ども食堂を全世代向けに拡大して実施してはどうか」と提案されたことが契機となり、そよ風の構想がはじまった。職員間での検討のみならず、八戸市高齢福祉課を含む関係各所との意見交換が行われた後、中核とするプログラムなどの内容がまとめられた。そして、平成29年度より、主なコンセプトに「高齢者を含む地域住民への居場所提供」を据えたサービスの提供が開始されている。</p>										

<sup>2</sup> 当初は、白銀会のある白銀町周辺の地域住民が利用対象として想定されていたが、平成30年9月現在、八戸市内の幅広い地域の住民から利用されている。また、人数は多くないが、市外から通う利用者もみられるようになっている。



## 2. 調査目的

本調査の目的は、八戸市の生活支援体制整備の一環として、そよ風において居場所提供サービスを利用する高齢者の実態について、当事者の意思を含めて把握することである。

## 3. 調査対象

そよ風を利用する八戸市在住の高齢者

## 4. 調査期間

平成30年9月5日～9月20日

## 5. 調査方法

対面法による自記式質問紙調査

## 6. 倫理的配慮

本調査は、八戸学院大学研究倫理委員会の承認を経て実施した(平成30年8月7日承認)。調査者から調査対象者に対して、書面と口頭にて調査協力は強制でないこと、途中の辞退も自由なこと、調査結果は統計的に処理され、個人を特定できない形でデータ化し、八戸市の生活支援体制の整備及び調査研究目的以外には利用しないことについて説明したうえで調査協力依頼が行われた。そして、調査協力を同意をした人に対してのみ調査を実施する体制がとられた。これにより、調査対象者の調査協力に対する任意性の確保に配慮した。

## 7. 回収率

調査票の配布は48件であり、全て回収された(回収率100%)。そのうち、65歳以下の回答者による3件を除き、結果的に45件を有効回収とした。

## 8. 調査項目

「性別」「年齢」「居住地域」「世帯形態」「要介護認定判定状況」「手段的自立能力」「インターネットの利用」「就業形態」「プロダクティブ・アクティビティ」「65歳以降に行ったことのある社会参加活動」「そよ風を知ったきっかけ」「そよ風の初回時の利用目的」「そよ風の利用に対する初回時の心配事」「そよ風の合計利用回数」「そよ風を複数回利用している理由」<sup>3</sup>「そよ風で好きなプログラム」「そよ風の利用が自身に与えた影響」「そよ風の利用料についての考え」「そよ風の適正な利用料についての考え」<sup>4</sup>「八戸地域における高齢者の居場所の有無」「八戸地域において求める高齢者の居場所」「八戸地域における高齢者の居場所の確保・創出・維持についての具体案」「一般的自己効力感」

## 9. 分析方法

基礎統計量の計測を基本としながら、適宜、クロス分析を行った。また、自由記述回答については、全ての記述内容を確認したうえでカテゴリ化を行った。

統計分析には SPSS Statistics24.0 を使用した。

## 10. 本調査において使用する主な概念の定義

### (1) 高齢者

本調査では、国際連合(1956)による報告書「The Aging of populations and its economic and social implications」<sup>5</sup>に基づき、高齢者を「満年齢 65 歳以上の人」と定義した。さらに、「65 歳以上 75 歳未満の人」を前期高齢者、「75 歳以上の人」を後期高齢者と区別して定義した。

### (2) 高齢者の居場所

既存の調査研究による高齢者の居場所の定義は多様であり、統一には至っていない。そのようななか、上野等 (2017)<sup>6</sup>は、高齢者の居場所に関する国内文献について網羅的なレビューを行い、物理的環境を居場所と認識された居場所である「物理的居場所」、人とのつながりや役割が得られるなど、人との関係やつながりを持てる場所と認識される「社会的

<sup>3</sup> 本調査項目については、2回以上利用したことがある人のみを質問対象とした。

<sup>4</sup> 本調査項目については、「無料とすべき」と考える人以外を質問対象とした。

<sup>5</sup> United Nations. The Aging of populations and its economic and social implications. The Dept. 1956.

<sup>6</sup> 上野佳代, 菊池和美, 長田久雄. 国内文献にみる高齢者の居場所に関する研究: エイジング・イン・プレイスにむけて. 老年学雑誌. 2017. 8. 33-50.

居場所」を抽出している。<sup>7</sup>一方で、居場所については、心や仮想現実(virtual reality)、SNS(social networking service)などのなかにそれをもつとする認識のされ方もある。また、自宅や遠方に存在する憩いの場を居場所と捉えることもできようが、本調査が照射している居場所は住み慣れた地域における自宅以外のそれである。これらを踏まえ、本調査では、高齢者の居場所を「自宅から通える範囲にあり、人との関係やつながりを持つことがかなう物理的に存在する場所」と定義する。

### (3) プロダクティブ・アクティビティ

高齢者のプロダクティブ・アクティビティは、有償労働(paid work)と無償労働(unpaid work)からなる概念<sup>8</sup>とされる。そこで、本調査におけるプロダクティブ・アクティビティの定義は、岡本(2008)<sup>9</sup>にならい、Herzog 等(1989)<sup>10</sup>による「有償であろうとなかろうとモノやサービスをうみだす活動で、家事、子どもの世話、ボランティア、家族や友人への支援のような活動が含まれる」を用いることにした。そして、これら 3 つの領域については、柴田等(2012)<sup>11</sup>の研究を参考として、「有償労働」を「収入を伴う仕事(家族従業、パート・アルバイトを含む)」、「家庭内無償労働」を「『家事(草取りや水やり、自転車の手入れ、家具などの修繕などを含む)』『買い物』『子守り』『介護・看病』」、そして「家庭外無償労働」を「『道路や公園の掃除など地域を良くする活動』『物を作って寄付したり、募金や古切手などを送る活動』『高齢者や障害者、子ども、福祉施設などに対する奉仕活動』『地域の活動や趣味などの会の世話役、手伝い』『民生委員、保護司、行政委員などの公的な奉仕活動』『友人や近所の人のために何らかの手伝い(家事や買い物、用事の手伝い、介護・看病など)』『その他の奉仕活動』」とそれぞれ具体的に定義した。

---

<sup>7</sup> 上野等(2017)<sup>6</sup>は、国内文献のレビューから、高齢者が感じている居心地や心の拠り所と認識された居場所をさす「心理的居場所」についても抽出している。地域における高齢者に関する自助・互助についての取り組みにおける共通課題を当事者の参加の継続としたうえで、その参加がされる場が心理的居場所になれば継続できることを示唆しつつ、「物理的居場所が社会的居場所として存在し、心理的居場所になる可能性は新たな研究課題」との見解を示している。

<sup>8</sup> Sherraden M, Morrow-Howell N, Hinterlong J, et al. 2001. Productive aging: Theoretical choices and directions. In Productive aging: Concepts and challenges, eds. by Morrow-Howell N, Hinterlong J, Sherraden M. Baltimore: The John Hopkins University Press.

<sup>9</sup> 岡本秀明. 高齢者のプロダクティブ・アクティビティに関連する要因：有償労働、家庭内及び家庭外無償労働の3領域における男女別の検討. 老年社会科学. 2008. 29(4). 526-538.

<sup>10</sup> Herzog AR, Kahn RN, Morgan JN. Age differences in productive activities. Journal of Gerontology. 1989. 44. 129-138.

<sup>11</sup> 柴田博, 杉原陽子, 杉澤秀博. 中高年日本人における社会貢献活動の規定要因と心身のウェルビーイングに与える影響：2つの代表性のあるパネルの縦断的分析. 応用老年学, 2012. 6(1). 21-38.

#### (4) 自己効力感

青木等(2001)<sup>12</sup>は、プロダクティブ・エイジングのための高齢者の意欲や意識を強化し、行動を起こさせる属性として自己効力感(self-efficacy ; 以下、SE)が注目されていることについて、この概念の特性や社会情勢を踏まえながら理論的に説明している。このSEという概念は、「自己の行動遂行可能性の認知、すなわち、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるのかという個人の確信」<sup>13</sup>と定義されるが、在宅高齢者の社会参加活動意向との関連が予想される心理的要因<sup>14</sup>とされている。

本来、SEは特定の課題と密接に結びついた認知であるが、この概念には一般性の次元がある。すなわち、個々の課題を超越した一般的場面におけるSEといえるGSEが存在するとされる。<sup>15</sup>これらを踏まえ、本調査ではGSEを「日常生活などの一般的場面における自己の行動遂行可能性の認知、すなわち、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるのかという個人の確信」と定義した。

---

<sup>12</sup> 青木邦男，松本耕二．在宅高齢者のセルフ・エフィカシーとそれに関連する要因．社会福祉学．2001．41(2)．35-48.

<sup>13</sup> Bandura A. Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*. 1977. 84. 191-215.

<sup>14</sup> 岡本秀明，岡田進一，白澤政和．在宅高齢者の社会参加活動意向の充足状況と基本属性等との関連．生活科学研究誌．2003．2．263-272.

<sup>15</sup> 竹綱誠一郎，鎌原雅彦，沢崎俊之．自己効力に関する研究の動向と問題，教育心理学研究．1988．36(2)．172-184.

## Ⅱ. 分析結果

前述のように、回収された 48 件(回収率 100%)の調査票のうち、65 歳以下の回答者による 3 件を除き、結果的に 45 件を分析対象とした。以下に分析結果を述べていく。

### 1. 性別

性別については、女性が 9 割近くを占めた(表 2.1、図 2.1)。

表 2.1 性別

	人数	割合(%)
女性	39	86.7
男性	5	11.1
無回答	1	2.2
合計	45	100

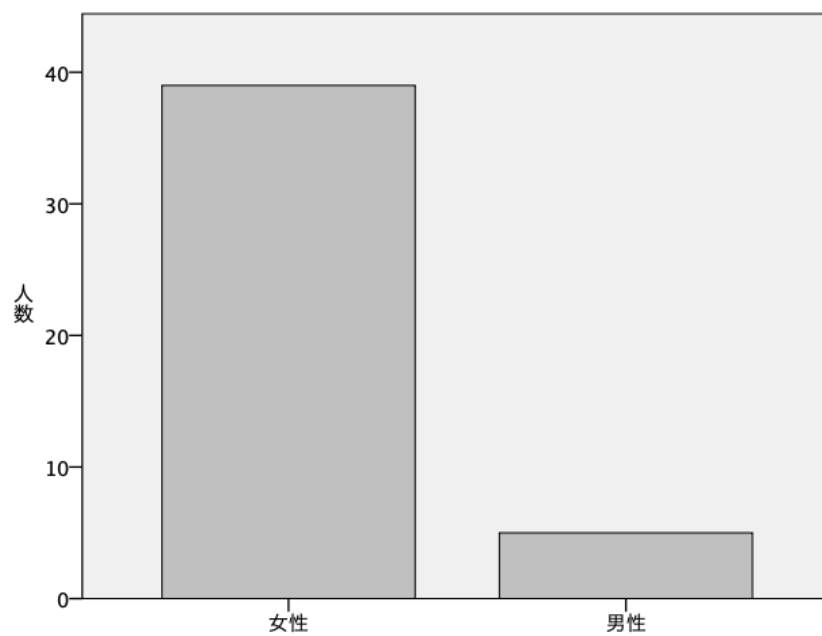


図 2.1 性別(無回答を除く)

## 2. 年齢

年齢については、「前期高齢者」(約3割)よりも「後期高齢者」(約7割)が約2倍多かった(表2.2)。また、平均年齢(平均値)と各年齢の分布は図2.2の通りである。

表2.2 年齢層

	人数	割合(%)
前期高齢者	14	31.1
後期高齢者	31	68.9
合計	188	100

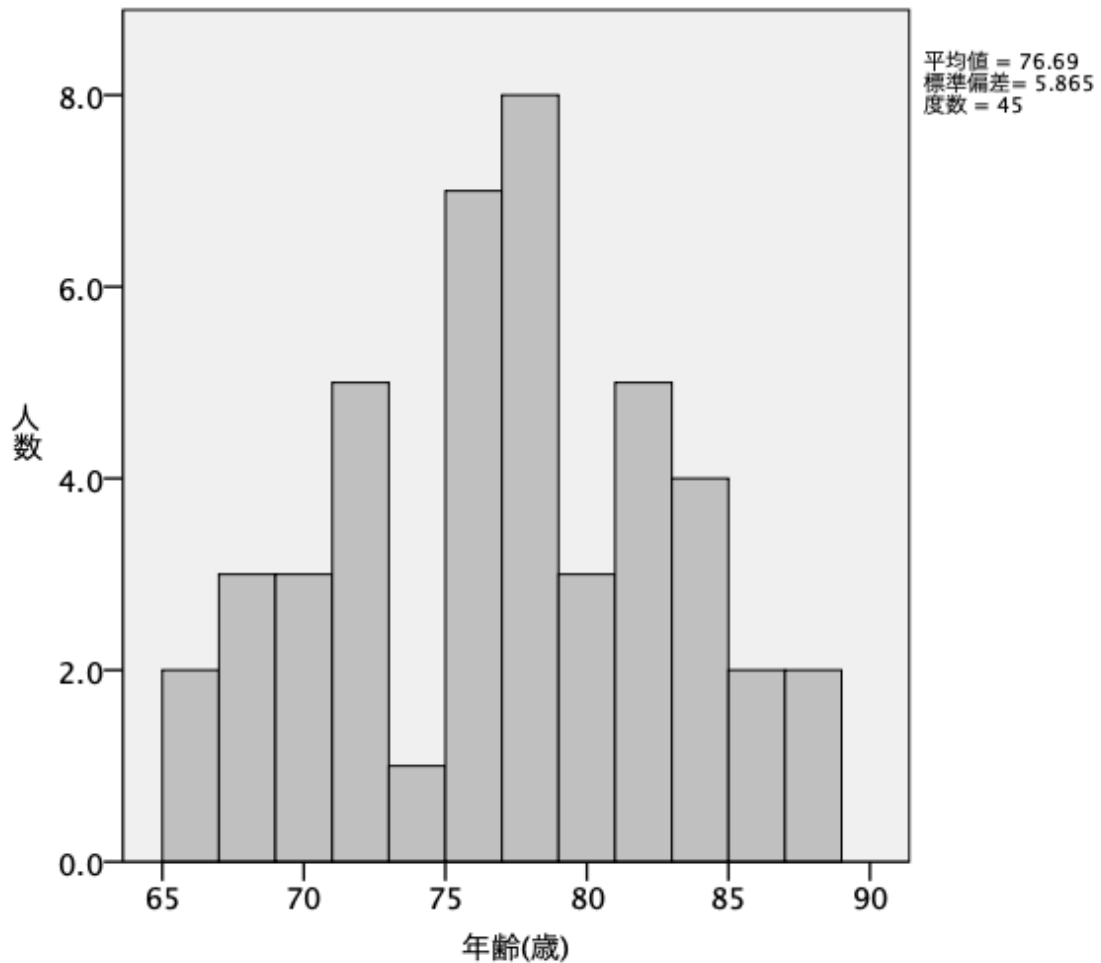


図2.2 平均年齢(平均値)と各年齢の分布

### 3. 居住地域

居住地域については、そよ風のある「白銀町」に居住する人が約6割を占めた。これに「岬台」(約1割)などが続いた。少人数であるが、「白銀町」以外にも多くの地域より来所していることが分かった(表2.3、図2.3)。

表 2.3 居住地域

	人数	割合(%)
白銀町	26	57.8
岬台	4	8.9
鮫町	3	6.7
湊町	3	6.7
大久保	2	4.4
旭ヶ丘	1	2.2
小中野	1	2.2
新湊二丁目	1	2.2
下長	1	2.2
新井田	1	2.2
根城	1	2.2
日計	1	2.2
合計	45	100

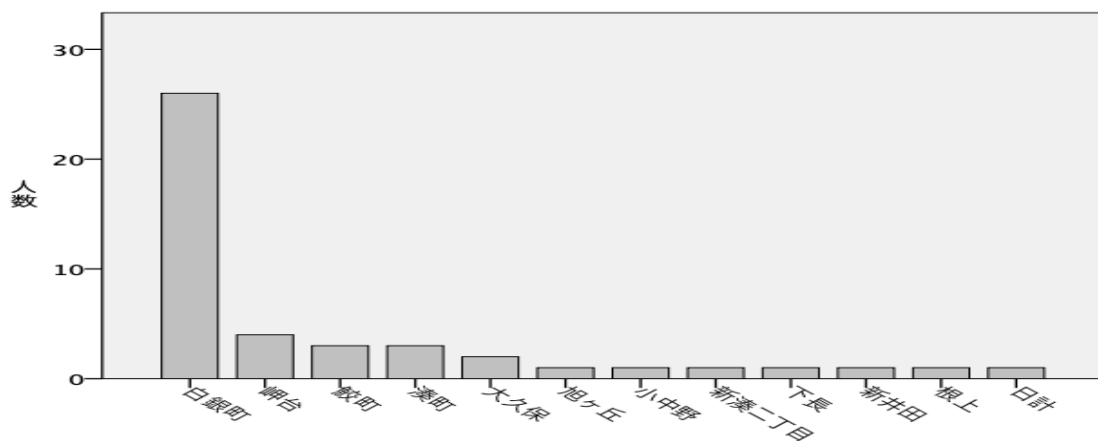


図 2.3 居住地域

#### 4. 世帯形態

世帯形態については、「夫婦のみ」が5割近くを占め最も多かった。それに「子どもや孫と同居」(約3割)、「独居」(約2割5分)が続いた(表2.4、図2.4)。

表2.4 世帯携帯

	人数	割合(%)
独居	11	24.4
夫婦のみ	21	46.7
子どもや孫と同居	12	28.9
その他	0	0.0
合計	45	100

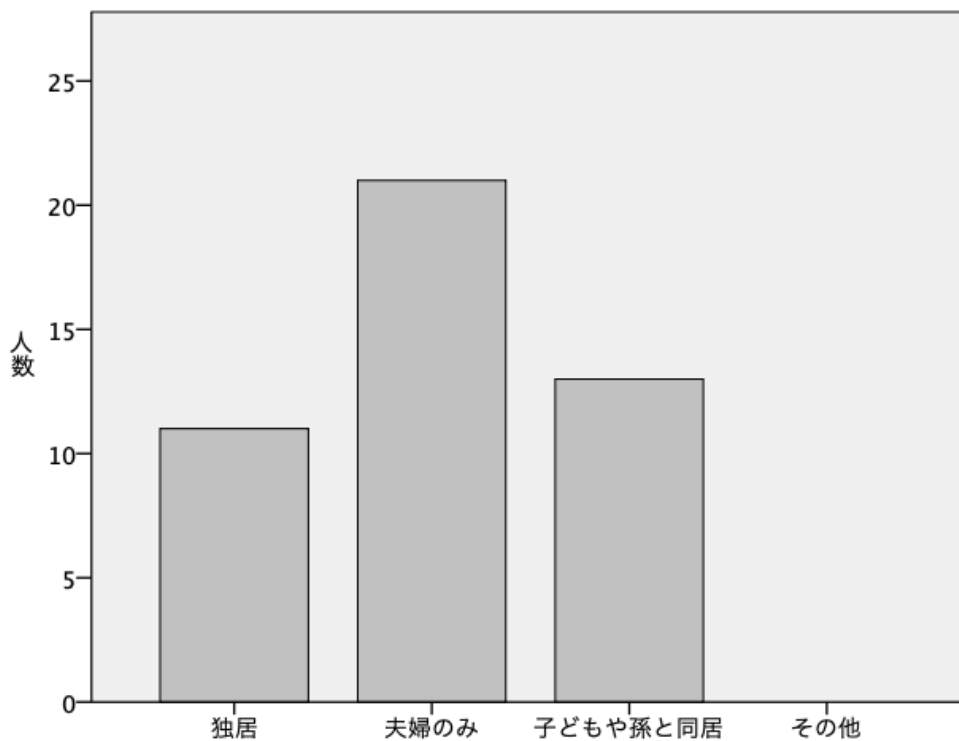


図2.4 世帯携帯



## 5. 要介護認定判定状況

要介護認定判定状況については、「認定を受けていない」人が約9割以上を占めた。また、「要支援2以上重度」の判定を受けている人は皆無であった(表2.5、図2.5)。

表2.5 要介護認定判定状況

	人数	割合(%)
認定を受けていない	42	93.3
地域支援事業対象者	1	2.2
要支援1	1	2.2
要支援2以上重度	0	0.0
無回答	1	2.2
合計	45	100

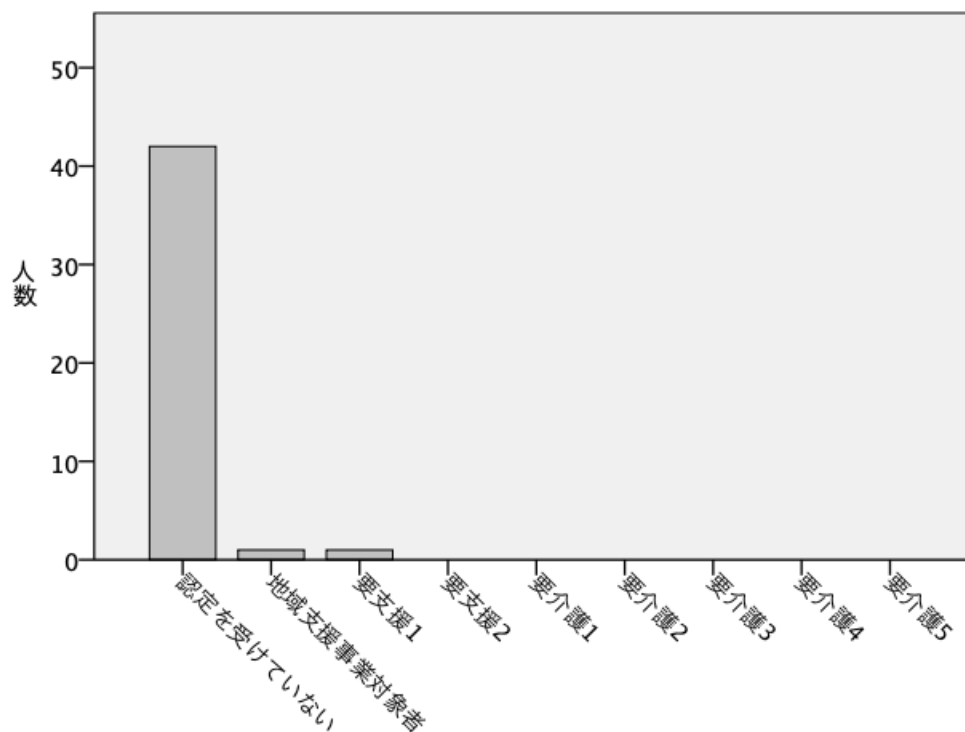


図2.5 要介護認定判定状況(無回答を除く)

## 6. 手段的自立能力

手段的自立能力(instrumental activity of daily living ; 以下、IADL 能力)については、古谷野等(1987)<sup>16</sup>が Lawton の階層モデルに基づき、高次の生活能力を評価するために開発した 13 項目の多次元尺度である「老研式活動能力指標(TMIG Index of Competence)」の下位尺度を使用した。本調査では、この下位尺度を構成する 5 項目それぞれの把握を試みた。

### (1) バスや電車を使っての一人での外出

バスや電車を使っての一人での外出については、全員が「できる」と回答した(表 2.6.1)。

表 2.6.1 バスや電車を使っての一人での外出

	人数	割合(%)
できない	0	0.0
できる	45	100
合計	45	100

### (2) 日用品の買い物

日用品の買い物については、ほぼ全員が「できる」と回答した(表 2.6.2)。

表 2.6.2 日用品の買い物

	人数	割合(%)
できない	1	2.2
できる	44	97.8
合計	45	100

<sup>16</sup> 古谷野亘, 柴田博, 中里克治, ほか. 地域老人における活動能力の測定: 老研式活動能力指標の開発. 日本公衆衛生雑誌. 1987. 34(3). 109-114.

### (3) 食事の用意

食事の用意については、全員が「できる」と回答した(表2.6.3)。

表2.6.3 食事の用意

	人数	割合(%)
できない	0	0.0
できる	45	100
合計	45	100

### (4) 請求書の支払い

請求書の支払いについては、全員が「できる」と回答した(表2.6.4)。

表2.6.4 請求書の支払い

	人数	割合(%)
できない	0	0.0
できる	45	100
合計	45	100

### (5) 預貯金の出し入れ

預貯金の出し入れについては、ほぼ全員が「できる」と回答した(表2.6.5)。

表2.6.5 預貯金の出し入れ

	人数	割合(%)
できない	1	2.2
できる	44	97.8
合計	45	100

## 7. インターネットの利用

インターネットの利用については、8割以上の人が「していない」に回答した。翻り、インターネット利用を「している」と回答した人は1割強に留まった(表2.7、図2.7)。

表2.7 インターネットの利用

	人数	割合(%)
していない	39	86.7
している	6	13.3
合計	45	100

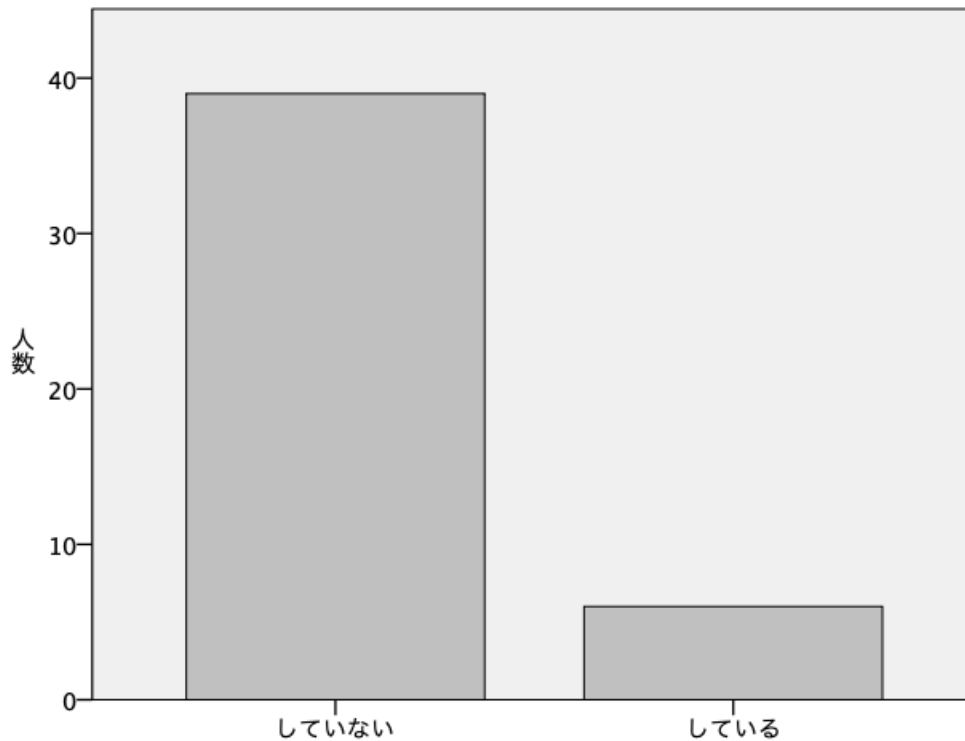


図2.7 インターネットの利用

## 8. 就業形態

就業形態については、就業していない「無職」の人が約9割を占めた。その一方、パート・アルバイトや自営業という形態で就業している人もわずかではあるが存在した(表2.8、図2.8)。

表2.8 就業形態

	人数	割合(%)
フルタイム	0	0.0
パート・アルバイト	2	4.4
自営業	1	2.2
無職	40	88.9
その他	0	0.0
無回答	2	4.4
合計	45	100

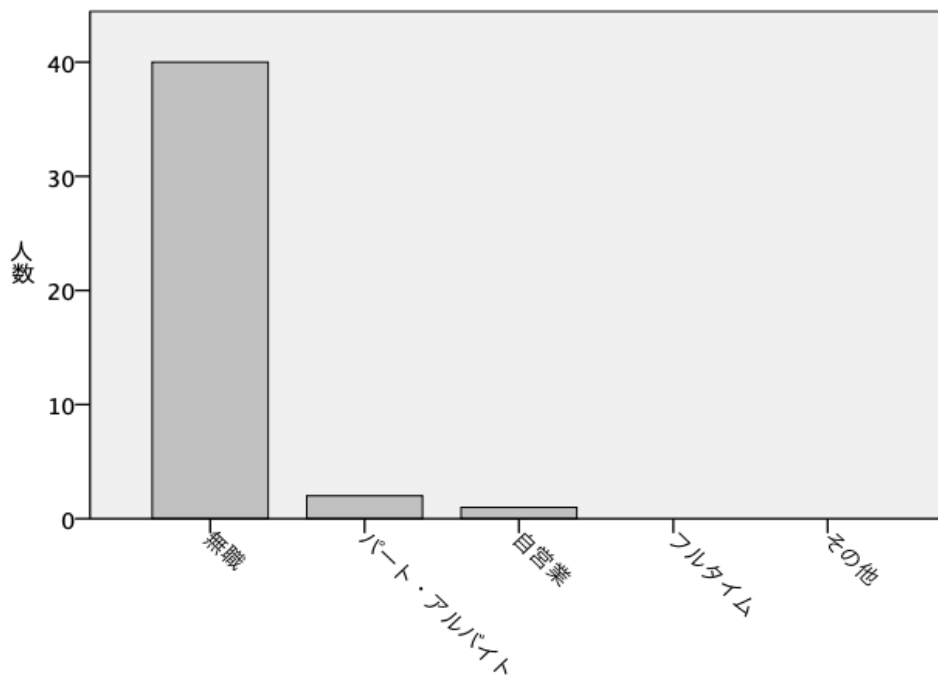


表2.8 就業形態(無回答を除く)

## 9. プロダクティブ・アクティビティ

### (1) 有償労働

有償労働については、約9割の人が「していない」と回答した一方、約1割の人は「している」と回答した(表2.9.1、図2.9.1)。

表2.9.1 有償労働

	人数	割合(%)
している	4	8.5
していない	41	91.5
合計	45	100

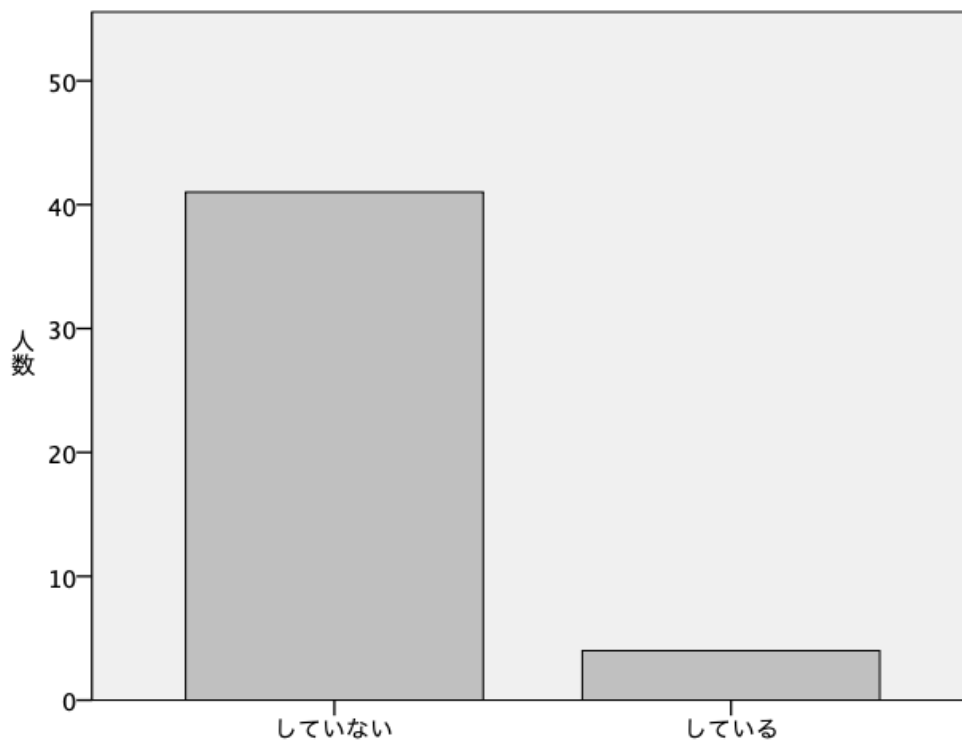


図2.9.1 有償労働

## (2) 家庭内無償労働

家庭内無償労働については、9割近くの人が「している」と回答した(表2.9.2、図2.9.2)。

表 2.9.2 家庭内無償労働

	人数	割合(%)
していない	6	13.3
している	39	86.7
合計	45	100

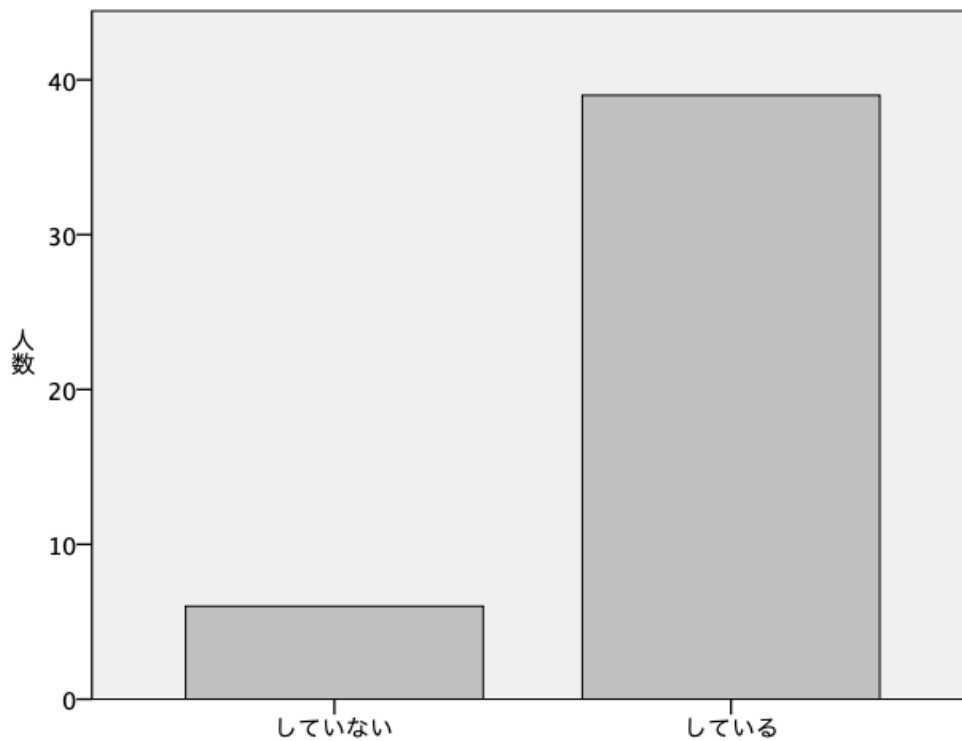


図 2.9.2 家庭内無償労働

### (3) 家庭外無償労働

家庭外無償労働については、7割を上回る人が「していない」と回答した一方、3割近くの人は「している」と回答した(表2.9.3、図2.9.3)。

表 2.9.3 家庭外無償労働

	人数	割合(%)
していない	33	73.3
している	12	26.7
合計	45	100

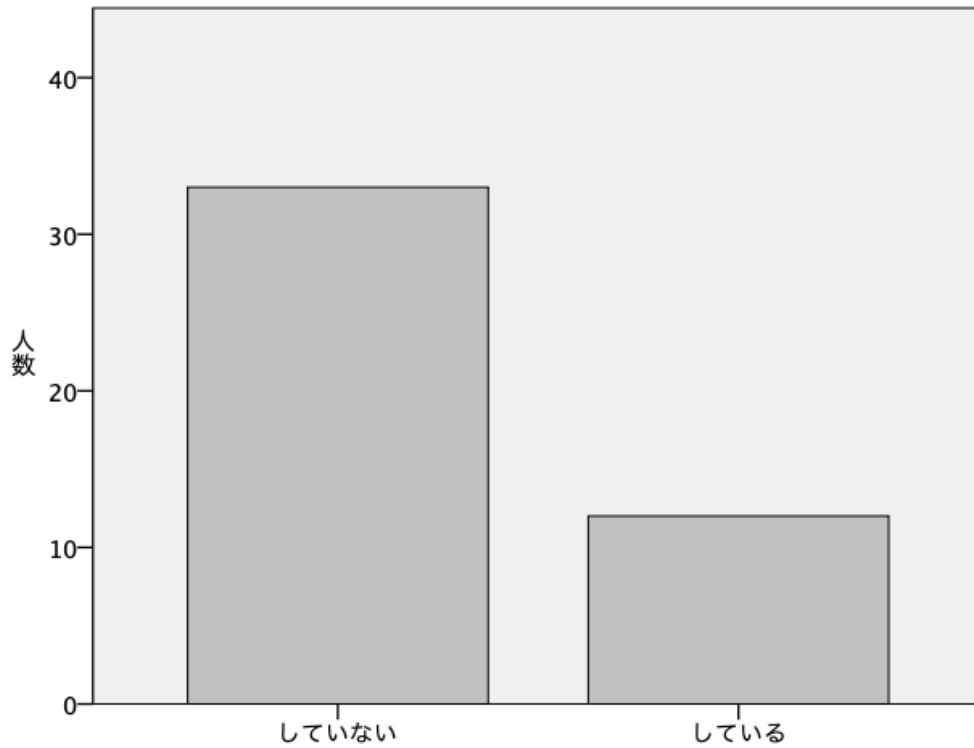


図 2.9.3 家庭外無償労働



#### 10. 65歳以降に行ったことのある社会参加活動(複数選択可能項目)

65歳以降に行ったことのある(そよ風以外での)社会参加活動項目と性別(分割変数)とのクロス分析を行った。<sup>17</sup>その結果、1割以上の回答のあったもののなかで、多いものから「町内会での活動」(約3割)、「老人クラブでの活動」(約1割5分)、「サークルでの活動」(約1割)、「習い事活動」(約1割)、「ボランティアとしての活動」(約1割)の順となったが、経験のないもしくは非常に少ない活動も目立った(表2.12.1)。

そこで、12の社会参加活動項目のうち1つ以上活動を行なった経験のある人とそれ以外の人の数・割合を確認することにした。その結果、ほとんど(約8割5分)の人がいずれかの活動経験があることについて確認された(表2.10.2)。

表2.10.1 男女ごとの65歳以降に行ったことのある社会参加活動<sup>18</sup>

	女性	男性	合計
町内会での活動	19(42.2%)	3(6.7%)	22(48.9%)
地区社会福祉協議会での活動	3(6.7%)	0(0.0%)	3(6.7%)
老人クラブでの活動	12(26.6%)	0(0.0%)	12(26.6%)
交通安全協会での活動	2(4.4%)	0(0.0%)	2(4.4%)
民生児童委員としての活動	2(4.4%)	0(0.0%)	2(4.4%)
サークルでの活動	11(24.4%)	0(0.0%)	11(24.4%)
習い事活動	9(20.0%)	1(2.2%)	10(22.2%)
サロンでの活動	0(0.0%)	3(6.7%)	3(6.7%)
鷗盟大学での活動	8(17.8%)	1(2.2%)	9(20.0%)
高校、大学、大学院での活動	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
ボランティアとしての活動	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
就労活動	1(2.2%)	1(2.2%)	2(4.4%)

<sup>17</sup> 分析対象者において、男性は全体のうち約1割ほどであり、女性(約9割)と比べ非常に少ないが、試行的に、分割変数に性別を設けたピラミッド形式のグラフにて視覚的に確認した(図2.10)。

<sup>18</sup> 括弧内の%は、分析対象者全体のなかでの割合を示す。

表 2.10.2 65 歳以降の社会参加活動経験

	人数	割合(%)
活動経験なし	7	15.6
活動経験あり	38	84.4
合計	12	100.0

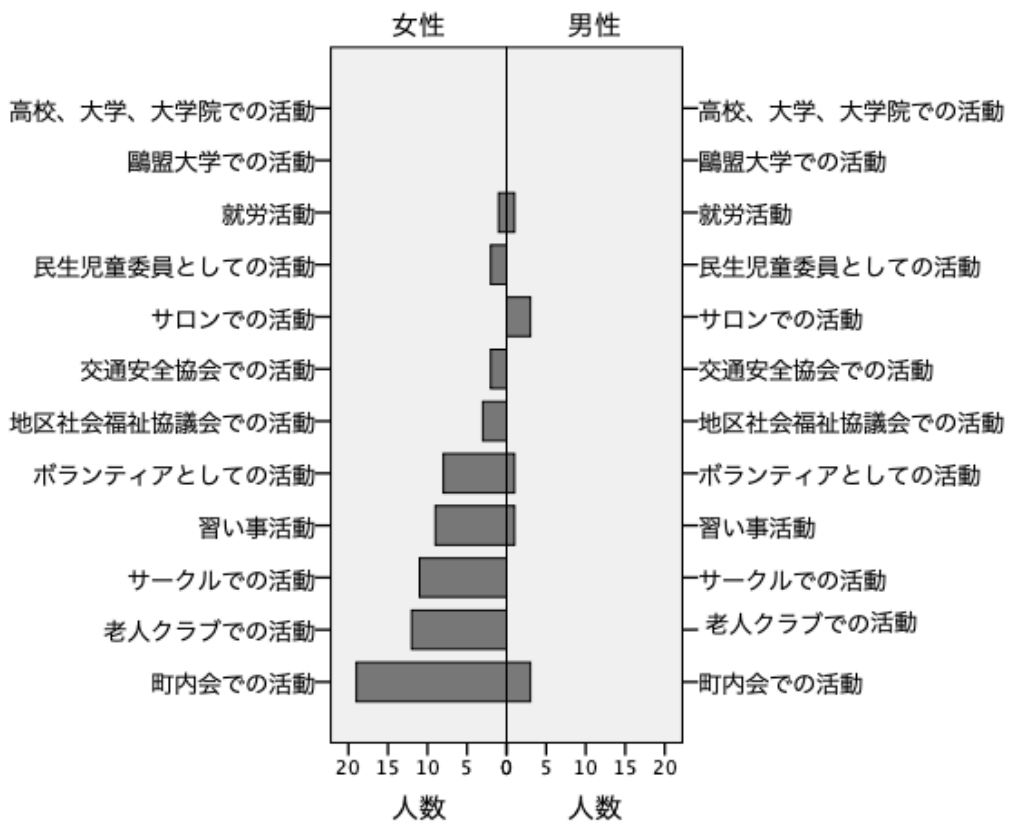


図 2.10 男女ごとの 65 歳以降に行ったことのある社会参加活動

## 11. そよ風を知ったきっかけ

そよ風を知ったきっかけについては、「知人・友人」が約4割と最も多く、それに「新聞」(約3割)が続き、両者をあわせて約7割を占めた(表2.11、図2.11)。

表2.11 そよ風を知ったきっかけ

	人数	割合(%)
新聞	14	31.1
チラシ	2	4.4
町内会	1	2.2
民生委員	3	6.7
地区社会福祉協議会	1	2.2
知人・友人	17	37.8
ラジオ	0	0.0
その他	7	15.6
合計	45	100

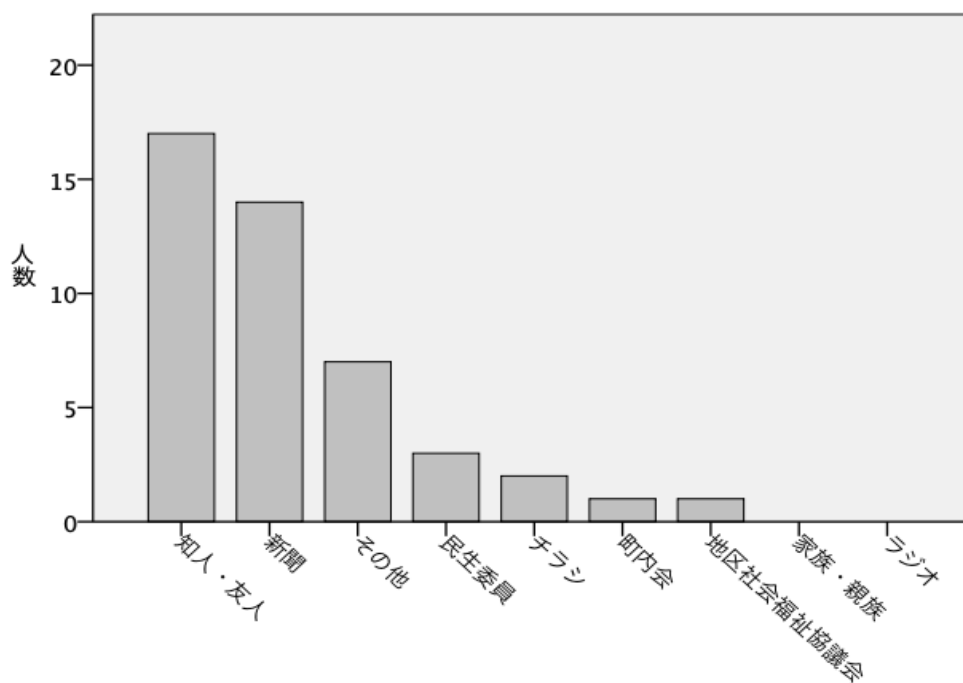


図2.11 そよ風を知ったきっかけ

## 12. そよ風の初回時の利用目的(複数回答可能項目)

そよ風の初回時の利用目的については、「健康づくり」と「仲間づくり」とする回答が特に多く、双方に5割を上回る回答がみられた(表2.12、図2.12)。

表2.12 そよ風の初回時の利用目的

	人数	割合(%)
居場所づくり	6	13.3
健康づくり	26	57.8
仲間づくり	25	55.6
余暇活動(暇つぶし)	4	8.9
なんとなく	5	11.1
その他	4	8.9

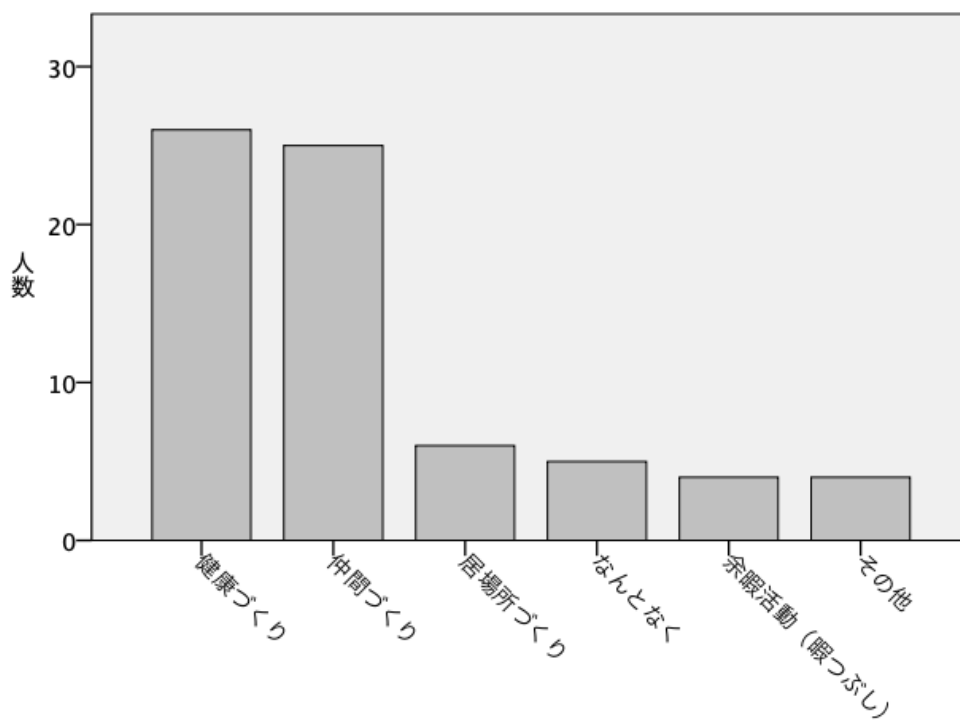


図2.12 そよ風の初回時の利用目的

### 13. そよ風の利用に対する初回時の心配事(複数回答可能項目)

そよ風の利用に対する初回時の心配事については、「特になし」が約6割と最も多く、それに「活動内容に馴染めるか」(約2割)と「通えるか」(約1割)が続いた(表2.13、図2.13)。

表2.13 そよ風の利用に対する初回時の心配事

	人数	割合(%)
他の参加者に馴染めるか	9	20
活動内容に馴染めるか	8	17.8
参加費用	1	2.2
怪しげな活動でないか	2	4.4
通えるか	6	13.3
その他	0	0.0
特になし	26	57.8

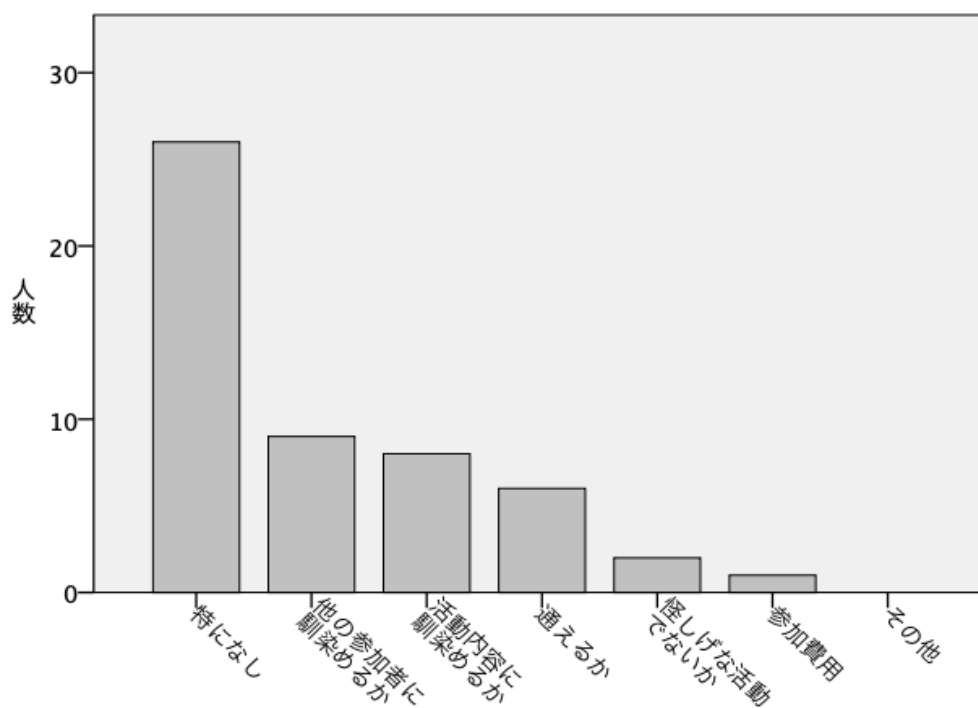


図2.13 そよ風の利用に対する初回時の心配事

#### 14. そよ風の合計利用回数

そよ風の合計利用回数については、「1～10回」が約3割と最も多く、それに「11～20回」(約2割)と「21～30回」(約2割)が続いた。一方で、41回を上回るとの回答も2割ほど存在した(表2.14、図2.14)。

表 2.14 そよ風の合計利用回数

	人数	割合(%)
1～10回	14	31.1
11～20回	10	22.2
21～30回	8	17.8
31～40回	3	6.7
41～50回	6	13.3
51～60回	1	2.2
61～70回	2	4.4
無回答	1	2.2
合計	45	100

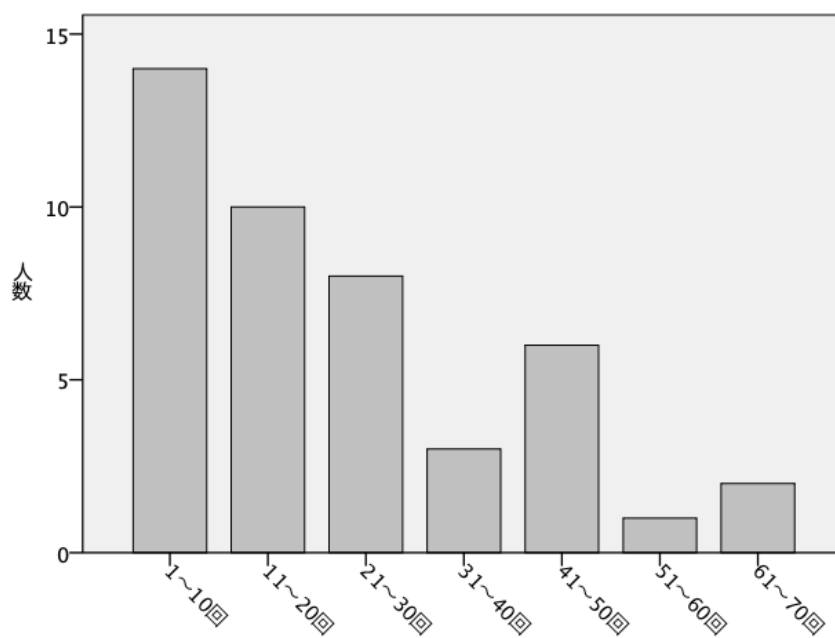


図 2.14 そよ風の合計利用回数(無回答を除く)

## 15. そよ風を複数回利用している理由(自由記述回答項目)

そよ風を複数回利用している理由に関する記述データを全て確認した後、内容・種類別にカテゴリ化を試みた。その結果、以下のように「楽しい・面白いから(21件)」「仲間・友達・交流(6件)」「健康のため(4件)」「発声・歌を歌うため(4件)」「その他(2件)」という5つのカテゴリが生成された。なお、一度いずれかのカテゴリに属させた記述データであっても、その後登場するカテゴリに関係している場合は再掲し、新たなカテゴリの構成データ・件数に加えることにした。また、各カテゴリに配属させた記述データについては、当該カテゴリと別の内容・種類が含まれている場合でも、つながりのある文章がみられたため、原文のまま記載することとした。

### 【カテゴリ1】楽しい・面白いから(21件)

- ・おはなしが楽しいです。
- ・いろんな人と話ができるので楽しいから。
- ・知らない人といろいろなお話が聞けて楽しい。
- ・知り合いの方も来ているので楽しいです。
- ・ボランティアと他人との時間の共有を楽しむ。
- ・面白い話。

### 【カテゴリ2】仲間・友達・交流(6件)

- ・仲間の方と話せる。
- ・友達に会えるから。
- ・地域方々との和。
- ・新しいお友達、顔見知りができる。
- ・皆さんとなかよくしたくって。
- ・色々な人とお話出来る。

### 【カテゴリ3】健康のため(4件)

- ・健康意識の高揚・運動習慣の確立。

### 【カテゴリ4】発声・歌を歌うため(4件)

- ・声を出して歌いたいから。
- ・歌って気分転換、笑顔になれる。

- ・声を出せるから。歌の会。昼は一人ですからしゃべらない毎日ですから。

**【カテゴリ5】 その他(2件)**

- ・一人で家に閉じこもってたくない。
- ・時間が合う時。



## 16. そよ風で好きなプログラム(2つまで回答可能)

そよ風で好きなプログラムについては、「ハーモニーの会」と「元気はつらっクラブ」とする回答が特に多く、双方に5割を上回る回答がみられた。それに「みんな食堂」(約3割)、「オレンジカフェ」(約2割5分)、「おもいで学校」(2割)が続いた(表2.16、図2.16)。

表2.16 そよ風で好きなプログラム

	人数	割合(%)
みんな食堂	13	28.9
おもいで学校	9	20.0
オレンジカフェ	11	24.4
元気はつらっクラブ	24	53.3
ハーモニーの会	26	57.8
特になし	1	2.2

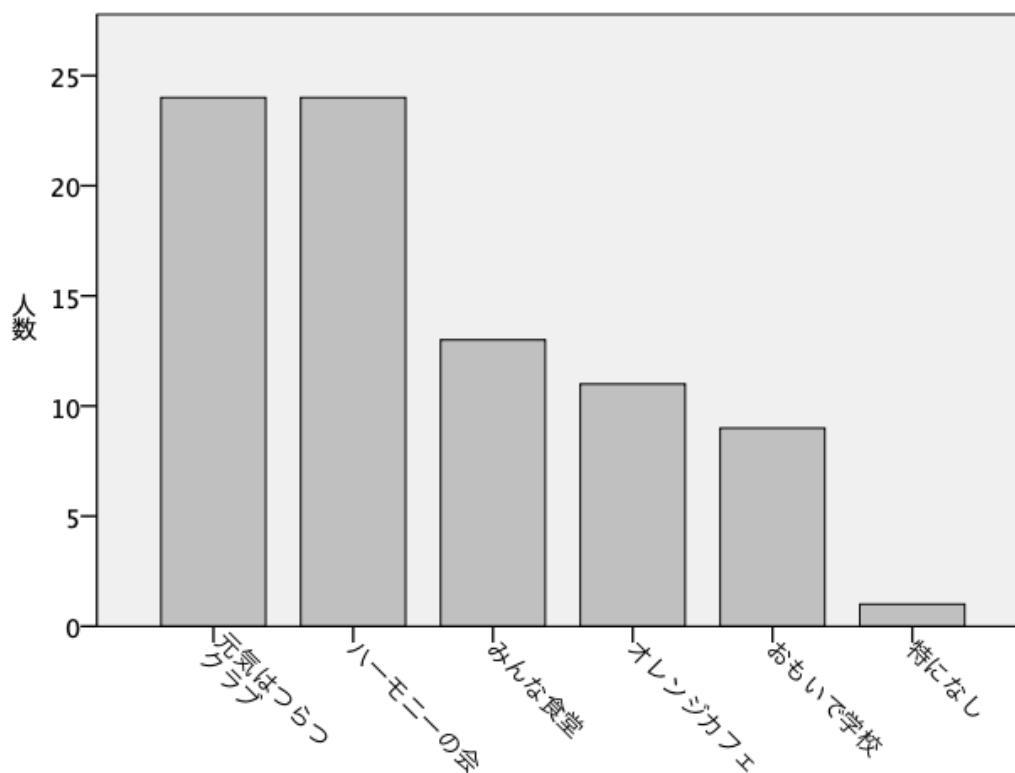


図2.16 そよ風で好きなプログラム

なお、上記の回答に対する理由として、以下の自由記述回答がみられた。

- ・会食の雰囲気を楽しむ。会話を楽しくする。(「みんな食堂」と「元気はつらっクラブ」を選択)
- ・ひとり暮らしで食事が偏っているから。歌が好きだから。(「みんな食堂」と「ハーモニーの会」を選択)
- ・自分で参加できること。ハーモニーは声に自信が無いから。(「オレンジカフェ」と「元気はつらっクラブ」を選択)
- ・楽しいから。(「元気はつらっクラブ」と「ハーモニーの会」を選択)
- ・昭和時代を生きてきた仲間、何か通じるものがたくさんあり安心できる。頑張りができる。(「元気はつらっクラブ」と「ハーモニーの会」を選択)
- ・自然に笑顔になれる。(「元気はつらっクラブ」と「ハーモニーの会」を選択)
- ・参加したのがハーモニーの会だけ。(「ハーモニーの会」を選択)
- ・体も動かせるし、声も出せるから。(「ハーモニーの会」を選択)

### 17. そよ風の利用が自身に与えた影響(複数回答可能項目)

そよ風の利用が自身に与えた影響については、「気持ちが前向きになった」と「友人ができた」とする回答が特に多く、双方に約5割の回答がみられた。それに続き、「健康づくり・介護予防になった」と「生活にはりがでた」への回答は、それぞれに3割を上回る回答がみられた(表2.17、図2.17)。

なお、「その他」の理由として、「その日はなんとなく気持ちが良いです」「楽しみが増えた」という自由記述回答がみられた。

表2.17 そよ風の利用が自身に与えた影響

	人数	割合(%)
気持ちが前向きになった	23	51.1
生活にはりがでた	14	31.1
活動的になった	6	13.3
友人ができた	21	46.7
健康づくり・介護予防になった	16	35.8
特になし	1	2.2
その他	1	2.2
無回答	2	4.4

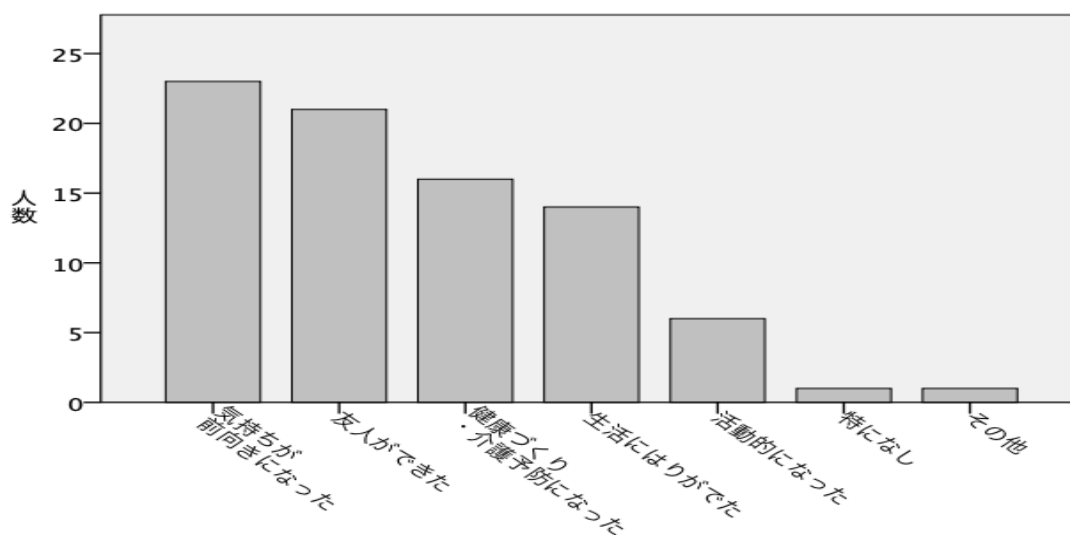


図2.17 そよ風の利用が自身に与えた影響(無回答を除く)

## 18. そよ風の利用料についての考え

そよ風の利用料についての考えとしては、「どちらともいえない」が約4割と最も回答が多かった。それに「有料とすべき」(約3割)と「無料とすべき」(1割強)が続いた(表2.18、図2.18)。

表2.18 そよ風の利用料についての考え

	人数	割合(%)
無料とすべき	6	13.3
有料とすべき	14	31.1
どちらともいえない	19	42.2
無回答	6	13.3
合計	45	100

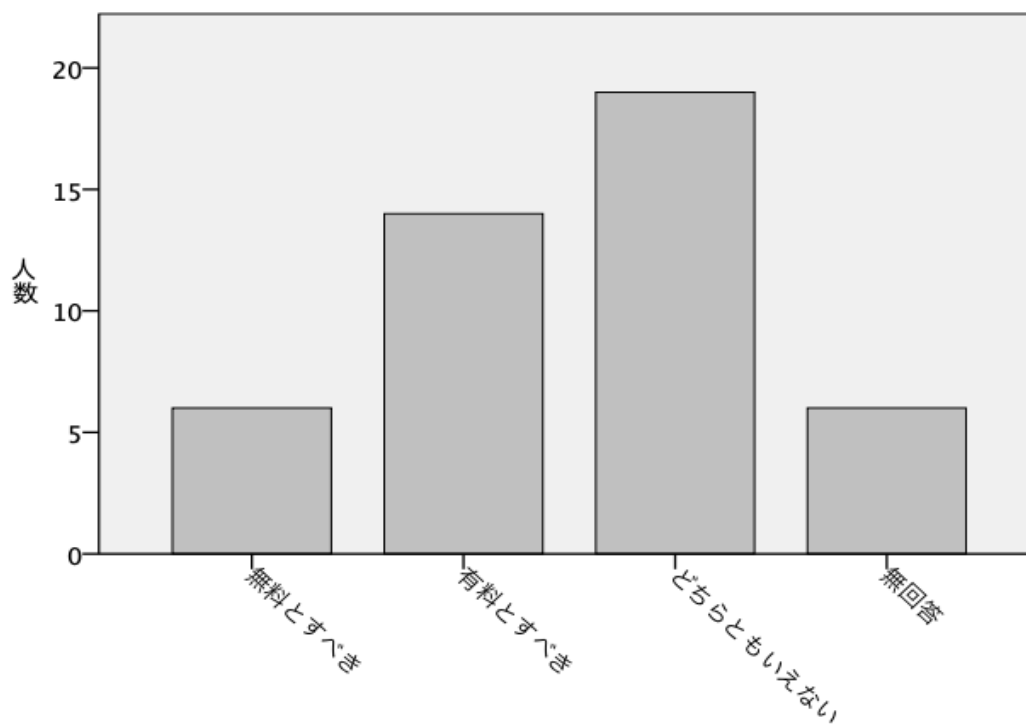


図2.18 そよ風の利用料についての考え

## 19. そよ風の適正な利用料についての考え(自由記述回答項目)

まず、そよ風の適正な利用料についての考えを自由記述法にて求めた。その後、得られた記述データにおける金額の幅を考慮したうえで、「100 円」「200～300 円」「400～500 円」「600 円以上」「無回答」にカテゴリ分けし、集計した。

### (1) 「みんな食堂」の適正な利用料

「みんな食堂」の適正な利用料への回答としては、「200～300 円」が約 2 割と最も多く、それに「100 円」(約 1 割)が続いた(表 2.19.1、図 2.19.1)。

表 2.19.1 「みんな食堂」の適正な利用料

	人数	割合(%)
100 円	4	8.9
200～300 円	8	17.8
400～500 円	2	4.4
600 円以上	1	2.2
無回答	30	66.7
合計	45	100

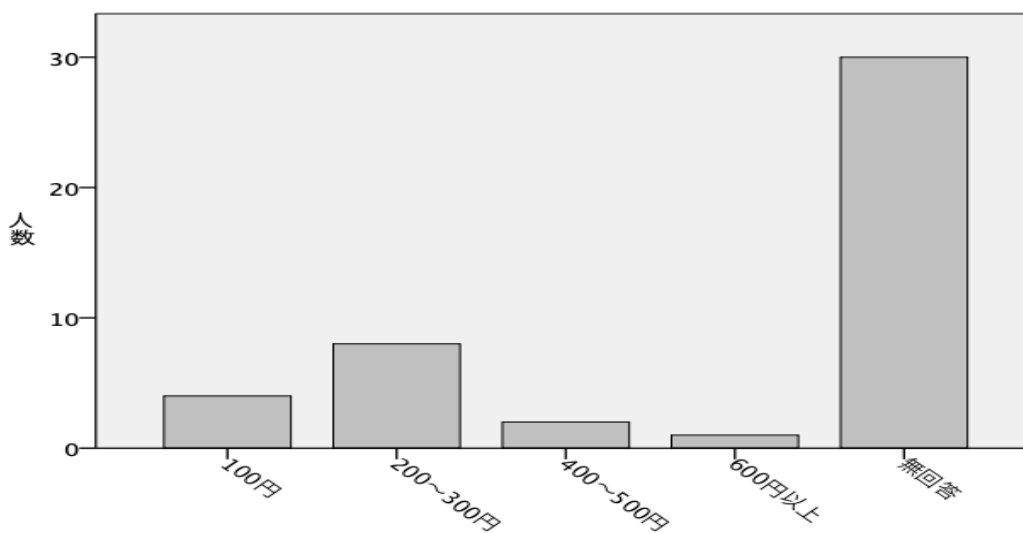


図 2.19.1 「みんな食堂」の適正な利用料

(2) 「おもいで学校」の適正な利用料

「おもいで学校」の適正な利用料への回答としては、「100円」(1割強)が最も多く、それに「200～300円」(1割弱)が続いた(表2.19.2、図2.19.2)。

表2.19.2 「おもいで学校」の適正な利用料

	人数	割合(%)
100円	6	13.3
200～300円	4	8.9
400～500円	0	0.0
600円以上	0	0.0
無回答	35	77.8
合計	45	100

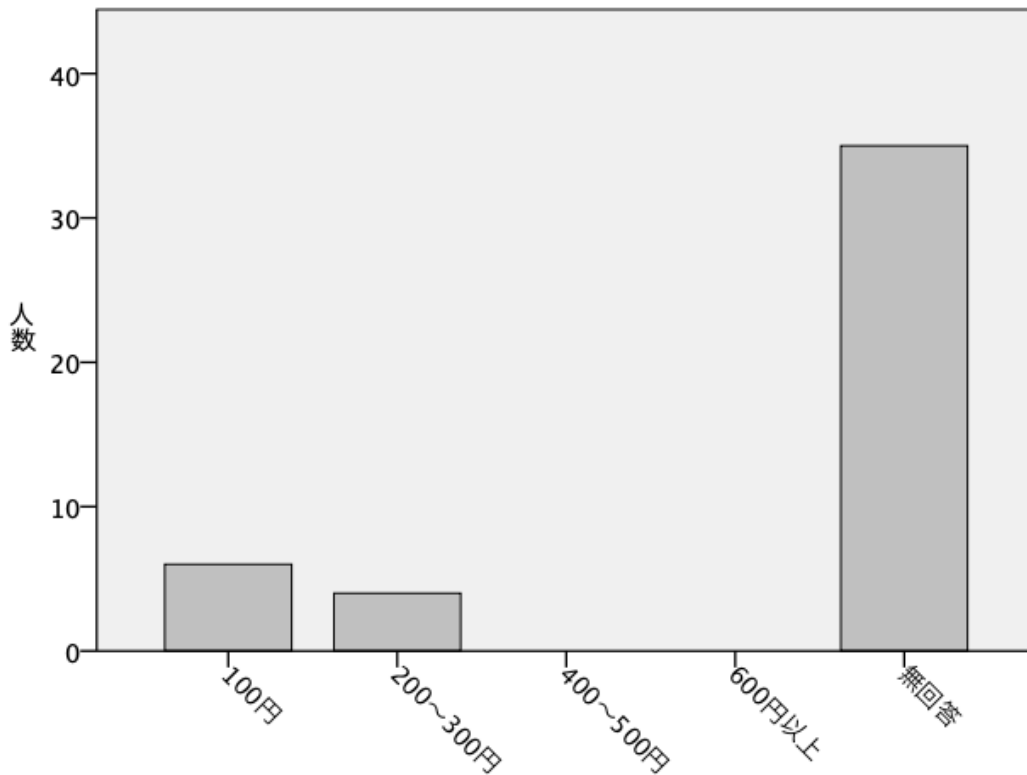


図2.19.2 「おもいで学校」の適正な利用料

### (3) 「オレンジカフェ」の適正な利用料

「オレンジカフェ」の適正な利用料への回答としては、僅かな差であるが、「100円」が最も多く(約1割)、それに「200～300円」(約1割)が続いた(表2.19.3、図2.19.3)。

表2.19.3 「オレンジカフェ」の適正な利用料

	人数	割合(%)
100円	6	13.3
200～300円	5	11.1
400～500円	0	0.0
600円以上	0	0.0
無回答	34	75.6
合計	45	100

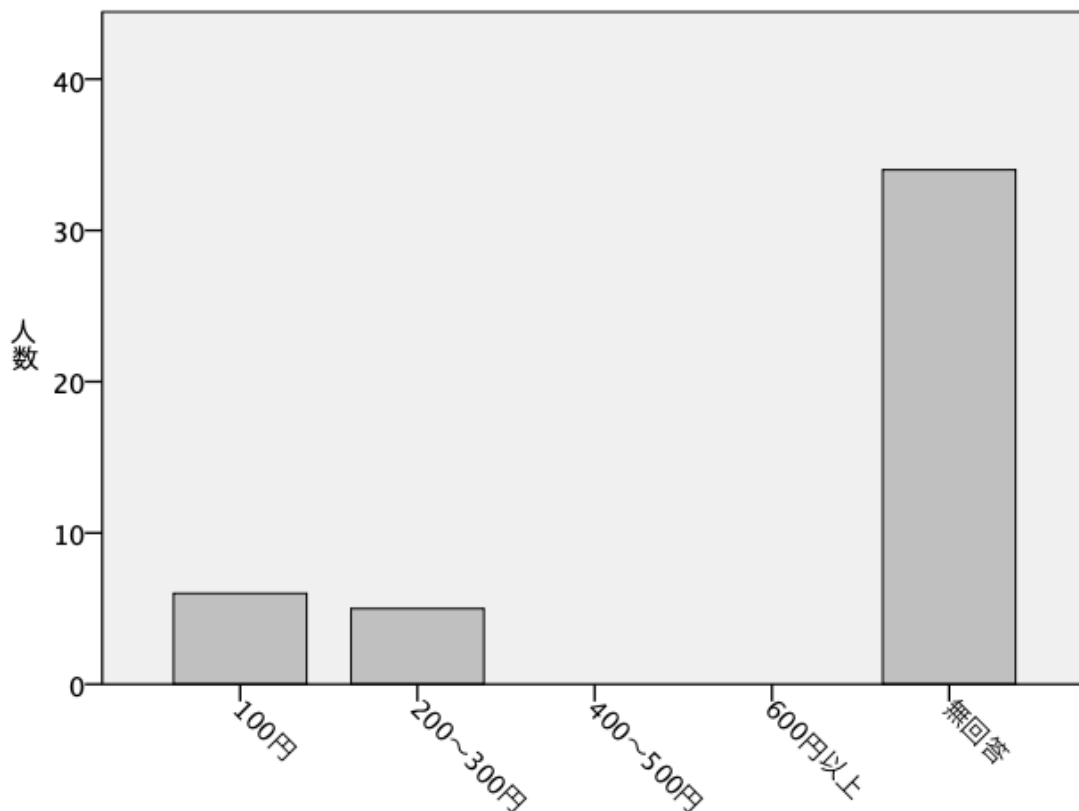


図2.19.3 「オレンジカフェ」の適正な利用料

(4) 「元気はつらつクラブ」の適正な利用料

「元気はつらつクラブ」の適正な利用料への回答としては、「100円」が2割と最も多く、それに「200～300円」(1割弱)が続いた(表2.19.4、図2.19.4)。

表2.19.4 「元気はつらつクラブ」の適正な利用料

	人数	割合(%)
100円	9	20.0
200～300円	3	6.7
400～500円	0	0.0
600円以上	0	0.0
無回答	33	73.3
合計	45	100

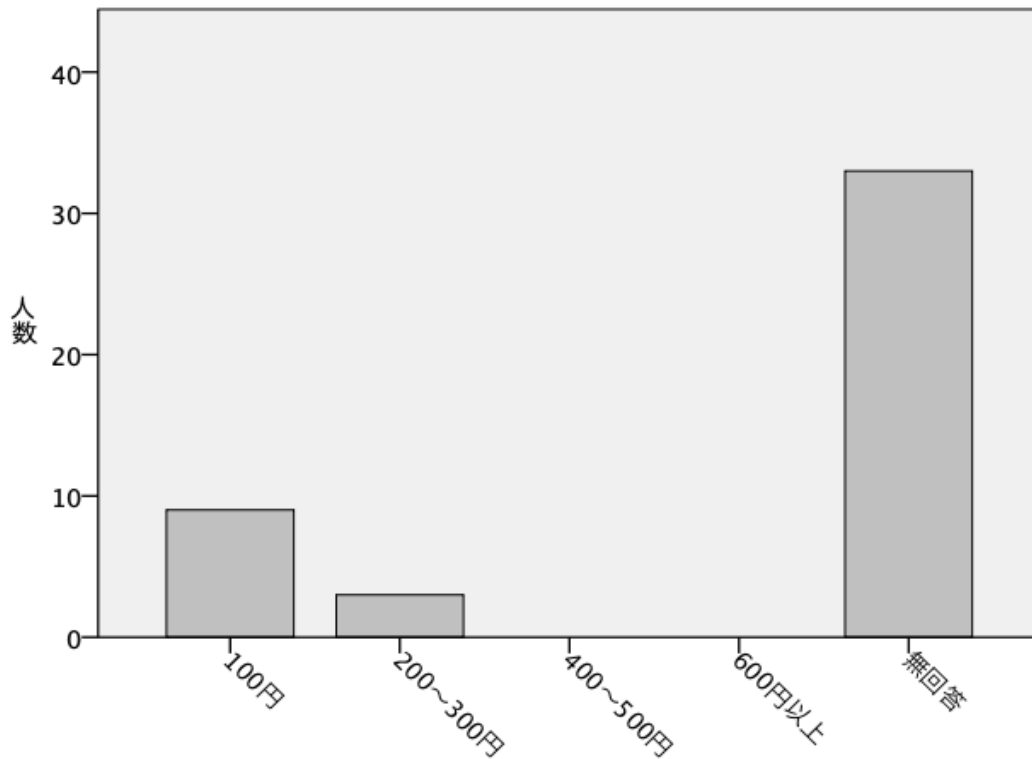


図2.19.4 「元気はつらつクラブ」の適正な利用料



(5) 「ハーモニーの会」の適正な利用料

「ハーモニーの会」の適正な利用料への回答としては、「100 円」が2割弱と最も多く、それに「200～300 円」(1割強)が続いた(表 2.19.5、図 2.19.5)。

表 2.19.5 「ハーモニーの会」の適正な利用料

	人数	割合(%)
100 円	8	17.8
200～300 円	6	13.3
400～500 円	0	0.0
600 円以上	0	0.0
無回答	31	68.9
合計	45	100

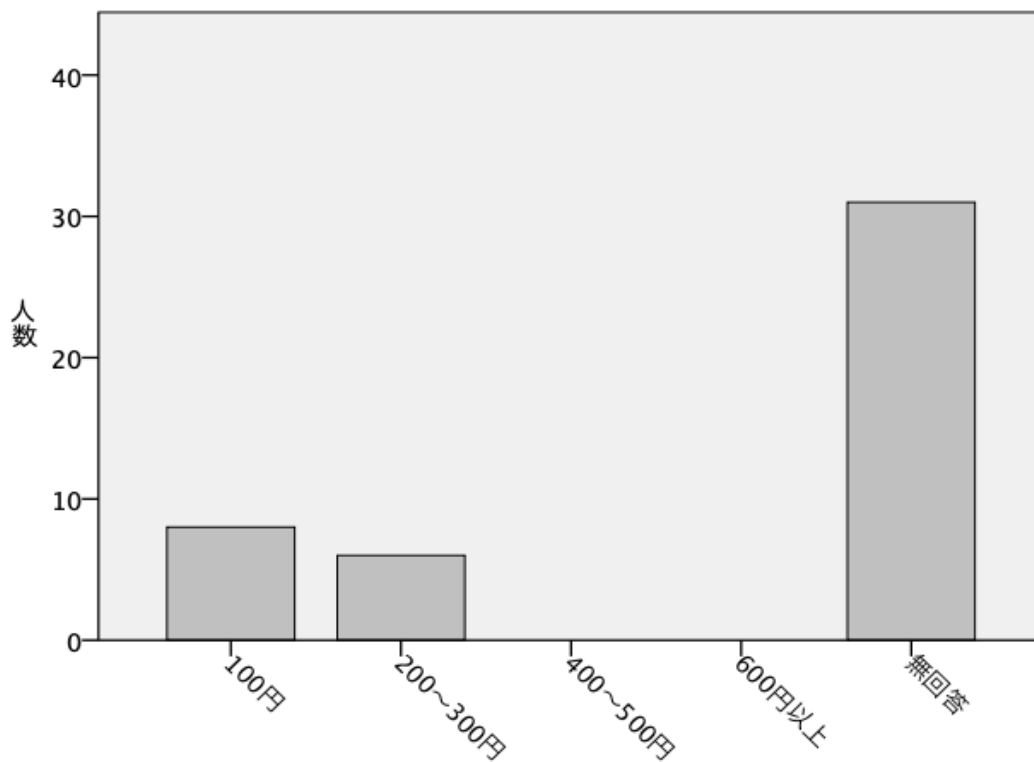


図 2.19.5 「ハーモニーの会」の適正な利用料

## 20. 八戸地域における高齢者の居場所の有無

八戸地域における高齢者の居場所の有無については、「ある」とする回答が4割に満たなかった(表2.20)。また、各項目の年齢層別の大まかな状況をみるため、それを分割変数としたピラミッド形式のグラフを構築して視覚的な確認を試みた。その結果、後期高齢者の回答は多いものから「ある」「どちらともいえない」「ない」という順であるのに対して、前期高齢者の回答については、度数が少ないなかではあるが、「ある」と「ない」が同数程度であることが分かった(「どちらともいえない」は皆無)(図2.20)。

表2.20 八戸地域における高齢者の居場所の有無

	人数	割合(%)
ない	9	20.0
どちらともいえない	9	20.0
ある	17	37.8
無回答	10	22.2
合計	45	100

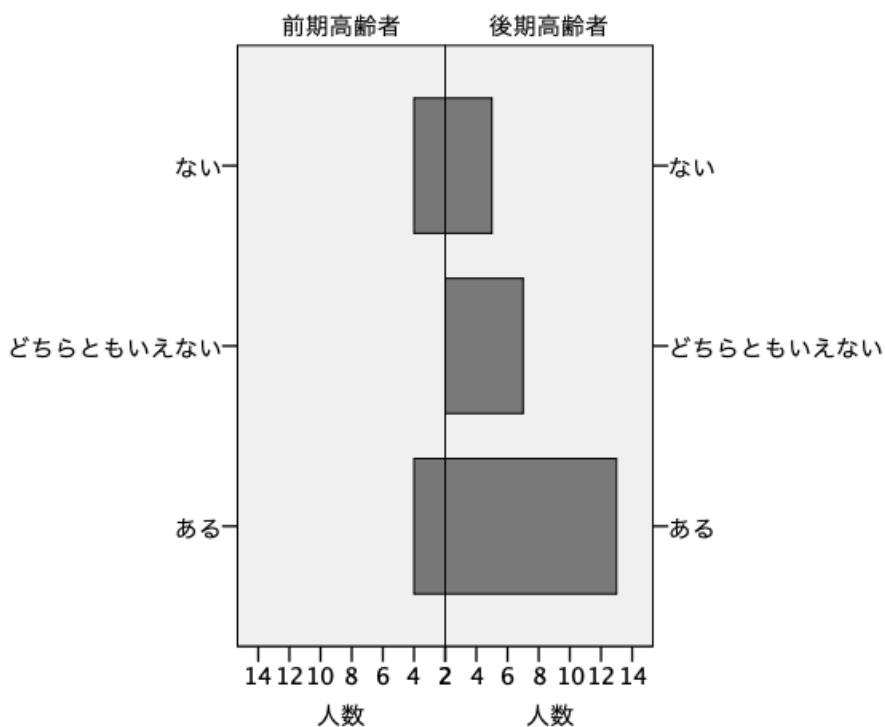


図2.20 年齢層ごとの八戸地域における高齢者の居場所の有無

## 21. 八戸地域において求める高齢者の居場所(複数回答可能項目)

八戸地域において求める高齢者の居場所については、「ボランティア的な就労の場」、「若い世代と交流する場」及び「生涯学習の場」にそれぞれ約3割の回答がみられた(表2.21、図2.21)。

なお、「その他」の回答理由として、「同世代と交流する場」という自由記述回答がみられた。

表2.21 八戸地域において求める高齢者の居場所

	人数	割合(%)
賃金を得られる就労の場	2	4.4
ボランティア的な就労の場	13	28.9
社会貢献活動の場	3	6.7
若い世代と交流する場	13	28.9
正式な学位を得られる学習の場	2	4.4
生涯学習の場	12	26.7
その他	4	8.9

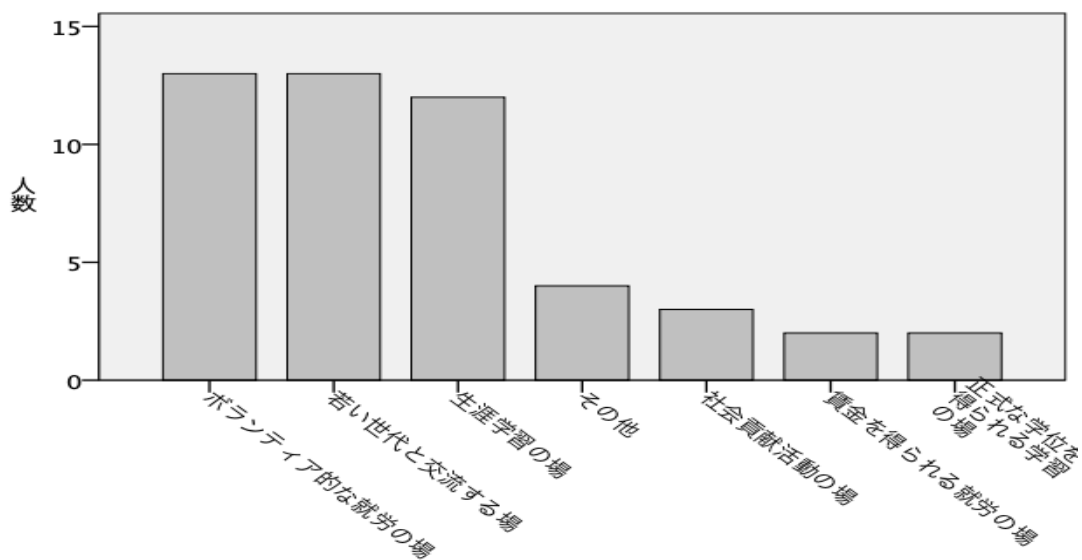


図2.21 八戸地域において求める高齢者の居場所

## 22. 八戸地域における高齢者の居場所の確保・創出・維持についての具体案(自由記述回答項目)

- ・そよ風のように気軽に来れる場。
- ・公民館講座等、色々あるので、自分のやってみたい事の一つぐらいはあるかと思いません。
- ・同年代の人達との会話(雑談も含めて)をする場所が欲しい。
- ・家の近くからいけるところを考えると、学校の空き教室等利用できないでしょうか。
- ・回数に限らずにいつでも受け入れて欲しい。
- ・自ら出て歩くことが少ないため、新聞以外に町内会で読めるよう広報して欲しい。

## 23. GSE

今後の調査研究及び実践のための基礎資料とするため、心理的要因であるGSEについても把握を試みた。GSEの測定には、坂野等(1986)<sup>19</sup>が開発した「一般性セルフ・エフィカシー尺度(以下、GESE)」を使用した。GESEは16の質問からなり、「行動の積極性」「失敗に対する不安」「能力の社会的位置づけ」の3因子より構成される。回答は二件法で、得点は0から16点に分布し、得点の高いほうがGSEの高いことを示す。またGESEは、一般成人のGSEを測定する尺度として高い信頼性と妥当性を有している(Kuder-Richardsonの21式による信頼度係数は $\gamma=.81$ 、再テスト法による相関関係は $\gamma=.84$ )<sup>20</sup>。さらにGESEは、「地域福祉向上パワースケール」との間に有意な相関が確認<sup>21</sup>されている。本調査では、GESEの合計点を確認した後にその高低の程度をあらわす5段階評定値<sup>22</sup>、すなわち、「LOW(成人男性：0～4点、成人女性：0～3点)」、「RATHER LOW(成人男性：5～8点、成人女性：4～7点)」、「MEDIATE(成人男性：9～11点、成人女性：8～10点)」、「RATHER HIGH(成人男性：12～15点、成人女性：11～14点)」及び「HIGH(成人男性：16点、成人女性：15～16点)」を考慮して、「LOW」と「RATHER LOW」を「低値群」、「MEDIATE」を「中値群」、「RATHER HIGH」と「HIGH」を「高値群」といった形で3カテゴリに分けた。

<sup>19</sup> 坂野雄二, 東條光彦. 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み. 行動療法研究. 1986. 12(1). 73-82.

<sup>20</sup> 坂野雄二. 一般性セルフ・エフィカシー尺度の：妥当性の検討. 早稲田大学人間科学研究. 1989. 2(1). 91-98.

<sup>21</sup> 渡辺裕一. 地域福祉における住民参加促進の実証的検討を目指して：住民が地域福祉向上に働きかけるパワーの測定の試み. 社会福祉学評論. 2004. 4. 7-17.

<sup>22</sup> 坂野雄二. 一般性セルフ・エフィカシー尺度の：妥当性の検討. 早稲田大学人間科学研究. 1989. 2(1). 91-98.

GSE の程度については、低値群が最も多く、それに「中値群」、「高値群」が続いた。「中値群」と「高値群」を合わせると約4割であるが、「低値群」が4割以上存在した(表2.23、図2.23)。

表 2.23 GSE の程度

	人数	割合(%)
低値群	19	42.2
中値群	12	26.7
高値群	6	13.3
欠損 <sup>23</sup>	8	17.8
合計	45	100

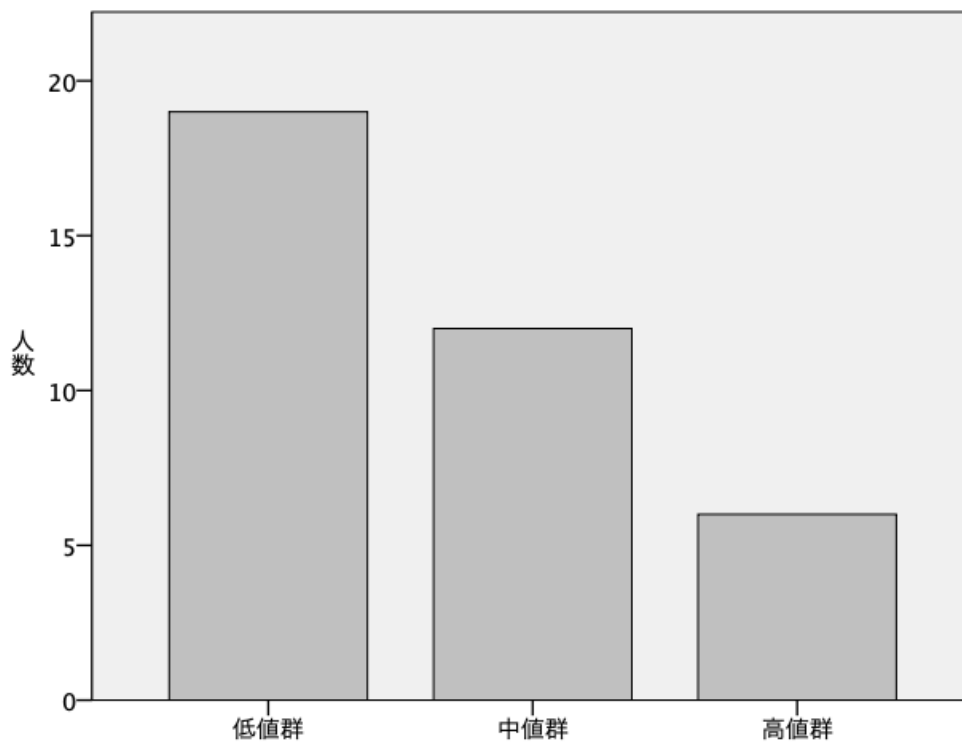


図 2.23 GSE の程度(欠損を除く)

<sup>23</sup> GSESの項目に1つ以上無回答があったものをさす。

### Ⅲ. まとめ

本調査によって、地域に根ざしつつ、高齢者を含む地域住民に対する居場所提供サービスに取り組むそよ風の利用者に関する基礎的な資料が得られた。具体的には、「性別」「年齢」「居住地域」「世帯形態」「要介護認定判定状況」「IADL能力」「インターネットの利用」「就業形態」「有償労働」「家庭内無償労働」「家庭外無償労働」「65歳以降に行ったことのある社会参加活動」「そよ風を知ったきっかけ」「そよ風の初回時の利用目的」「そよ風の利用に対する初回時の心配事」「そよ風の合計利用回数」「そよ風を複数回利用している理由」「そよ風で好きなプログラム」「そよ風の利用が自身に与えた影響」「そよ風の利用料についての考え」「そよ風の適正な利用料についての考え」「八戸地域における高齢者の居場所の有無」「八戸地域において求める高齢者の居場所」「八戸地域における高齢者の居場所の確保・創出・維持についての具体案」「GSE」について実態把握された。

本調査の分析対象件数と分析手法を考慮すれば、統計的な信頼性や妥当性を有するデータに基づく解釈とは必ずしもいえないが、今後の八戸市における生活支援体制整備、なかならず、そよ風及びその他の居場所提供サービスを行おうとする(または、既に行なっている)機関などでの支援実践やこの種の調査研究の参考資料とするためにも、分析結果より確認、あるいは可能性が示唆された主な事項を以下に示すことにしたい。

第1に、そよ風の利用者は、女性が圧倒的に多く、前期高齢者よりも後期高齢者のほうが2倍ほど多かった。<sup>24</sup>さらに、独居の高齢者よりも配偶者や子ども、孫と同居している高齢者のほうが多かった。これらについては、当事者ニーズや複合的な社会的状況、そよ風の運営方針なども前提要因として関連しようが、高齢者の居場所提供サービスとして包括的且つシームレスなサービス提供体制を築こうとする際には、男性や前期高齢者の利用に結びつけるための当事者ニーズの把握と対応、そして後述する当該サービス情報の周知システムの構築が重要となる。

第2に、わが国において、高齢者の閉じこもりや介護予防などについては社会的課題として既に広く知られているが、当事者がそよ風を利用すること自体、社会参加とみなせる。そよ風が利用者から心理的居場所として認識され、継続的な利用に結びついた場合、実際的に、介護予防にもつながると考えられる。そのような機能をそよ風は潜在的に有していると推察される。

---

<sup>24</sup> 図2.2のヒストグラムからは、後期高齢者のなかでも75歳から80歳位までの年齢層に特に利用者が多かったことが分かる(平均年齢は小数点第二位を四捨五入して76.7歳)。

第3に、プロダクティブ・アクティビティに関しては、分析対象者の9割以上が無職であったが、家事や庭の手入れなどをさす家庭内での無償労働を約9割、無償労働ボランティアや近隣住民の手伝い、民生委員活動などをさす家庭外無償労働を約3割が行なっていた。また、65歳以降の社会活動経験についての分析結果からは、それぞれの活動への参加経験の多様さがうかがえた。当事者が望む高齢者の居場所について、賃金を得られる就労の場への回答が1割に満たないのに対して、ボランティア的な就労の場は約3割の回答を得ていることから、就労意欲を有する人が一定程度存在すること、そして、同じ労働活動であっても、完全な有償労働よりもボランティア的な労働を望む人のほうが多いことが確認された。したがって、高齢者の居場所提供サービスのなかに就労機会(特にボランティア的な形態のもの)を組み込むことが当事者のニーズに即した実践となり得る可能性がある。

第4に、そよ風は、同じ物理的空間で人とのつながりや役割を持つことがかなう社会的居場所としての機能を有している。利用者の大半が能動的にそよ風を複数回利用していることから、本スペースが心理的居場所として認識され、その結果、継続的な利用につながっている可能性がある。これについては、そよ風を複数回利用している理由に関する記述データや本スペースのある白銀町以外の地域・地区から通う利用者が4割ほど存在すること、利用後に半数以上の人は気持ちが前向きになっていること、半数近くの人に友人ができてきていること、3割以上の人々が健康づくりや介護予防になったと自覚していることなどが根拠となろう。取り組みの継続やより質の高いサービスの提供を目指す観点からは、今後も当事者ニーズの把握を継続的に行い、それを居場所提供サービスに反映させ、当該実践システムを深化、強化していくことが重要となる。現状として、約3割の人がボランティア的な就労の場(前述)、若い世代と交流する場、生涯学習の場という機能を「居場所」に求めていることが明らかとなったが、これは当事者ニーズとして検討材料となる。

第5に、そよ風の適正な利用料については、「無料とすべき」と考える利用者が1割程度に留まった。それ以外の人々のプログラムごとの適正と考える利用料についても現状把握されたが、利用経験の浅い人も少なくないため、今後の取り組みの展開のなかでの当事者に対する継続的な意思確認が求められよう。なお、各プログラムについては、100～300円という価格帯を利用料として適正と考える人が一定程度存在したことについては、これも検討材料となる。

第6に、生活支援サービスに属する居場所提供サービスという社会資源の認知と利用についても触れておきたい。八戸市による「平成28年度高齢者の生活支援体制整備へ向けた

質問紙調査(以下、平成 28 年度調査)」<sup>25</sup>では、市内の自立的な在宅高齢者において、社会資源の認知と利用の程度が非常に低いことについて浮き彫りとなった。そのうえで、高齢者の生活支援体制の整備を進めるにあたり、社会資源の再確認や掘り起こしを行うことと同時に、既存の社会資源の周知が効果的にされることが重要であることについて指摘された。昨今の社会の情報化の進展具合からは、ICT の利用環境整備とリテラシーの向上による情報収集力の向上が重要と考えられる(例えば、そよ風の存在は Web 上<sup>26</sup>で把握し、利用案内も閲覧することができる)が、そよ風の利用者においてインターネットを利用している人は 1 割ほどであり、これは平成 28 年度調査のデータと同程度であった。このことから、現実的にまず着手すべきは、当事者が馴染んだ旧来の情報媒体からの情報獲得のためのさらなる環境整備といえよう。分析対象者において、八戸地域のそよ風以外の高齢者の居場所を認知していた人が 4 割に満たないことについては、より詳細な状況把握が望まれる。これについては、家庭環境や友人の有無などといった複合的な社会的状況が関係していようが、単に自宅の近辺に居場所が存在しない可能性や居場所提供機能のある既存の生活支援サービスが認知されていない可能性についても疑う必要がある。

---

<sup>25</sup> 小柳達也. 平成28年度高齢者の生活支援体制整備へ向けた質問紙調査結果報告書(バス券の交付を受ける高齢者を対象とした調査編). 八戸市高齢福祉課. 2017. 1-14.

<sup>26</sup> 社会福祉法人白銀会. 地域交流スペースそよ風のご案内. <http://green-hts.jp/wp-content/uploads/2016/08/そよ風-リーフレット.pdf>(2019年1月7日アクセス).



平成 30 年度 八戸市における高齢者の居場所に関する調査報告書：  
社会福祉法人白銀会「地域交流スペースそよ風」利用者に対する調査編

発行所 八戸市 高齢福祉課  
〒031-8686 青森県八戸市内丸一丁目 1 番 1 号  
発行日 平成 31 年 1 月 31 日  
執筆者 小柳達也(八戸学院大学健康医療学部)

## 目 次

I. 調査概要	1
1. 調査経緯	1
2. 調査目的	3
3. 調査対象	3
4. 調査期間	3
5. 調査方法	3
6. 倫理的配慮	3
7. 回収率	3
8. 調査項目	4
9. 分析方法	4
10. 本調査において使用する主な概念の定義	4
II. 分析結果	7
1. 性別	7
2. 年齢	8
3. 居住地域	9
4. 世帯形態	10
5. 要介護認定判定状況	11
6. 手段的自立能力	12
7. インターネットの利用	14
8. 就業形態	15
9. プロダクティブ・アクティビティ	16
10. 65歳以降に行ったことのある社会参加活動	19
11. そよ風を知ったきっかけ	21
12. そよ風の初回時の利用目的	22
13. そよ風の利用に対する初回時の心配事	23
14. そよ風の合計利用回数	24
15. そよ風を複数回利用している理由	25

16.そよ風で好きなプログラム	27
17.そよ風の利用が自身に与えた影響	29
18.そよ風の利用料についての考え	30
19.そよ風の適正な利用料についての考え	31
20.八戸地域における高齢者の居場所の有無	36
21.八戸地域において求める高齢者の居場所	37
22.八戸地域における高齢者の居場所の確保・創出・維持についての具体案	38
23.GSE	38
Ⅲ. まとめ	40

平成 30 年度  
八戸市における高齢者の居場所  
に関する調査報告書（案）

～社会福祉法人白銀会「地域交流スペースそよ風」従事者に対する調査編～

平成 31 年 1 月 31 日  
八戸市高齢福祉課

## I. 調査概要

### 1. 調査経緯

八戸市では、平成 30 年度より八戸市生活支援体制整備推進協議会が設置され、多様な主体による自助や互助を推進するための各種検討が組織的に行われている。また、本事業の展開のなかで、地域住民、八戸学院大学の教員、同大学の学生(小柳達也研究室所属生)及び八戸市が連携・協力する「住み慣れた地域での生活を考えるワークショップ」(以下、ワークショップ)が市内各地で開催され、住民ニーズの把握と解決策の検討が同時に行われている。

平成 30 年 2 月 23 日、鮫地区、南浜地区及び白銀南地区を対象として実施された第 3 回ワークショップにおいて、参加者から「高齢者の居場所がない」という声が聞かれた。それが契機となり、同年 3 月 28 日に開催された第 3 回八戸市生活支援体制整備推進協議会にて八戸市内の高齢者の居場所に関する調査の実施について審議され、承認された。

その後迅速に、本事業の第一層生活支援コーディネーターによって市内における高齢者に対する居場所提供サービスに関する取り組みの先進事例について調査が行われた。結果として、昨今の社会福祉法人改革の潮流のなか、平成 29 年度より、社会福祉法人白銀会(以下、白銀会)「地域交流スペースそよ風」(以下、そよ風)において、その様なサービスの提供が行われていることについて確認された(表 1.1)。まだ萌芽的な取り組みであるが、一定程度の利用者が現れ、5 種類のプログラムを中核として、地域に根ざした居場所提供サービスが提供されているとのことであった。そこで、同法人の御理解と御協力のもと、そのサービスの利用者と従事者双方に対して実態把握調査を実施した。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> 本調査においては、利用者に対する調査をまとめた「利用者編」と従事者に対する調査をまとめた「従事者編」の合計 2 編の報告書を作成している。

表 1.1 そよ風の概要

所在地	八戸市堀ノ外9-3										
開設日	平成29年4月1日										
利用対象	基本的には、八戸市内の地域住民が利用対象とされている。 <sup>2</sup> 年齢や障害の有無などは不問である。										
1日あたりの参加者数	その日によるが、多いときで1日50名程度である。										
プログラム	<table border="0"> <tr> <td>みんな食堂(毎月5日)</td> <td>: 食事の提供(子ども食堂の拡大版)</td> </tr> <tr> <td>おもいで学校(毎月10日)</td> <td>: 地域回想法</td> </tr> <tr> <td>オレンジカフェ(毎月15日)</td> <td>: 住民間・世代間交流</td> </tr> <tr> <td>元気はつらつクラブ(毎月20日)</td> <td>: 介護予防・健康づくりのための運動</td> </tr> <tr> <td>ハーモニーの会(毎月25日)</td> <td>: 音楽を取り入れたレクリエーション</td> </tr> </table>	みんな食堂(毎月5日)	: 食事の提供(子ども食堂の拡大版)	おもいで学校(毎月10日)	: 地域回想法	オレンジカフェ(毎月15日)	: 住民間・世代間交流	元気はつらつクラブ(毎月20日)	: 介護予防・健康づくりのための運動	ハーモニーの会(毎月25日)	: 音楽を取り入れたレクリエーション
みんな食堂(毎月5日)	: 食事の提供(子ども食堂の拡大版)										
おもいで学校(毎月10日)	: 地域回想法										
オレンジカフェ(毎月15日)	: 住民間・世代間交流										
元気はつらつクラブ(毎月20日)	: 介護予防・健康づくりのための運動										
ハーモニーの会(毎月25日)	: 音楽を取り入れたレクリエーション										
利用料	無料										
従事者	白銀会の職員										
経緯	<p>白銀会では、1980年代後半より、地域に密着した保育や高齢者福祉に関する事業が展開されている。また、平成23年の東日本大震災後には、法人職員が一体となった住民支援が実施されるなど、地域に根ざした福祉実践が続けられている。</p> <p>そのようななか、平成27年頃より、全国的に社会福祉法人による地域貢献活動が話題にのぼるようになったため、新たな取り組みについて検討されることになった。平成29年1月、本法人職員によって「子ども食堂を全世代向けに拡大して実施してはどうか」と提案されたことが契機となり、そよ風の構想がはじまった。職員間での検討のみならず、八戸市高齢福祉課を含む関係各所との意見交換が行われた後、中核とするプログラムなどの内容がまとめられた。そして、平成29年度より、主なコンセプトに「高齢者を含む地域住民への居場所提供」を据えたサービスの提供が開始されている。</p>										

<sup>2</sup> 当初は、白銀会のある白銀町周辺の地域住民が利用対象として想定されていたが、平成30年9月現在、八戸市内の幅広い地域の住民から利用されている。また、人数は多くないが、市外から通う利用者もみられるようになっている。

## 2. 調査目的

本調査の目的は、八戸市の生活支援体制整備の一環として、同市内において地域住民に対する居場所提供サービスに取り組むそよ風の従事者の実態について、当事者の意思を含め把握することである。

## 3. 調査対象

そよ風で従事する白銀会の職員

## 4. 調査期間

平成30年9月5日～9月20日

## 5. 調査方法

対面法による自記式質問紙調査

## 6. 倫理的配慮

本調査は、八戸学院大学研究倫理委員会の承認を経て実施した(平成30年8月7日承認)。調査者から調査対象者に対して、書面と口頭にて調査協力は強制でないこと、途中の辞退も自由なこと、調査結果は統計的に処理され、個人を特定できない形でデータ化し、八戸市の生活支援体制の整備及び調査研究目的以外には利用しないことについて説明したうえで調査協力依頼が行われた。そして、調査協力を同意をした人に対してのみ調査を実施する体制がとられた。これにより、調査対象者の調査協力に対する任意性の確保に配慮した。

## 7. 回収率

調査票の配布は25件であり、全て回収された(回収率100%)。この25件を有効回収とした。

## 8. 調査項目

「性別」「年齢」「出身地」「所属部署」「所属部署における職位・役職」「職種」「所属部署での合計勤務年数」「白銀会での合計勤務年数」「介護・福祉業界での合計勤務年数」「転職回数」「そよ風での従事回数」「そよ風のプログラムの合計担当回数」「そよ風で担当経験のあるプログラム」「そよ風での従事のきっかけとなった人物」「そよ風での従事前の心境」「そよ風での従事後の心境」「そよ風での従事に対する業務負担感」「そよ風での従事を望む理由」<sup>3</sup>「そよ風で従事したことによる自身の変化」「そよ風をはじめたことによる職場内の変化」「そよ風は職員にとってどのようなものか」「そよ風は地域住民にとってどのようなものだと思うか」「そよ風について思っていること」

## 9. 分析方法

基礎統計量の計測を基本としながら、適宜、クロス分析を行った。また、自由記述回答については、全ての記述内容を確認したうえでカテゴリ化を行った。

統計分析には SPSS Statistics24.0 を使用した。

## 10. 本調査において使用する主な概念の定義

### (1) 従事者

本調査では、従事者を「そよ風で従事する白銀会の職員」<sup>4</sup>と定義する。

### (2) 高齢者の居場所

既存の調査研究による高齢者の居場所の定義は多様であり、統一には至っていない。そのようななか、上野等 (2017)<sup>5</sup>は、高齢者の居場所に関する国内文献について網羅的なレビューを行い、物理的環境を居場所と認識された居場所である「物理的居場所」、人とのつながりや役割が得られるなど、人との関係やつながりを持てる場所と認識される「社会的

---

<sup>3</sup> 本調査項目については、そよ風での従事後に「従事したい」「どちらかといえば従事したい」という心境にあるが、そこでの業務が負担増と感じている人を質問対象とした。

<sup>4</sup> そよ風は、基本的に法人内の他の事業所に所属する職員が手分けをしながら協力しあう形態で運営されている。

<sup>5</sup> 上野佳代, 菊池和美, 長田久雄. 国内文献にみる高齢者の居場所に関する研究: エイジング・イン・プレイスにむけて. 老年学雑誌. 2017. 8. 33-50.



居場所」を抽出している。<sup>6</sup>一方で、居場所については、心や仮想現実(virtual reality)、SNS(social networking service)などのなかにそれをもつとする認識のされ方もある。また、自宅や遠方に存在する憩いの場を居場所と捉えることもできようが、本調査が照射している居場所は住み慣れた地域における自宅以外のそれである。これらを踏まえ、本調査では、高齢者の居場所を「自宅から通える範囲にあり、人との関係やつながりを持つことがかなう物理的に存在する場所」と定義する。

---

<sup>6</sup> 上野等(2017)<sup>4</sup>は、国内文献のレビューから、高齢者が感じている居心地や心の拠り所と認識された居場所をさす「心理的居場所」についても抽出している。地域における高齢者に関する自助・互助についての取り組みにおける共通課題を当事者の参加の継続としたうえで、その参加がされる場が心理的居場所になれば継続できることを示唆しつつ、「物理的居場所が社会的居場所として存在し、心理的居場所になる可能性は新たな研究課題」との見解を示している。

## Ⅱ. 分析結果

前述のように、回収された 25 件(回収率 100%)の調査票のうち、全てを分析対象とした。  
以下に分析結果を述べていく。

### 1. 性別

性別については、「女性」が 8 割近くを占めた(表 2.1、図 2.1)。

表 2.1 性別

	人数	割合(%)
女性	19	76.0
男性	6	24.0
合計	25	100

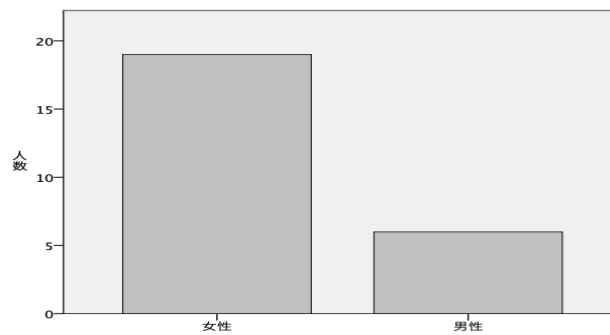


図 2.1 性別

## 2. 年齢

年齢については、「30歳代」と「50歳代」が約3割ずつ存在し、その他の年代よりも多かった。それに「40歳代」(2割)、「20歳代」(約1割)、「60歳代以上」(約5分)が続いた(表2.2)。また、平均年齢(平均値)と各年齢の分布は図2.2の通りである。

表2.2 年齢層

	人数	割合(%)
10歳代	0	0.0
20歳代	2	8.0
30歳代	8	32.0
40歳代	5	20.0
50歳代	8	32.0
60歳代以上	1	4.0
無回答	1	4.0
合計	25	100

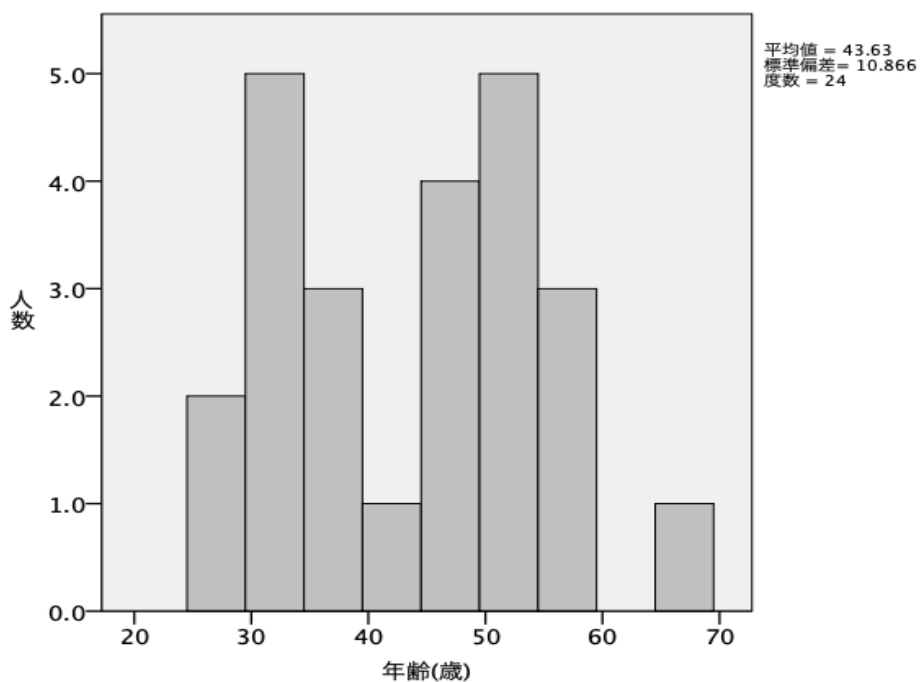


図2.2 平均年齢(平均値)と各年齢の分布

### 3. 出身地

「八戸市内」の出身者が8割以上を占めた(表2.3、図2.3)。

表2.3 出身地

	人数	割合(%)
八戸市内	21	84.0
八戸市外	4	16.0
合計	45	100

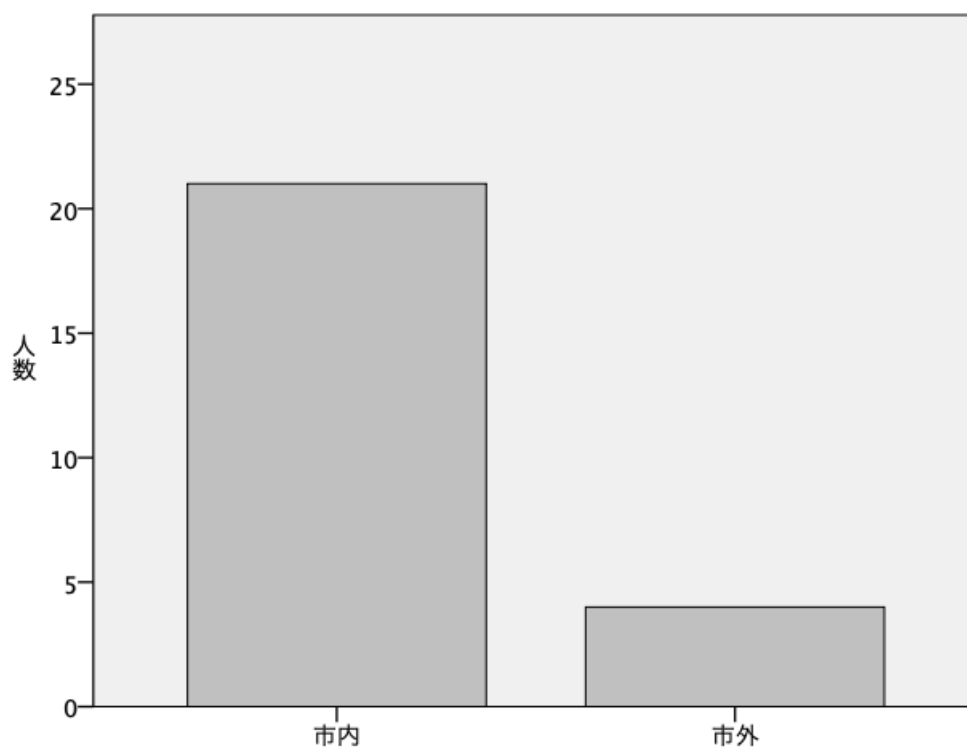


図2.3 出身地

#### 4. 所属部署

主な所属部署については、「グループホーム」が4割と最も多く、それに「通所介護事業所」(約3割)、「居宅介護支援事業所」(約1割5分)、「ケアハウス」(約1割)が続いた(表2.4、図2.4)。

表2.4 所属部署

	人数	割合(%)
通所介護事業所	8	32.0
居宅介護事業所	4	16.0
ケアハウス	3	12.0
グループホーム	10	40.0
合計	25	100

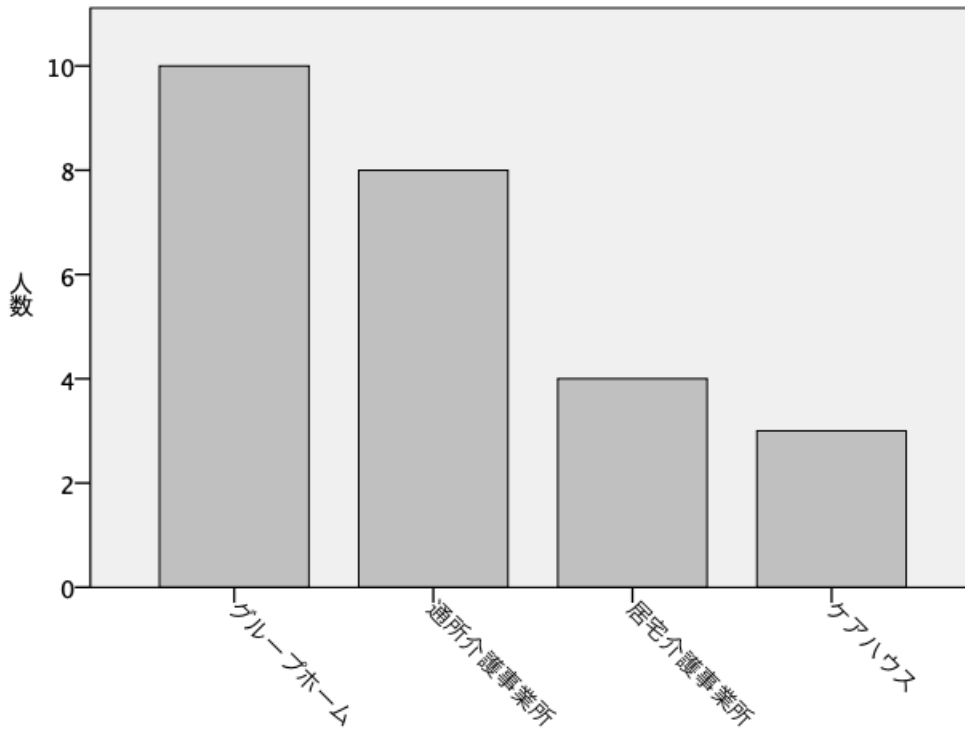


図2.4 所属部署

## 5. 所属部署における職位・役職

所属部署における職位・役職については、「一般職員」が6割を占めたが、「副主任」や「主任」、「管理者」も1～1割5分程度存在した(表2.5、図2.5)。

表2.5 所属部署における職位・役職

	人数	割合(%)
一般職員	15	60.0
副主任	3	12.0
主任	4	16.0
管理者	3	12.0
合計	25	100

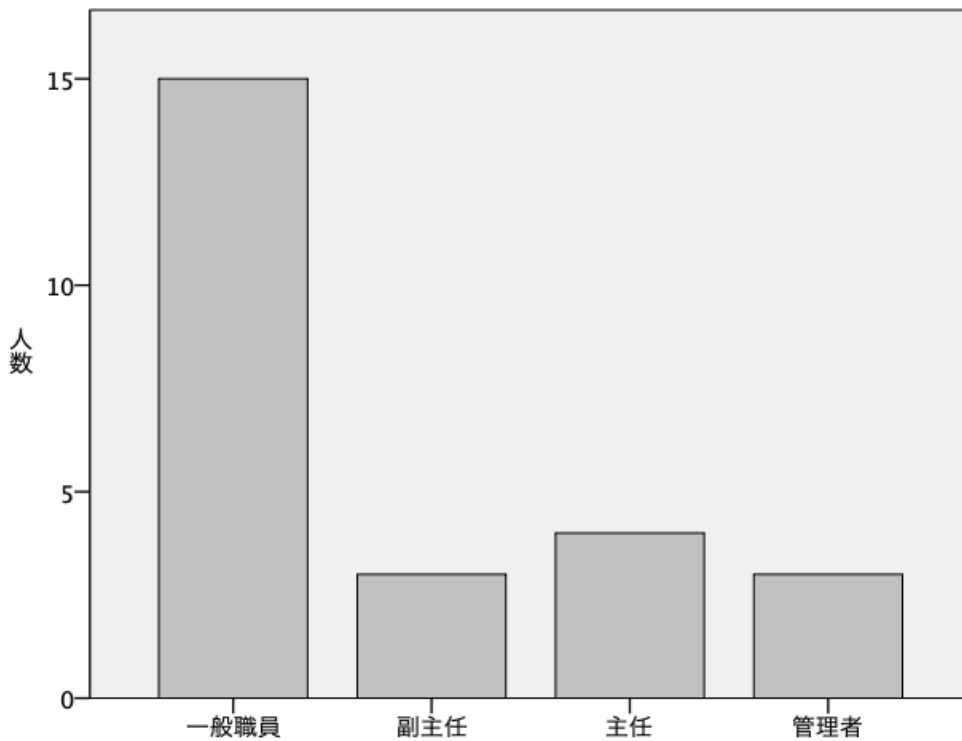


図2.5 所属部署における職位・役職

## 6. 職種

主とする職種については、「介護士」が7割近くを占めた。それ以外では、「介護支援専門員」が約1割5分、「看護師」と「生活相談員」が約1割ずつ存在した(表2.6、図2.6)。

表2.6 職種

	人数	割合(%)
介護士	17	68.0
看護師	2	8.0
介護支援専門員	4	16.0
生活相談員	2	8.0
その他	0	0.0
合計	25	100

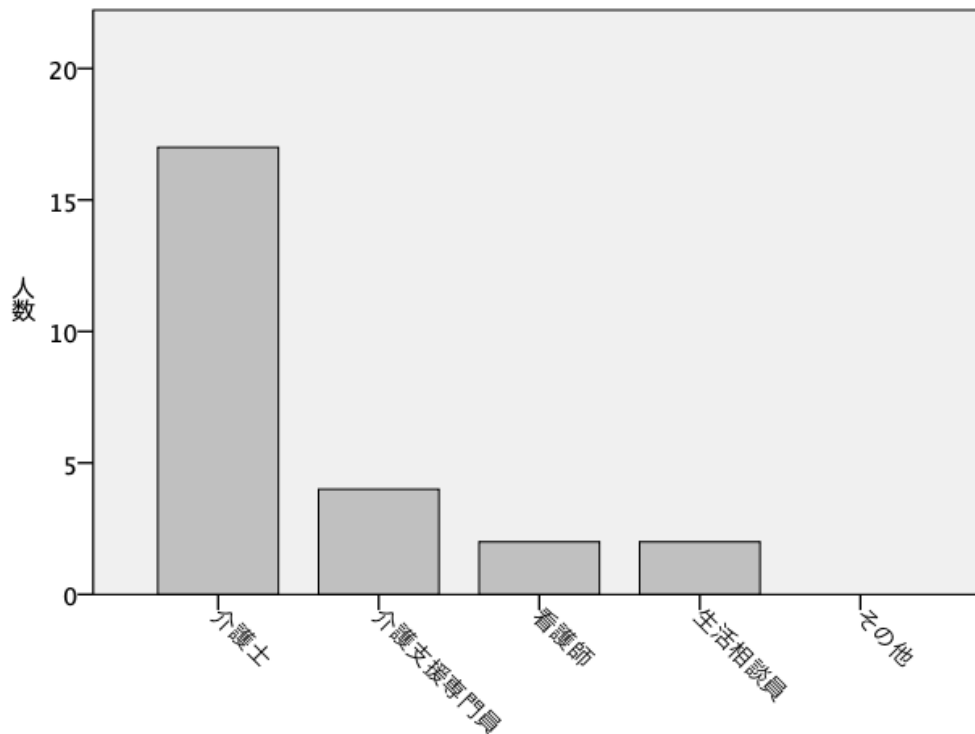


表2.6 職種

## 7. 所属部署での合計勤務年数

所属部署での合計勤務年数については、「5年未満」が4割と最も多く、それに「5年以上10年未満」(約2割5分)、「10年以上15年未満」(2割)、「15年以上20年未満」(約1割)などが続いた(表2.7、図2.7)。

表2.7 所属部署での合計勤務年数

	人数	割合(%)
5年未満	10	40.0
5年以上10年未満	6	24.0
10年以上15年未満	5	20.0
15年以上20年未満	3	12.0
20年以上	1	4.0
合計	25	100

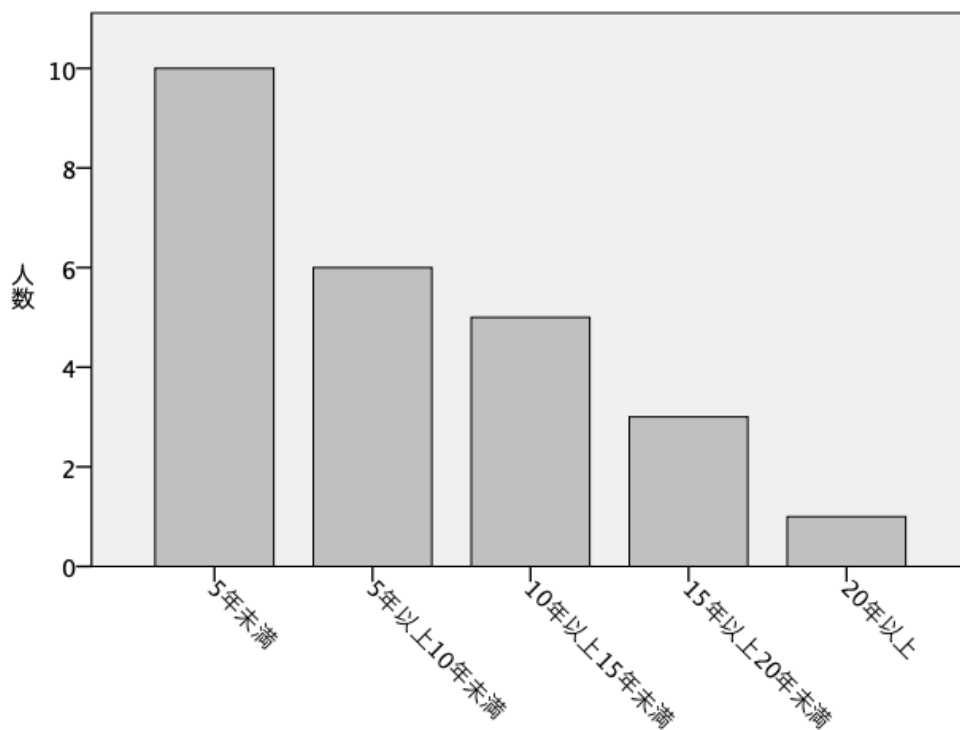


図2.7 所属部署での合計勤務年数



## 8. 白銀会での合計勤務年数

白銀会での合計勤務年数については、「5年未満」と「10年以上15年未満」が約3割ずつ存在し、6割近くを占めた。それ以外では、割合の多い順に「5年以上10年未満」(2割)、「15年以上20年未満」(約1割5分)、「20年以上」(約1割)となった(表2.8、図2.8)。

表2.8 白銀会での合計勤務年数

	人数	割合(%)
5年未満	7	28.0
5年以上10年未満	5	20.0
10年以上15年未満	7	28.0
15年以上20年未満	4	16.0
20年以上	2	8.0
合計	25	100

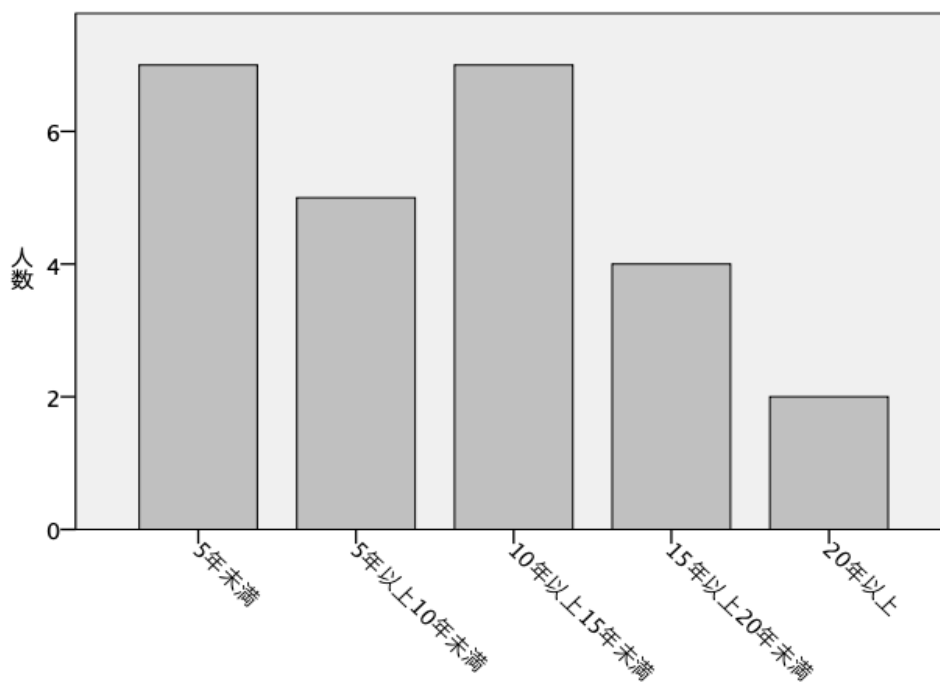


表2.8 白銀会での合計勤務年数

## 9. 介護・福祉業界での合計勤務年数

介護・福祉業界での合計勤務年数については、「10年以上15年未満」が3割をやや上回り最も多かった。それに「5年以上10年未満」(約3割)、「15年以上20年未満」(2割)、「5年未満」(約1割)、「20年以上」(約1割)が続いた(表2.9、図2.9)。

表2.9 介護・福祉業界での合計勤務年数

	人数	割合(%)
5年未満	3	12.0
5年以上10年未満	7	28.0
10年以上15年未満	8	32.0
15年以上20年未満	5	20.0
20年以上	2	8.0
合計	25	100

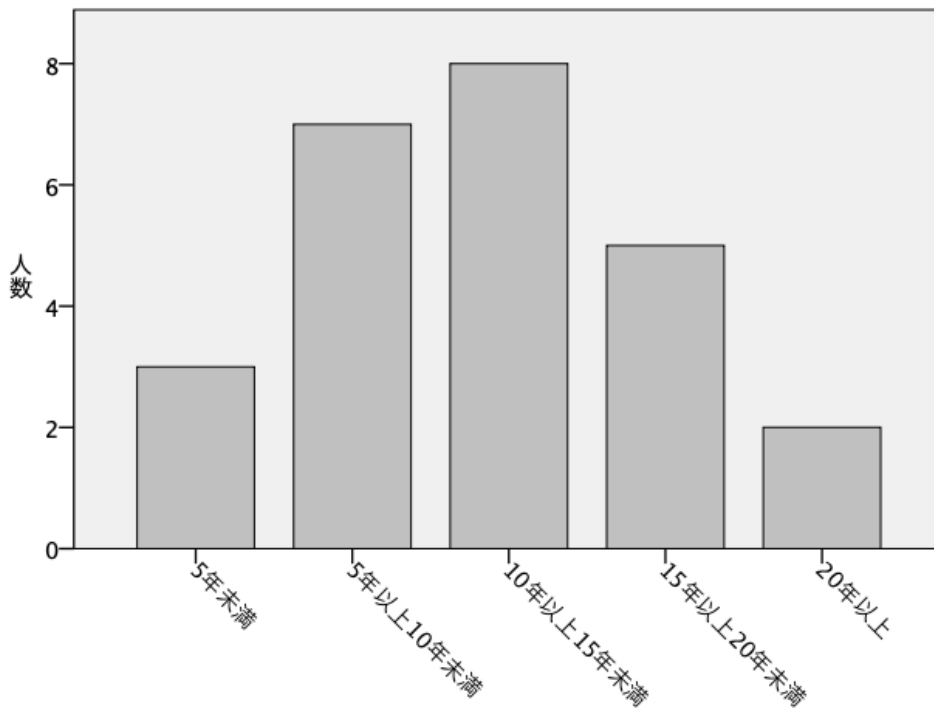


図2.9 介護・福祉業界での合計勤務年数

## 10. 転職回数

転職回数については、「3～4回」が約3割5分と最も多く、それに「1～2回」(約3割)などが続いた。「転職経験なし」は1割ほどであった(表2.10、図2.10)。

表 2.10 転職回数

	人数	割合(%)
転職経験なし	3	12.0
1～2回	8	32.0
3～4回	9	36.0
5回以上	3	12.0
無回答	2	8.0
合計	25	100

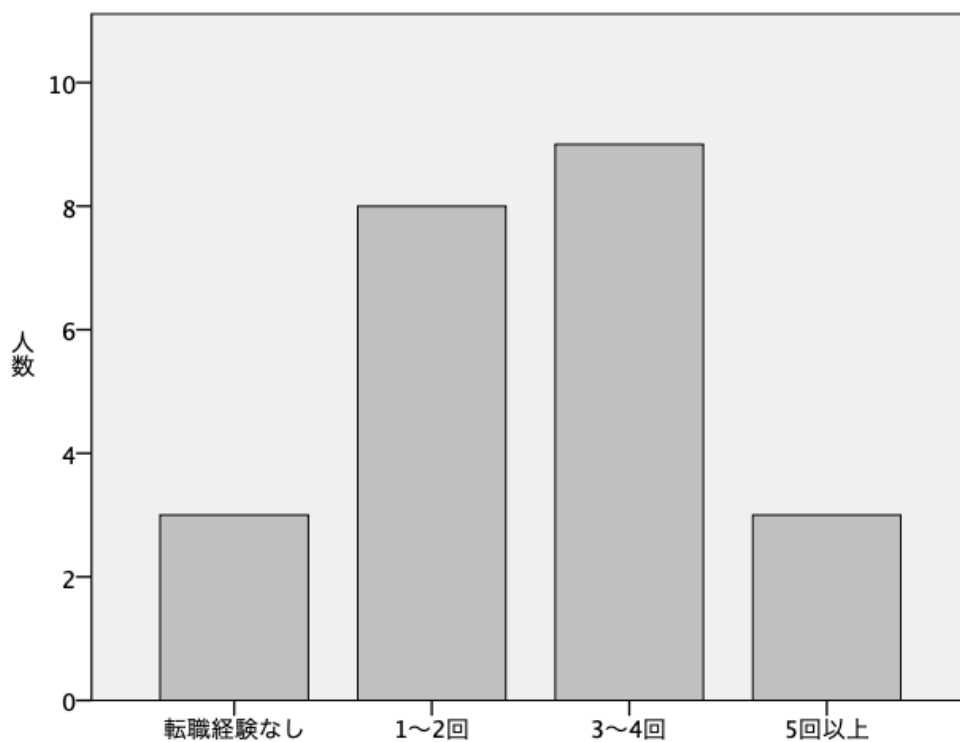


図 2.10 転職回数(無回答を除く)

## 11. そよ風での従事回数

そよ風での従事回数については、「10回以上30回未満」が4割と最も多かった。一方で、「5回未満」も3割ほどみられた(表2.11、図2.11)。

表2.11 そよ風での従事回数

	人数	割合(%)
5回未満	7	28.0
5回以上10回未満	1	4.0
10回以上30回未満	10	40.0
30回以上60回未満	3	12.0
60回以上	2	8.0
無回答	2	8.0
合計	25	100

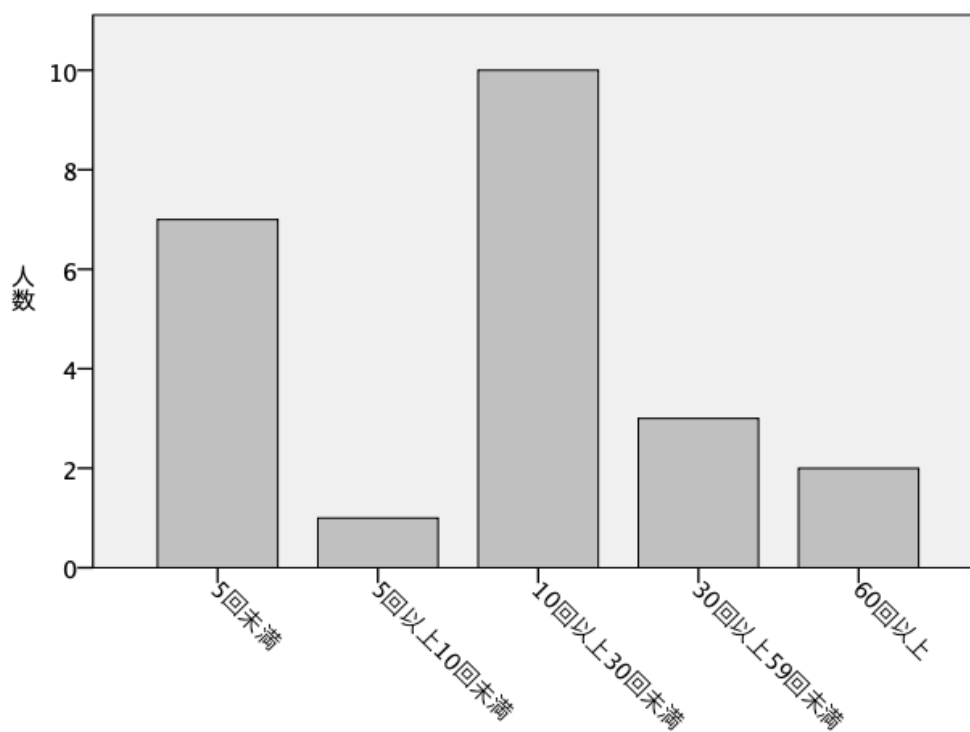


図2.11 そよ風での従事回数(無回答を除く)

## 12. そよ風のプログラムの合計担当回数

そよ風のプログラムの合計担当回数については、「1回」が約3割と最も多かった。また、半数以上が複数回担当経験者であった。一方で、「担当経験なし」も1割ほどみられた(表2.12、図2.12)。

表2.12 そよ風のプログラムの合計担当回数

	人数	割合(%)
担当経験なし	3	12.0
1回	8	32.0
2回	5	20.0
3回	3	12.0
4回	1	4.0
5回	5	20.0
合計	25	100

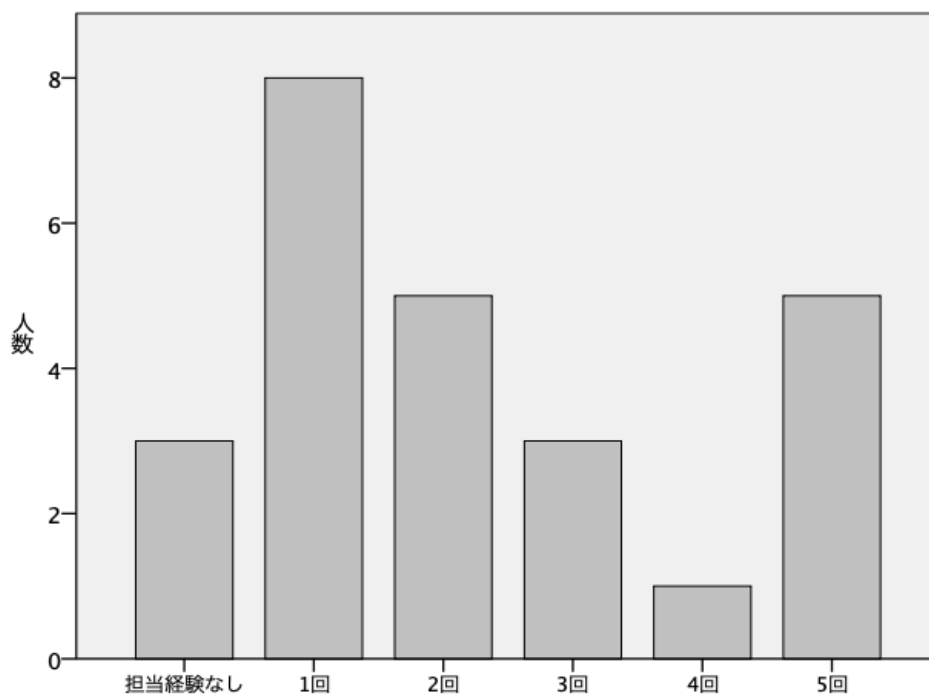


図2.12 そよ風のプログラムの合計担当回数

### 13. そよ風で担当経験のあるプログラム(複数回答可能項目)

そよ風で担当経験のあるプログラムについては、「オレンジカフェ」(約3割5分)以外の4つは、4割以上5割未満ほどでほぼ横並びであった。大きな差ではないが、「オレンジカフェ」は約3割5分と他のプログラムと比較するとやや少なかった(表2.13、図2.13)。

表2.13 そよ風で担当経験のあるプログラム

	人数	割合(%)
みんな食堂	11	44.0
おもいで学校	12	48.0
オレンジカフェ	9	36.0
元気はつらつクラブ	11	44.0
ハーモニーの回	11	44.0

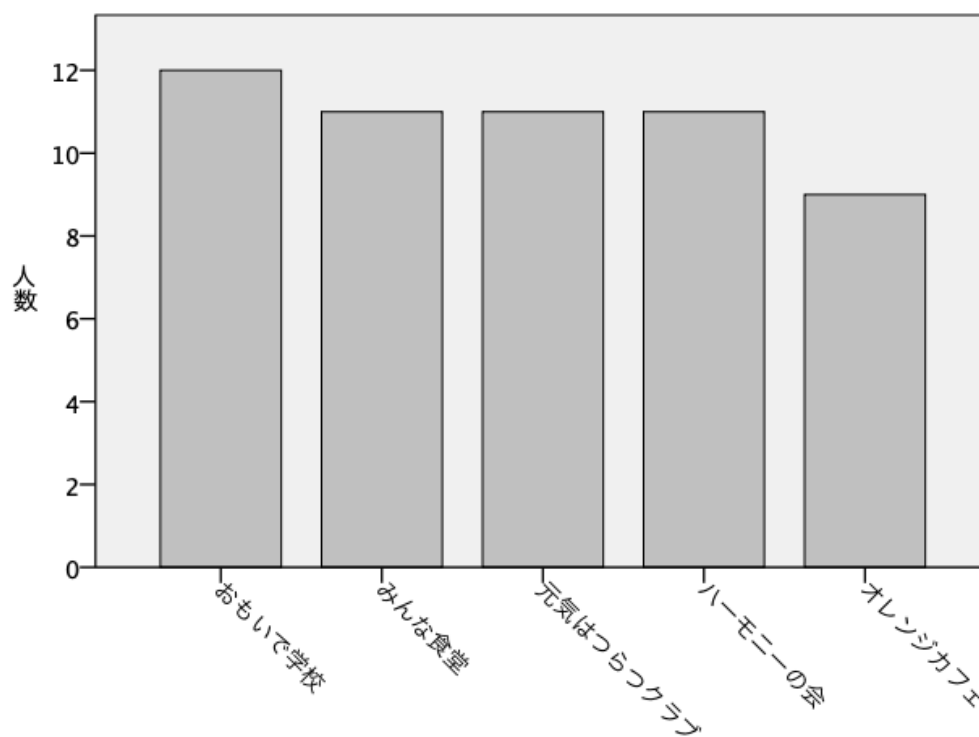


図2.13 そよ風で担当経験のあるプログラム

#### 14 そよ風での従事のきっかけとなった人物

そよ風での従事のきっかけとなった人物については、9割以上を「所属部署の上司」が占めた(表2.14、図2.14)。

表2.14 そよ風での従事のきっかけとなった人物

	人数	割合(%)
所属部署の上司	23	92.0
所属部署以外の法人職員	1	4.0
その他	1	4.0
合計	25	100

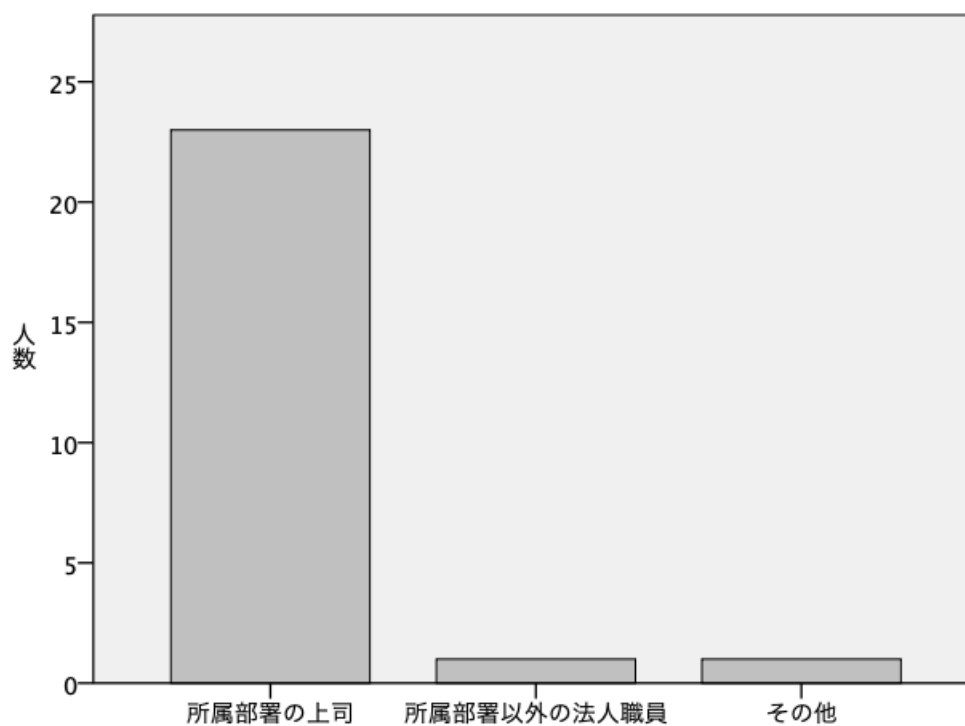


図2.14 そよ風での従事のきっかけとなった人物

## 15. そよ風での従事前の心境

そよ風での従事前の心境については、6割近くが従事に対して前向きであったことが分かった。さらに、「従事したくない」という心境であった人は皆無であった。一方で、「どちらともいえない」が約3割、「どちらかといえば従事したくない」が約1割存在していたことも分かった(表2.15、図2.15)。

表2.15 そよ風での従事前の心境

	人数	割合(%)
従事したい	7	28.0
どちらかといえば従事したい	7	28.0
どちらともいえない	8	32.0
どちらかといえば従事したくない	3	12.0
従事したくない	0	0.0
合計	25	100

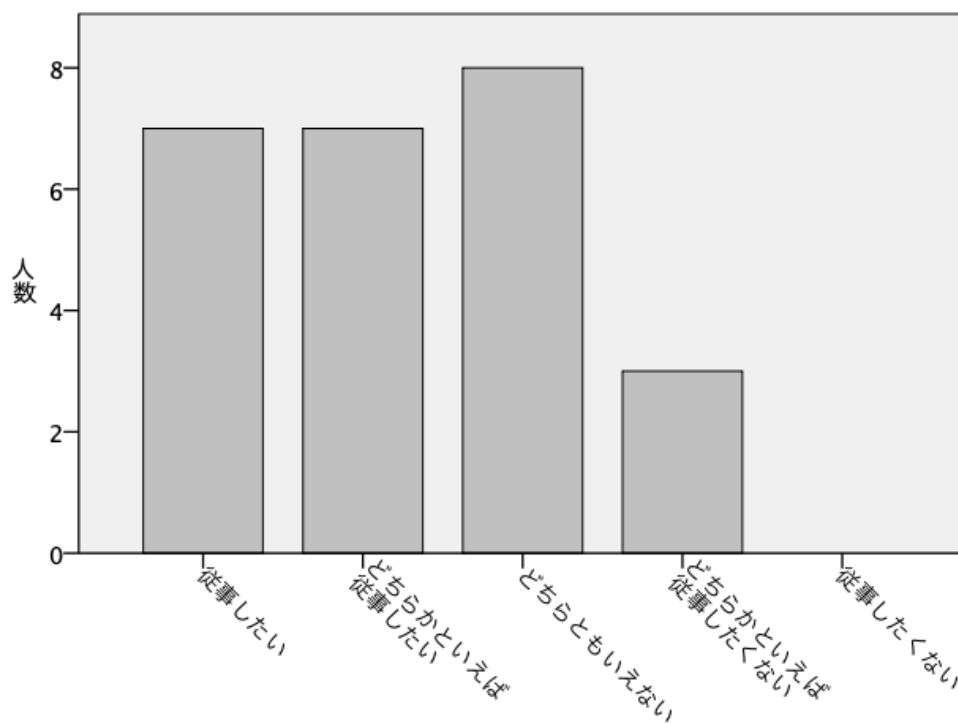


図2.15 そよ風での従事前の心境



なお、そよ風での従事前の心境については、以下の自由記述回答がみられた。

〈「従事したい」の選択者による回答〉

- ・色々勉強になり、地域の方のことや高齢者の考えが分かるから。
- ・地域で役割を担う仕事なので興味があるため。
- ・地域貢献というよりは新しい取組への挑戦することに興味があった。又、この経験はデイサービスでの業務に活かせると感じた為。
- ・地域の方に向けてよい発信ができると思ったから。

〈「どちらかといえば従事したい」の選択者による回答〉

- ・普段接している方と異なり、初対面の方と活動を行うことに不安があったが、楽しみでもあったため。

〈「どちらかといえば従事したくない」の選択者による回答〉

- ・人前で話すことが得意ではないため、司会、講師はさげたい。しかし、仕事ですのでやるからには責任を持って行い、自分も楽しめる工夫をしている。
- ・最初は何をしたらいいのか、どう動いたらいいのか全く分からなかったから、不安が多かった。

## 16. そよ風での従事後の心境

そよ風での従事後の心境については、8割5分近くが従事に対して前向きであった。また、「従事したくない」は従事前と同様に皆無であった。一方で、「どちらともいえない」が約1割、「どちらかといえば従事したくない」が約5分みられた(表2.16.1、図2.16)。

表2.16.1 そよ風での従事後の心境

	人数	割合(%)
従事したい	11	44.0
どちらかといえば従事したい	10	40.0
どちらともいえない	3	12.0
どちらかといえば従事したくない	1	4.0
従事したくない	0	0.0
合計	25	100

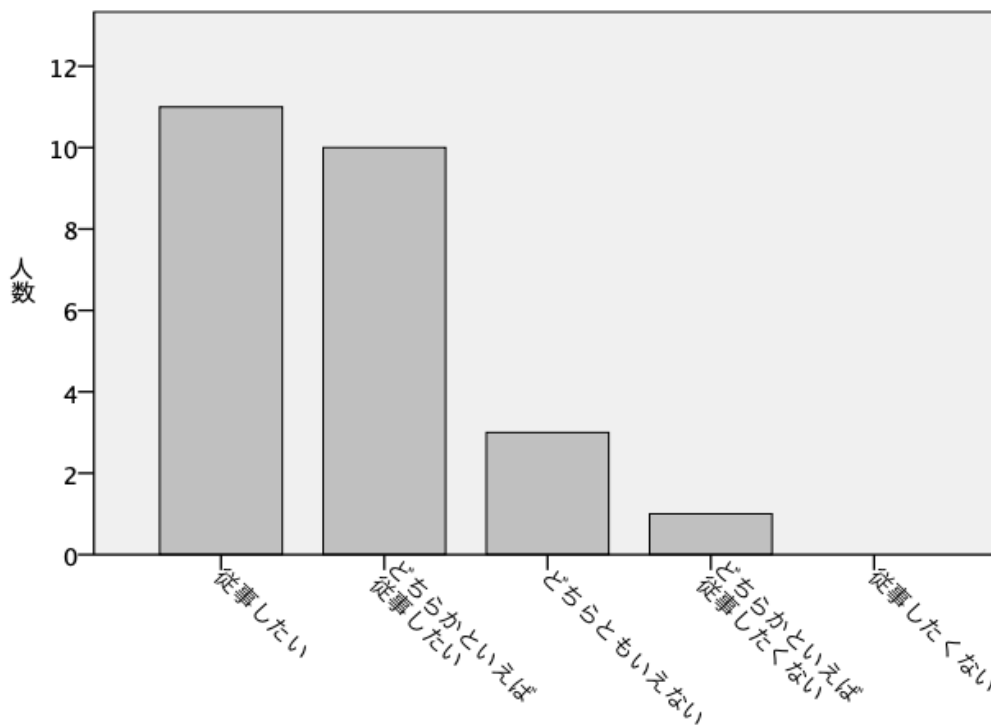


図2.16 そよ風での従事後の心境

上記の単純集計後、そよ風での従事前と従事後の心境の変化を観察するためにクロス分析を行った(表 2.16.2)。その結果、従事前に「どちらかといえば従事したくない」という心境であった3人のうち、2人が「どちらかといえば従事したい」、1人が「どちらともいえない」と従事後の心境に前向きな変化が起きていた。また、従事前に「どちらともいえない」と回答した8人のうち、1人が「従事したい」、4人が「どちらかといえば従事したい」と従事後の心境に前向きな変化が起きていた(2人は変化なし)。さらに、従事前に「どちらかといえば従事したい」という心境であった7人のうち3人が「従事したい」と心境に前向きな変化が起きていた(4人は変化なし)。一方で、従事前に「従事したい」という心境であった7人については、全員が従事後も「従事したい」という心境のままであった。

表 2.16.2 そよ風での従事前と従事後の心境

		従事後の心境				合計
		従事したい	どちらかといえば従事したい	どちらともいえない	どちらかといえば従事したくない	
従事前の心境	従事したい	7	0	0	0	7
	どちらかといえば従事したい	3	4	0	0	7
	どちらともいえない	1	4	2	1	8
	どちらかといえば従事したくない	0	2	1	0	3
	合計	11	10	3	1	25

なお、そよ風での従事後の心境については、以下の自由記述回答もみられた。

〈「従事したい」の選択者による回答〉

- ・参加者が本当に楽しんでくださる為。
- ・不安やプレッシャーはあったが、来て下さった方の表情を見て充実感を得られた為。
- ・良い雰囲気、皆さんも笑顔が見られており、私自身も楽しく思った。
- ・地域の方の反応を見て。

〈「どちらかといえば従事したい」の選択者による回答〉

- ・参加者が喜んで下さることは嬉しいですが、やはり緊張。負担は自分にはあります。
- ・楽しかった為。

## 17. そよ風での従事に対する業務負担感

そよ風での従事に対する業務負担感については、「変化なし」が約7割を占めた。一方で、「負担増」が3割ほどみられた(表2.17、図2.17)。

表2.17 そよ風での従事に対する業務負担感

	人数	割合(%)
負担増	8	32.0
変化なし	17	68.0
負担減	0	0.0
合計	25	100

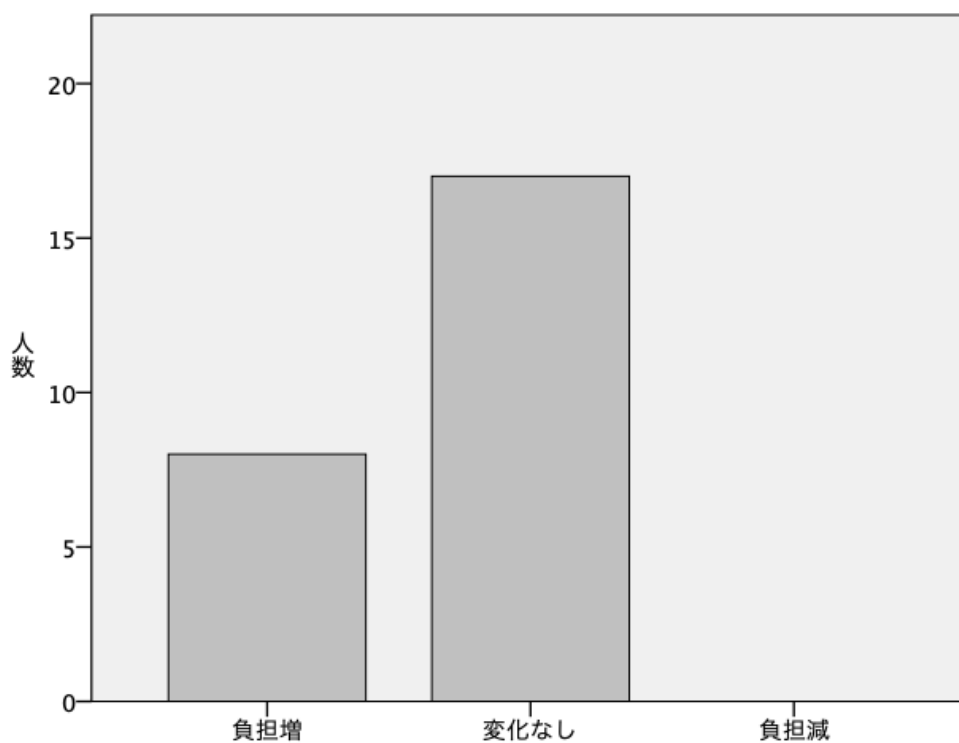


図2.17 そよ風での従事に対する業務負担感

## 18. そよ風での従事を望む理由

そよ風での従事後に「従事したい」「どちらかといえば従事したい」という心境にあるが、そこでの業務が負担増と感じていたのは6人であった。その6人に限定して、業務負担が増えているにも関わらず、「そよ風での従事を希望する理由」を問うたところ、以下の自由記述回答が得られた。

- ・地域の方への対応をどうしたらいいのか考える又は来て良かったと言う言葉を聞くと嬉しいため。
- ・地域の高齢者のしていること、思いが分かったり、身体能力がわかったりし、楽しんでいただけることがうれしいため。人と話し、笑い、健康に役立てることができうれしいです。さみしい思いをさせたくないです。
- ・負担増であるが、介護を必要としない方々と関わることで、介護で今何が必要なのかを知る機会となる。余剰にスタッフも配置していただいているのでありがたい。
- ・負担は増えるが、自分自身の学びの場となる。又地域の方との交流は単純に楽しい。
- ・それ以上に、自分の得るもの(考えの広がり、深まりや、対人援助に関わる様々なこと)が大きいと感じるため。

## 19. そよ風で従事したことによる自身の変化（自由記述回答項目）

そよ風で従事したことによる自身の変化に関する記述データを全て確認した後、内容・種類別にカテゴリ化を試みた。を試みた。その結果、以下のように「従事者の成長、意識の変化(17件)」「地域住民との関係(13件)」「特に変化、実感なし(5件)」という3つのカテゴリが生成された。なお、一度いずれかのカテゴリに属させた記述データであっても、その後登場するカテゴリに関係している場合は再掲し、新たなカテゴリの構成データ・件数に加えることにした。また、各カテゴリに配属させた記述データについては、当該カテゴリと別の内容・種類が含まれている場合でも、つながりのある文章がみられたため、原文のまま記載することとした。

### 【カテゴリ1】従事者の成長、意識の変化(17件)

- ・地域の方ともすすんで話しかけることが出来るようになった。
- ・人前での講師という経験にはなっているためありがたいと思う。
- ・教えてもらったことを誰かに知ってもらいたいと思う気持ちの変化。
- ・思いが分かりケアハウスにもいかせることがあり、やりがいがある。
- ・人の為に何をしたら喜んでもらえるかを考えるようになった。
- ・地域の人たちへの関心が増えた。
- ・地域において思った以上に孤独感をもたれている方が多いと感じた。他者との関わりを大切にしていきたいと思うようになった。
- ・介護に対する考え方が変わった。「要介護者」への施策より、それ以前の取組が最も大切と思う。今後の方向性として。
- ・利用者様が声を上げて笑い楽しんでいる姿にうれしく思い、達成感に似た感情がありました。
- ・地域の方々と接することで、「介護の担い手」としての意識が高まった。
- ・地域におけるネットワーク構築の重要性を再確認した。
- ・人との交流が大切だと感じたため業務にいかしている。
- ・現在の職場の中だけでなく、地域に目を向けて活動を行っていきたいと思うようになった。
- ・専門職として地域の一員として地域づくりにかかわる意識が高まった。
- ・ホームの利用者様だけでなく、地域の方々が元気でこの町での生活を続けることができることを支えたい。力になりたいと考えるようになった。

- ・今、所属している施設の利用者さん以外の方々と接することもでき、普段学べないことを学べる機会となるため。
- ・普段、地域の方のお話を聞いたり、接する機会がなかったので、そよ風に参加することで周りを見るようになった。

### 【カテゴリ2】地域住民との関係(13件)

- ・地域の方との交流の場が増え良かったと感じた。
- ・地域の方との交流が増えた。
- ・地域の方々の顔が分かるようになり会話、挨拶の場が増えた。
- ・地域の人たちへの関心が増えた。(再掲)
- ・地域において思った以上に孤独感をもたれている方が多いと感じた。他者との関わりを大切にしていきたいと思うようになった。(再掲)
- ・地域の方々と接することで、「介護の担い手」との意識が高まった。(再掲)
- ・地域におけるネットワーク構築の重要性を再確認した。(再掲)
- ・人との交流が大切だと感じたため業務にいかしている。(再掲)
- ・現在の職場の中だけでなく、地域に目を向けて活動を行っていきたいと思うようになった。(再掲)
- ・専門職として地域の一員として地域づくりにかかわる意識が高まった。(再掲)
- ・ホームの利用者様だけでなく、地域の方々が元気でこの町での生活を続けることができることを支えたい。力になりたいと考えるようになった。(再掲)
- ・今、所属している施設の利用者さん以外の方々と接することもでき、普段学べないことを学べる機会となるため。(再掲)
- ・普段、地域の方のお話を聞いたり、接する機会がなかったので、そよ風に参加することで周りを見るようになった。(再掲)

### 【カテゴリ3】特に変化、実感なし(5件)

- ・特にありません。
- ・特になし。
- ・今のところ実感は無い。
- ・特になし。
- ・特になし。

## 20. そよ風をはじめたことによる職場内の変化（自由記述回答項目）

そよ風をはじめたことによる職場内の変化に関する記述データを全て確認した後、内容・種類別にカテゴリ化を試みた。その結果、以下のように「従事者の成長(9件)」「法人内の別事業所の利用者への還元(8件)」「地域や法人内の別事業所の利用者の家族との関係(4件)」「職場内での話題(1件)」「業務の両立(1件)」「特に変化なし、不明(7件)」という6つのカテゴリが生成された。なお、一度いずれかのカテゴリに属させた記述データであっても、その後登場するカテゴリに関係している場合は再掲し、新たなカテゴリの構成データ・件数に加えることにした。また、各カテゴリに配属させた記述データについては、当該カテゴリと別の内容・種類が含まれている場合でも、つながりのある文章がみられたため、原文のまま記載することとした。

### 【カテゴリ1】従事者の成長(9件)

- ・作業の仕方や日常的に回想法ができたりしている。
- ・他の事業所の職員が担当しているものを見てお客様の反応を見ることができて良い刺激になり、自分の努力へつながっていると思う。
- ・利用者さんに教えたいという気持ちとレクリエーションの参考になった。
- ・その年代に合わせた話題づくりができてきた。
- ・他者との関わり方に変化があると思う。理解力ある方々と交流することで業務にいかされてきている。
- ・デイ利用者様へ、体操、ハーモニーの提供が行えている。
- ・そよ風で行った活動などをいかすことができている。
- ・現在行っていることを、どのように地域へ発信していくかを考えるようになった。
- ・地域における社会資源の一つにかかわっている意識ができた。

### 【カテゴリ2】法人内の別事業所の利用者への還元(8件)

- ・デイサービスのレクの時間にも活かせるようになった。
- ・そよ風で行った事を、皆職場に活かしており、新しい活動を利用者と行うことができている。
- ・外出できる場所が増え、活動の幅が広がった。
- ・そよ風での活動の工夫をグループホームケアにいかしている。
- ・利用者様の活動の充実を図るために「そよ風」を利用する取組が増えた。



- ・あまり他のスタッフを行かせていないため変化は分からないが、自分としてはそよ風であったエピソードなどを伝えるようにはしている。
- ・デイ利用者様へ、体操、ハーモニーの提供が行えている。(再掲)
- ・他者との関わり方に変化があると思う。理解力ある方々と交流することで業務にいかされてきている。(再掲)
- ・そよ風で行った活動などをいかすことができている。(再掲)

### 【カテゴリ3】地域や法人内の別事業所の利用者の家族との関係(4件)

- ・地域との関わりがもてる。
- ・ホーム入居の御家族様との会話に時々出てきています。白銀会を理解していただけるチャンスと考えています。
- ・現在行っていることを、どのように地域へ発信していくかを考えるようになった。(再掲)
- ・地域における社会資源の一つにかかわっている意識ができた。(再掲)

### 【カテゴリ4】職場内での話題(1件)

- ・行事について話題になることがあります。

### 【カテゴリ5】業務の両立(1件)

- ・業務の範囲が増加しており、デイサービス業務への取組はうすくなっているように思う。そよ風での取組をフィードバックする場面もあるのですが…。

### 【カテゴリ6】特に変化なし、不明(7件)

- ・あまり他のスタッフを行かせていないため変化は分からないが、自分としてはそよ風であったエピソードなどを伝えるようにはしている。(再掲)
- ・特に感じない。
- ・特になし。
- ・特になし。
- ・特になし。
- ・特になし。
- ・分からない。
- ・分かりません。

## 21. そよ風は職員にとってどのようなものか（自由記述回答項目）

そよ風は職員にとってどのようなものかに関する記述データを全て確認した後、内容・種類別にカテゴリ化を試みた。その結果、以下のように「地域住民との関係、交流（18件）」「従事者の成長、原点回帰、自己実現（8件）」「ミスマッチの可能性（1件）」「仕事の一環（1件）」「不明（1件）」という5つのカテゴリが生成された。なお、一度いずれかのカテゴリに属させた記述データであっても、その後登場するカテゴリに関係している場合は再掲し、新たなカテゴリの構成データ・件数に加えることにした。また、各カテゴリに配属させた記述データについては、当該カテゴリと別の内容・種類が含まれている場合でも、つながりのある文章がみられたため、原文のまま記載することとした。

### 【カテゴリ1】地域住民との関係、交流（18件）

- ・地域の人に寄り添い支えていける場。
- ・施設は閉鎖的というイメージを変えられる。オープンになると思う。
- ・地域の方の窓口。
- ・地域の実情や住民を知るいい手段だと思う。
- ・地域交流。
- ・地域の方々とのふれあえる場所。
- ・地域の拠点であることを生きがいに、色々と学べる。
- ・地域との交流の場、情報交換の場と思う。
- ・地域住民とつながる場所。
- ・地域の方との交流の場。
- ・日々の勉強が地域発展に繋がっていけばいいと思う。
- ・地域の人たちとの交流機会と高齢者との話題など気づきになると思う。
- ・インフォーマルな社会資源として重要な役割を果たしている場。
- ・地域の方々と気軽に交流できる場所。
- ・地域と繋がる場。
- ・地域の人に自分たちのやっていること、やってきたことを見てもらう場。
- ・利用者様の交流や刺激となるスペースになっているため職員もその姿を見れる。
- ・個人では出会えない人とのつながりになると思っています。

### 【カテゴリ2】 従事者の成長、原点回帰、自己実現(8件)

- ・介護に日々向かっているなかで、自分に立ち返ることができる業務となっていると思う。
- ・意識の高い職員にとっては学びの場であり、ひとつの自己実現の場であるが、苦痛を感じる職員もいると思う。
- ・様々な力をつけていく場所。
- ・新たな気づきができる場所。
- ・地域の拠点であることを生きがいに、色々と学べる。
- ・地域に目を向けて、介護が必要な方や、援助をしている方を共に支えていけるような考えを持つきっかけになるのではと思う。
- ・専門職として、地域の一員として考え、視野を広げる場。
- ・地域の人たちとの交流機会と高齢者との話題など気づきになると思う。(再掲)

### 【カテゴリ3】 ミスマッチの可能性(1件)

- ・意識の高い職員にとっては学びの場であり、ひとつの自己実現の場であるが、苦痛を感じる職員もいると思う。(再掲)

### 【カテゴリ4】 仕事の一環(1件)

- ・仕事の一環。

### 【カテゴリ5】 不明(1件)

- ・分かりません。

## 22. そよ風は地域住民にとってどのようなものだと思うか（自由記述回答項目）

そよ風は地域住民にとってどのようなものだと思うかに関する記述データを全て確認した後、内容・種類別にカテゴリ化を試みた。その結果、以下のように「地域における居場所、憩いの場(20件)」「生きがい、楽しみの得られる場(3件)」「役割を持ち、特技がいかせる場(3件)」「生涯学習の場(1件)」「活動性の向上の場(1件)」「不明(1件)」という6つのカテゴリが生成された。なお、一度いずれかのカテゴリに属させた記述データであっても、その後登場するカテゴリに関係している場合は再掲し、新たなカテゴリの構成データ・件数に加えることにした。また、各カテゴリに配属させた記述データについては、当該カテゴリと別の内容・種類が含まれている場合でも、つながりのある文章がみられたため、原文のまま記載することとした。

### 【カテゴリ1】地域における居場所、憩いの場（20件）

- ・悩み相談、憩いの場。
- ・地域のいこいの場。
- ・他者との交流、いこいの場、悩み相談の場。
- ・集いの場、交流できて気分転換できる場所。
- ・人とのつながりを取り戻す場。活動性を高める場。力の発揮の場。
- ・安心、頼れる、地域との輪を広げることのできる所と考える。
- ・笑顔になれる場所、楽しめる場所。
- ・イベントの他、介護相談、他者との交流の場。
- ・話し相手ができる、やりたいと思うことが増える、自分の特技をいかせる場。
- ・楽しみ、いこいの場所。
- ・地域やスタッフとの交流の場、憩いの場。
- ・地域貢献として地域の方が幸せだと感じてもらえる場になればいいと思う。
- ・1人ではないという事を感じられる場所。
- ・憩いのスペース。言葉通り「そよ風」の様に自然なりラックスした場所だと思う。
- ・気軽に立ち寄れるいこいの場、何かあったときに相談できる場(であって欲しい)。
- ・地域交流の場。
- ・誰でも集まれる地域の居場所。認知症についての正しい知識を理解できる場。
- ・「あってよかった」と思ってもらえるような心のよりどころとなる場所であって欲しい。
- ・普段、悩みや愚痴等、吐き出せないことを吐き出せ、様々な方々と交流できる。

- ・気軽に立ち寄れる場所。ちょっとおしゃれをして行ってみようと思える場所。役に立  
てる場所。出会える場所。

#### 【カテゴリ2】生きがい、楽しみの得られる場(3件)

- ・高齢者、利用している方にとっては確実に生きがい、楽しみになっている。
- ・子供食堂としての役割は果たしていないが、各イベントを「楽しめる場所」という感  
覚であろうと考えられる。実際、仲間以外との交流は少ない。
- ・楽しみがある場所、楽しめる場所。

#### 【カテゴリ3】役割を持ち、特技がいかせる場(3件)

- ・人とのつながりを取り戻す場。活動性を高める場。力の発揮の場。(再掲)
- ・話し相手ができる、やりたいと思うことが増える、自分の特技をいかせる場。(再掲)
- ・気軽に立ち寄れる場所。ちょっとおしゃれをして行ってみようと思える場所。役に立  
てる場所。出会える場所。(再掲)

#### 【カテゴリ4】生涯学習の場(1件)

- ・誰でも集まれる地域の居場所。認知症についての正しい知識を理解できる場。(再掲)

#### 【カテゴリ5】活動性の向上の場(1件)

- ・人とのつながりを取り戻す場。活動性を高める場。力の発揮の場。(再掲)

#### 【カテゴリ6】不明(1件)

- ・分かりません。

### 23. そよ風について思っていること(自由記述回答項目)

そよ風について思っていることに関する記述データを全て確認した後、内容・種類別にカテゴリ化を試みた。その結果、以下のように「地域における居場所(5件)」「業務負担、事業の継続性(3件)」「世代間交流、子ども・学生の参加(2件)」「介護予防機能(2件)」「生きがい、楽しみ(2件)」「法人内の別事業所の利用者への還元(1件)」「利用者の役割(1件)」「利用料(1件)」「地域住民のニーズへの対応(1件)」という9つのカテゴリが生成された。なお、一度いずれかのカテゴリに属させた記述データであっても、その後登場するカテゴリに関係している場合は再掲し、新たなカテゴリの構成データ・件数に加えることにした。また、各カテゴリに配属させた記述データについては、当該カテゴリと別の内容・種類が含まれている場合でも、つながりのある文章がみられたため、原文のまま記載することとした。

#### 【カテゴリ1】地域における居場所(5件)

- ・老若男女問わずいつでも集える「居場所」が理想的と考える。そうなれば介護予防としての効果も期待できるのではと思う。
- ・今後は困り事の相談所であり、趣味の発表の場であり、世代を超えた場所になってくれれば良いと思っている。
- ・本来のそよ風の目的とは違っていると思うが、違うなりに地域にとって必要なものとなっていると思う。しかし、こういったそよ風のような地域貢献や介護予防への取組を社会福祉法人単体で継続していくのは困難であろうと思う。又、もう1～2段サービスの質を上げていかなければ、他の地域イベントとの差が大きいが、基本的に無償の為、質の向上に限界がある。
- ・地域になじみ、地域の方も介護施設の利用者もいつでも行ける場所になって欲しいです。
- ・地域の方々と三世代、四世代の交流の場になればと思います。

#### 【カテゴリ2】業務負担、事業の継続性(3件)

- ・デイサービス業務を行いながら、そよ風の計画が毎月のルーティンになっているが、職員の負担はやはり増えていると思われる。体力的、精神的な疲れがたまらないよう調整しているが、そうするとデイの業務が…となる。でもどの職種もやること、求められることが増えていると思いますので、ここだけではなく時代だと思っています。ポジ

タイプにとらえるとフィードバックして相乗効果を生み出すことになるため、その方向で現在捉えています。

- ・利用者様と一緒にそよ風へいきたいと思っているが、1年くらいは全く動く事ができていない。
- ・本来のそよ風の目的とは違っていると思うが、違うなりに地域にとって必要なものとなっていると思う。しかし、こういったそよ風のような地域貢献や介護予防への取組を社会福祉法人単体で継続していくのは困難であろうと思う。又、もう1～2段サービスの質を上げていかなければ、他の地域イベントとの差が大きいが、基本的に無償の為、質の向上に限界がある。(再掲)

### 【カテゴリ3】世代間交流、子ども・学生の参加(2件)

- ・子どももたくさんこれるようにと考えているが、あまり子どもさんがこないのが今の問題点です。行事の無い日の利用の仕方を考えないともったいないです。
- ・子供、学生の参加があれば世代間交流ができる。

### 【カテゴリ4】介護予防機能(2件)

- ・老若男女問わずいつでも集える「居場所」が理想的と考える。そうなれば介護予防としての効果も期待できるのではと思う。(再掲)
- ・本来のそよ風の目的とは違っていると思うが、違うなりに地域にとって必要なものとなっていると思う。しかし、こういったそよ風のような地域貢献や介護予防への取組を社会福祉法人単体で継続していくのは困難であろうと思う。又、もう1～2段サービスの質を上げていかなければ、他の地域イベントとの差が大きいが、基本的に無償の為、質の向上に限界がある。(再掲)

### 【カテゴリ5】生きがい、楽しみ(2件)

- ・そよ風が一つのきっかけとなり「生きがい」「楽しみ」になれば良いと思います。
- ・参加している地域の方々の希望やアイデアをとり入れ、自発的、主体的な活動につながられれば…。まずは自分たち関わる側も共に楽しみ「場」を継続していきたい。(再掲)

**【カテゴリ6】 法人内の別事業所の利用者への還元(1件)**

- ・デイサービス業務を行いながら、そよ風の計画が毎月のルーティンになっているが、職員の負担はやはり増えていると思われる。体力的、精神的な疲れがたまらないよう調整しているが、そうするとデイの業務が…となる。でもどの職種もやること、求められることが増えていると思いますので、ここだけではなく時代だと思います。ポジティブにとらえるとフィードバックして相乗効果を生み出すことになるため、その方向で現在捉えています。(再掲)

**【カテゴリ7】 利用者の役割(1件)**

- ・食堂は料金を頂いても良いと思います。また交代でお手伝いをして頂けたらよいと思います。

**【カテゴリ8】 利用料(1件)**

- ・食堂は料金を頂いても良いと思います。また交代でお手伝いをして頂けたらよいと思います。(再掲)

**【カテゴリ9】 地域住民のニーズへの対応(1件)**

- ・参加している地域の方々の希望やアイデアをとり入れ、自発的、主体的な活動になげられれば…。まずは自分たち関わる側も共に楽しみ「場」を継続していきたい。(再掲)



### Ⅲ. まとめ

本調査によって、地域に根ざしつつ、高齢者を含む地域住民に対する居場所提供サービスに取り組むそよ風の従事者に関する基礎的な資料が得られた。具体的には、基本属性項目として、「性別」「年齢」「出身地」「所属部署」「所属部署における職位・役職」「職種」「所属部署での合計勤務年数」「白銀会での合計勤務年数」「介護・福祉業界での合計勤務年数」「転職回数」について実態把握された。また、そよ風と直接関係する項目として、「そよ風での従事回数」「そよ風のプログラムの合計担当回数」「そよ風で担当経験のあるプログラム」「そよ風での従事のきっかけとなった人物」「そよ風での従事前の心境」「そよ風での従事後の心境」「そよ風での従事に対する業務負担感」「そよ風での従事を望む理由」「そよ風で従事したことによる自身の変化」「そよ風をはじめたことによる職場内の変化」「そよ風は職員にとってどのようなものか」「そよ風は地域住民にとってどのようなものだと思うか」「そよ風について思っていること」について実態把握された。

本調査の分析対象件数と分析手法を考慮すれば、統計的な信頼性や妥当性を有するデータに基づく解釈とは必ずしもいえないが、今後の八戸市における生活支援体制整備、なかんずく、そよ風及びその他の居場所提供サービスを行おうとする(または、既に行なっている)機関などでの支援実践やこの種の調査研究の参考資料とするためにも、分析結果より確認、あるいは可能性が示唆された主な事項を以下に示すことにしたい。

第1に、そよ風は一定程度の従事者より、他者と交流しながら生きがいや楽しみの得られる憩いの場、役割を持ち特技がいかせる場、生涯学習の場、つまり「地域における居場所」として認識されていることについて確認された。

第2に、そよ風の一定程度の従事者は、地域住民との交流やプログラムの実施・運営などを通して、福祉実践者としての成長や前向きな意識の獲得・保持につながっていることについて確認された。

第3に、そよ風での従事の未経験者は、従事後に従事に対する心境が前向きになる可能性について示唆された。また、従事前から従事に対して前向きな心境の職員は、従事後も前向きな心境が維持される可能性について示唆された。

第4に、そよ風での従事によって従事者が得た知識・技術は、当該職員の主な所属部署に一定程度還元されている可能性について示唆された。

第5に、そよ風での従事によって、法人内の業務全体における負担感は従事者の大部分において変化していないことについて確認された。一方、負担感が高まっている従事者も比較的少ないようであるが存在することについて確認された。

そよ風の中核である5つのプログラムの実施・運営は、本スペースにおける取り組みの特徴となっているが、それらを通じて、地域住民と有機的な交流を経験し、自身の成長を実感している従事者が多く存在している。その一方で、適応に難を抱き、負担感を感じる従事者も少数であるが存在するようである。そのため、当事者のモチベーションに働きかけるマネジメントがされたうえで、地域社会、利用者、従事者それぞれに肯定的な効用のある三方よしが無理なく実現されることに期待される。例えば、そよ風の従事者は法人内に主な所属部署を有しており、そこでの業務も存在するため、双方の業務の両立のための環境を当事者の意見を定期的に聞きながら整えていくことが、取り組みの継続性の観点からは重要といえよう。

既に、白銀会の職員間ではそよ風の利用価値が一定程度認識されつつあるようである。そよ風が潜在的に有する相談機能や広報機能をいかして、利用者の地域生活上の相談のるとともに、白銀会の諸事業や取り組みについて地域へ発信していくことについては、その継続が期待される。

今後、地域ニーズの把握・対応や多世代の参加を進めようと取り組みを展開する際には、地域協議体制をさらに整備し、協力の得られる関係各所や地域住民との目的的且つ有機的な連携を段階的に強化していくことが期待される。<sup>7</sup>

なお、そよ風での従事は、従事者にとって、地域福祉観が涵養されるなど福祉分野における対人専門職としての成長につながり、また、それが法人内の諸事業所でのサービスにもいかされてきているようであるが、その背景には、居場所提供サービスという地域福祉実践を通じた地域への貢献意識の向上が要因として大きく関わっていると推察される。

---

<sup>7</sup> 例えば、厚生労働省は「社会福祉法人が社会福祉充実財産を活用して地域公益事業を行うに当たっては、その取組内容に、地域の福祉ニーズを的確に反映するとともに、法人が円滑かつ公正に意見聴取を行えるようにすることが必要であることから、各地域において『地域協議会』を整備していくことが重要。」との見解を示している。  
(出所)厚生労働省. 地域協議会について.  
[https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/seikatsuhogo/shakai-fukushi-houjin-seido/04.html](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/shakai-fukushi-houjin-seido/04.html)(2019年1月11日アクセス).



平成 30 年度 八戸市における高齢者の居場所に関する調査報告書：  
社会福祉法人白銀会「地域交流スペースそよ風」従事者に対する調査編

発行所 八戸市 高齢福祉課  
〒031-8686 青森県八戸市内丸一丁目 1 番 1 号  
発行日 平成 31 年 1 月 31 日  
執筆者 小柳達也(八戸学院大学健康医療学部)

## 目次

I. 調査概要	1
1. 調査経緯	1
2. 調査目的	3
3. 調査対象	3
4. 調査期間	3
5. 調査方法	3
6. 倫理的配慮	3
7. 回収率	3
8. 調査項目	4
9. 分析方法	4
10. 本調査において使用する主な概念の定義	4
II. 分析結果	6
1. 性別	6
2. 年齢	7
3. 出身地	8
4. 所属部署	9
5. 所属部署における職位・役職	10
6. 職種	11
7. 所属部署での合計勤務年数	12
8. 白銀会での合計勤務年数	13
9. 介護・福祉業界での合計勤務年数	14
10. 転職回数	15
11. そよ風での従事回数	16
12. そよ風のプログラムの合計担当回数	17
13. そよ風で担当経験のあるプログラム	18
14. そよ風での従事のきっかけとなった人物	19
15. そよ風での従事前の心境	20

16.そよ風での従事後の心境	22
17.そよ風での従事に対する業務負担感	24
18.そよ風での従事を望む理由	25
19.そよ風で従事したことによる自身の変化	26
20.そよ風をはじめたことによる職場内の変化	28
21.そよ風は職員にとってどのようなものか	30
22.そよ風は地域住民にとってどのようなものだと思うか	32
23.そよ風について思っていること	34
Ⅲ.  まとめ	37

## 住み慣れた地域での生活を考えるワークショップの今後の展開について

### I 現状

#### 1 実施状況

市内を25の地区に分割し、平成29年度は試行的取組として3回、平成30年度からは本格的取組みとして4回実施し、市内全地区に対応した。

年度	日時	地区	参加者数
29	H29. 8. 23	白銀、小中野	住民29名、学生9名
	H29. 12. 9	白山台、長者、吹上	住民29名、学生9名
	H30. 2. 23	鮫、南浜、白銀南	住民29名、学生6名
30	H30. 6. 30	三八城、根城、柏崎、江陽	住民22名、学生8名
	H30. 11. 4	湊、上長、下長、市川、根岸	住民20名、学生14名
	H30. 11. 25	田面木、館、豊崎、南郷	住民20名、学生16名
	H31. 3. 2	是川、中居林、大館、東	-

#### 2 参加者からの評価

	平成29年度	平成30年度
良い企画である	住民89.5% 学生95.4%	住民83.5% 学生100%
継続すべき企画である	住民67.4% 学生95.4%	住民80.5% 学生95.0%

※平成30年度は平成30年11月25日実施分までの評価（3回分）

#### 3 成果

- ・住民と学生が地域の課題について話し合う場の創出
- ・地域ニーズの集約
- ・9つの対策の原案作成（ごみ捨て支援の開発・ワークショップの継続・学生支援など）

当協議会での議論を企画内容に反映させながら改善を図った結果、参加者の多数が「企画を継続すべき」と評価するものに成長した。

### II 今後の課題と対応方針

当ワークショップは生活支援体制整備事業における第2層協議体に位置付けられており、国が示している地域支援事業実施要綱によれば「地域ニーズや資源の把握」「企画立案」「情報交換」「地域づくりにおける意識統一」などを行うこととされている。

よって、今後もワークショップを続けていくが、平成31年度はより具体的な地域の問題に踏み込んでいく必要があると考えている。そこで、今以上に細かな単位での開催も試みることにしたい。

### Ⅲ 平成 31 年度の実施案

- 1 平成 29～30 年度に実施した地区ワークショップを継続し（全地区、年に 1 回実施する方針）、同時並行でテストケースとして小規模な単位での地域密着ワークショップを実施する。
- 2 地区ワークショップにできるだけ当事者（ひとり暮らし高齢者や高齢者のみ世帯の者）を動員することで、高齢者の生の声を集める。※高齢社会フォーラム提言への対応。
- 3 地域密着ワークショップについては、適宜本協議会に報告して評価等を行うこととしたい。

種別	実施地区	
地区	瑞光園エリア（白銀南、鮫、南浜） えがおエリア（白銀、湊）	寿楽荘エリア（市川、根岸） ゆとりエリア（南郷）
地区	福寿草エリア（大館、東） 修光園エリア（是川、中居林）	はくじゅ（上長、下長） やくらエリア（田面木、館、豊崎）
地区	ちょうじやの森エリア（長者、白山台） アクティブ 24 エリア（小中野、江陽）	みやぎエリア（三八城、根城） 医師会エリア（柏崎、吹上）
地域 密着	内舟渡（下長地区の一部） ※株式会社池田介護研究所の協力を得て年 2 回程度行うイメージ。	

※地区ワークショップにおける地区の割り当ては変更の可能性あり。

#### 【参考】ワークショップの内容（案）

	地区	地域密着
単位	市内 25 地区 ※地区社協・地区民児協の単位	近所・近隣 ※最小で「向こう三軒両隣」 最大で「町内の班」のイメージ
参加者の 規模	住民等 20～30 名 学生 10 数名	住民等 10 名程度（基本固定メンバー） 学生 3 名程度（1 年間固定メンバー）
時間	90～120 分	60～90 分
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・八戸市の現状と課題の説明</li> <li>・地域包括ケアシステムの解説</li> <li>・アイスブレイク</li> <li>・グループワーク</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・八戸市の現状と課題と地区の状況説明</li> <li>・アイスブレイク（初回のみ）</li> <li>・意見交換と解決策の検討</li> </ul> ※個別具体的な課題等を中心に取扱う。
従事者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第 1 層生活支援コーディネーター</li> <li>・第 2 層生活支援コーディネーター</li> <li>・外部講師</li> <li>・学生（八戸市地域包括ケアシステム推進サポーター養成研修受講者）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域密着ワークショップ世話人（仮称）</li> <li>・第 1 層生活支援コーディネーター</li> <li>・第 2 層生活支援コーディネーター</li> <li>・学生（八戸市地域包括ケアシステム推進サポーター養成研修受講者）</li> <li>・外部講師（必要時）</li> </ul>



## シニアカフェについて (五戸町「まち・カフェ」の報告)

五戸町における「まち・カフェ」の取組を視察したので、報告する。

### I まち・カフェの概要

#### (1) 目的

認知症の人を含む町民が気軽に集まる居場所を提供することによって、認知症の人やその家族を支援し介護負担の軽減を図るとともに、認知症があっても地域であたたかく見守られて安心して暮らすことができる環境の構築。

#### (2) 実施の経緯

認知症初期集中支援チームの立ち上げを機に、認知症カフェの一環として開始。

#### (3) 事業開始年度

平成 27 年度（平成 28 年 1 月から） ※27 年度はトライアルで 3 回開催。

#### (4) 事業の位置づけ

介護保険法第 115 条の 45 第 2 項第 6 号（認知症総合支援事業）における認知症地域支援・ケア向上事業として実施。

#### (5) 実施主体

五戸町福祉課 ※地域包括支援センターによる直営

#### (6) 従事者

- ・地域包括支援センター職員や看護師等の医療職のほか、ボランティアが従事。
- ・食品販売事業者（移山寮 ※障がい者施設）が軽食等の販売を実施。

#### (7) 実施内容

- ・飲食、物作りなどの趣味活動、レク活動、体操、会話などを通して、高齢者や関わる地域住民、スタッフ間の交流を図る。
- ・認知症に関する正しい知識の普及啓発（「まち・カフェ通信」の発行）。
- ・毎月 1 回、第 2 木曜日（1 月及び 2 月はインフルエンザの流行時期であることを考慮して休止）、10 時から 12 時まで定期的に開催。
- ・実施場所は五戸総合病院待合室の一部を活用。以前は目隠しのためのしきりを設置していたが、現在は撤去している。
- ・利用料は無料（材料費等の実費は各自負担）。
- ・認知症の人のほか、障がい者や子どもも利用可能なオープンな場としている。受診の前後に寄

- る人や、子どもの診療中に寄る保護者も見られる。毎回 30 人～40 人が利用。
- ・年度初めに開催日程をちらしで周知。裏面には介護予防教室の開催日程も掲載。

## (8) その他

カフェに参加すると 1 ポイント付与。8～10 ポイント貯まると、手づくりのバッグをプレゼントしている（以前はカードを渡していたが、忘れることが多いため、参加者名簿で管理）。

まち・カフェから派生した住民主体の通いの場を以下に紹介する。

## II 住民主体の通いの場①（にこにこクラブ）

### (1) 実施の経緯

五戸町切谷内に毎週火曜日・金曜日に移動販売車が来ているが、買い物客が地面に座っておしゃべりをしていたことから、「何とかできないか」と思いカフェの運営を始めた。

### (2) 実施主体及び従事者

にこにこクラブ

→代表の館氏のほか、友人だった元保健師や学校の先生、町役場職員 0B、農家等のスタッフ 6 名で運営（男性 1 名、女性 5 名）。

### (3) 実施内容

- ・毎月 1 回、最終火曜日に切谷内公民館で定期的に開催。時間は 1 回 2 時間程度。12 月は 1 週前倒して開催。
- ・公民館の使用料はかかっていないが、暖房代（灯油代）は負担している。
- ・カフェへの参加は集落の住民を対象としており、会員は 40 名程度。ほとんどが女性で、少ないときでも 20 名程度参加。
- ・参加費として 1 人につき 100 円を徴収。お茶やのど飴等のお菓子のほか、誕生日の会員にはプレゼントに充てている。
- ・活動の目的は介護予防・認知症予防であるが、認知症予防であることがわからないようにゲームやパズルをやって楽しんでもらっている。
- ・年明けには特殊詐欺被害防止の講習会も開催予定。

### (4) その他

- ・参加者のやりたいことを活動メニューに反映しようと意見を聞いても、参加者から意見が出てこないため毎回メニューを考えるのが大変だが、運営を担うスタッフ（館さんにとっては「パートナー」）の意見も参考に、考えることも楽しんでいるとのこと。
- ・カフェの参加対象となる住民については、今後も集落の住民に限りたいとのこと。
- ・また、現在月 1 回の開催としているが、開催回数を増やすと運営の負担が増すことから、増やす予定はなし（冬場に限り月 2 回の開催を参加者に提案したが、希望者なし）。

### Ⅲ 住民主体の通いの場②

#### (1) 開始の経緯

五戸町地域包括支援センターがまち・カフェを開始後、地区に1つカフェがあることが理想であるとの呼びかけがあり、自治会に相談したところ協力が得られることになったことから、平成29年2月から開始。

#### (2) 実施主体及び従事者

主催は下大町自治会で、運営メンバーは江渡氏が知人の保健推進員や食生活改善推進員、婦人会役人に個別に声がけして集めた。

#### (3) 実施内容

- ・昨年度までは自治会からの助成を運営経費（お茶代として年間6千円）として、無理しない程度に隔月で開催していたが、今年度からは町の助成金を活用し、毎月1回、第2水曜日に町立公民館のロビーで開催。
- ・教材費及びお茶代を補助金と自治会からの助成でまかなっており、参加者の自己負担はなし。
- ・カフェの参加者はスタッフ込みで平均15～16人程度。最高齢で90歳の人もいる。
- ・公民館で活動しているコーラスのクラブとコラボする活動も生まれている。
- ・活動メニューは五戸総合病院で行われているまち・カフェの内容がベースとなっており、絵を書いたり、雑誌に掲載されている間違い探しをしたりしている。機材が必要な場合は町から借りている。
- ・12月には栄養士を招いた講習会も開催予定。食事を食べながら行うことを予定しており、材料費として100円徴収することも検討中。

#### (4) その他

- ・カフェ開催のお知らせは自治会の回覧板で周知している。
- ・カフェの運営については介護予防のほか、見守りということも意識している。
- ・カフェを始めてから地域の情報がよく入ってくるようになった。カフェに来ているうちに、明るくなった人もいる。
- ・男性の参加者が少ないのが課題であるが、会場の設営や片づけといった何かしらの役割を担ってもらおうと来てもらえるようになるのではないかと考えている。
- ・地域でカフェを運営する際には、モデルとなる取組があるとよい。五戸町においては包括のカフェがその役割を担っているが、荒町では民生委員が下大町の取組を見てカフェを始めている。
- ・カフェが町内各地区で運営されるようになり、電球の交換やごみ捨て支援といった生活支援サービスを実施できるようになればよいと考えているとのこと。
- ・下大町では、町立公民館を会場としたカフェのほか、カフェを畑で開催するなど、複数のカフェを運営してはどうかという意見も出てきているとのこと。

## IV まとめ

### (1) 五戸町のカフェの目的

五戸町では介護予防、余暇の活用、見守りなどの多様な目的があるが、活動を継続する中で意味が生じてきた側面がある（実践が先行）。

### (2) 活動の広め方

まち・カフェが波及し、住民主体の活動が生み出されている。カフェの実践者から「モデルとなる取組があると良い」との意見が挙がっている。また、地域のキーパーソンが存在するか否かも重要な要素であると思われる。

【ポイント】五戸町のようにモデルとなる取組を先行させるか否か。

【ポイント】地域のキーパーソンをいかにして見つけるか。（どう広めていくか）

### (3) 運営の担い手

モデルとなる「まち・カフェ」は官製であるが、派生した活動は全て住民主体である。

【ポイント】活動の担い手や企画イメージの検討。

### (4) 対象者

住民主体の活動については、年齢は65歳以上で一定の居住地に限っている。

【ポイント】対象者を明示するべきか、ある程度の余裕を持たせるべきか。

### (5) 参加費のあり方

まち・カフェは無料だが、住民主体の活動ではお茶代やお菓子代として、1回100円程度を徴収することもある。なお、地域交流スペースそよ風利用者への調査でも、過半数が一定の費用負担を肯定していることを付言する。

【ポイント】妥当な費用負担とは。

### (6) 実施内容

飲食、物作りなどの趣味活動、レク活動、体操、会話などを実施している。利用者からの要望があまり出ないこともあるため、企画を担う人材が重要である。

【ポイント】人材の確保。